

長野市の埋蔵文化財第9集

四ツ屋遺跡
(第1～3次)

徳間遺跡

塩崎遺跡群
(第3次)

1980・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

四ツ屋遺跡

- 清野小学校校舎地点遺跡発掘調査報告——
- 清野小学校プール地点遺跡発掘調査報告——
- 清野保育園地点遺跡発掘調査報告——



土塚墓付近出土五輪塔

序

文化財の保護を適切に行うには、所有者の深い理解と市民の協力を合わせて、地方公共団体の積極的な処置が必要とされております。

文化財には幾多の種別がありますが、その中でも当市内に所在する 1,200カ所を越える埋蔵文化財の包蔵地と古墳の保存については、その保存すべき地域が広く、所有権・財産権等があり、これら文化財の保護・保存には、大変困難な問題が存在しております。このため、特に関係者の協調的なご理解と、建設的なご協力をいただかなければ、これを全うすることができません。

特に埋蔵文化財包蔵地については、緊急かつ重要な開発ないし地域の著しい人口増加、社会の急激な変化等の諸事情から、保存と開発との調整を図らなければならないものもあります。

本書は、次に掲げる遺跡について、それぞれに説明するような事由により、開発が行われることになり、いずれも教育委員会において協議が重ねられ、避けられない緊急の事態から、記録保存することが決められ、その調査の結果を、「長野市の埋蔵文化財」第9集として刊行したものであります。

1. 若槻の徳間遺跡

周辺団地の急激な増加から、徳間小学校を新設することになったものである。

2. 清野の四ツ屋遺跡

清野小学校の校舎と同校プールの建設および既存保育園の統合により、同地へ清野保育園を新しく建てることになったものである。

3. 塩崎遺跡群

塩崎小学校は、現在遺跡群の中にあつて、その中で管理棟の老朽化に伴い、改築することになったものである。

発掘調査は、当市が委託した長野市遺跡調査会が当りましたが、現地において実際に担当しましたのは、同調査団の構成者であります。

本書により教育・文化・学術・研究等の各分野において、悠久な古代人の実生活の一端を知ることができると共に、遺跡・遺物等の保存への関心を、一層高めていただけるならば幸甚のいたりであります。

いま、この報告書を眼前にして、記録保存の使命に徹し、各遺跡において精進努力された長野市遺跡調査会・同調査団の方々、ならびに現地3カ所において、発掘調査に限りない情熱を傾けて、ご援助やご協力をいただいた地域の多数の皆さんに、また関係機関のご理解とご配慮に対し、衷心からお礼を申し上げます。

昭和55年3月

長野市長 柳 原 正 之

序

近年当市では、埋蔵文化財の発掘調査を年々3ヵ所以上行ってきておりますが、昭和54年度は特にその個所数が多く、従って発掘調査関係者のご努力はもとより、現地の方々の多大な配慮とご協力をいただけてきました。

遺跡を発掘調査するには、当然記録保存することを、唯一の前提として実施されますが、当教育委員会では既に8冊の報告書を刊行いたしました。本書はそのあとを受けて、「長野市の埋蔵文化財」第9集として、公刊したものであります。

ここへ収めた埋蔵文化財発掘調査の対象となった遺跡は、市内の東北部若槻に位置する徳間遺跡、南部の千曲川の南側、妻女山の尾根を西に仰ぐ位置にある四ツ屋遺跡、ならびに西南寄りの千曲川と篠ノ井線のほぼ中央に所在する、塩崎遺跡群の3遺跡であります。

まず、徳間遺跡は徳間小学校の建設に伴うものであり、四ツ屋遺跡は清野小学校の校舎と同校のプールならびに清野保育園の各建設によるものであります。また塩崎遺跡群は、同群のうち塩崎小学校地点にあたる第3次の発掘調査で、同校の改築によるものであって、いずれも緊急かつ社会的要請の強い要因に基づく発掘調査であります。

発掘調査は、長野市教育委員会から委託を受けた、長野市遺跡調査会があたりましたことは、従前通りですが、3遺跡の発掘調査結果は、文化や学術上の一拠点となり、さらに価値に富む内容となって、本書へそれぞれ収められました。このような次第で、この報告書により、各遺跡の特徴・出土遺物の状況・その時代背景などを知ることができるでしょう。

本書が広く関係者に利用されることはもちろん、教育・学術・研究などの分野において、じゅうぶん活用していただきますとともに、古代の一時期における文化発達のあとをきわめることができますならば、非常に幸いであります。

終りに、この報告書の刊行にあたり、長野市遺跡調査会、同調査団の団長・調査員の皆さん、ならびに各地域において、発掘調査の円滑な遂行のため、配慮や諸連絡にあたられた多くの協力者、また直接現地の発掘調査に本腰を入れられ、きびしい炎天にめげず汗を流して、ひたすら記録保存の成果を期せられた多数の人々に、厚くお礼を申し上げます。

昭和55年3月

長野市教育委員会教育長 中村博二
長野市遺跡調査会長

凡 例

- 1 調査及び調査報告書にたいする指針は、各調査遺跡報告の前に例言として記した。
- 2 各調査遺跡報告書の執筆は、各調査員の独自性を生かし、一部報告書の統一性をはかるため手直した所もあるが、そのまま提示してある。
- 3 遺構番号については、検出順に付すが四ツ屋遺跡・塩崎遺跡群のみ、その煩雑を避けるため、調査順に一連番号とした。
- 4 名称については、住居址をSB、土坑をSK、溝址をSDと記し、各遺構との混乱を避けるため、住居址及び堅穴状遺構、建物址に号を付し、他は遺構名のあとに番号を付した。
尚遺構名については、種々説があるが従来表現によった。
- 5 遺構図・遺物図は執筆者及び整図者の意向により縮尺が異なっている。図中の尺度を参考にされたい。
- 6 遺物図中、四ツ屋遺跡（清野小学校プール地点）のみ、断面を塗り潰すことにより須恵器を、白抜きものを土師器と表現した。他の遺跡・調査においてはロクロ目の表示により須恵器・土師器を別けている。
- 7 同図中復元可能なものを鎖線で表現し、赤色塗彩されるものは淡朱色点で、黒色処理されるものは小黒点で表し、灰釉陶器には施釉範囲を細線で表示し、方向を↓で表示した。また青磁陶器については施釉の厚さを白抜きにした。
- 8 石器等の使用痕が確認できたものは、その範囲を矢印で表した。
- 9 鉄器の実測にあたっては、錆を除いた後の形態を示し、不明な点は現状をそのまま図化した。
- 10 地図等については、長野市が国土地理院承認のものを使用した。

例 言

- 1 本書は長野市・長野市教育委員会と四ッ屋遺跡調査会・長野市遺跡調査会との埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書に基づいた緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は昭和51年度に清野小学校舎改築地（第1次）、昭和54年度に清野小学校プール地（第2次）・清野保育園地（第3次）を実施した。
- 3 本書は調査の性格から、それにより検出された遺構・遺物を主に提示することを主眼においた。尚遺物の計測等の詳細は（各次調査章）末に表にして記した。
- 4 本報告書をまとめるにあたり、第1次調査の遺構図は矢口が整図し、遺物の実測を森山があたり、整図を宮下が行なった。第2次調査のそれは星を中心に調査員全員であたり、第3次調査の遺構整図は小林（秀行）が行い、遺物実測は青木（和）・奈須野・石上・小林・直井があたり青木（和）・石上が整図した。
- 5 遺構写真は第1次調査で小林秀夫、第2次調査で星、第3次調査で矢口が主として担当し、遺物については第1・3次のものを竹内が、第2次を星が行った。
- 6 土器の拓影は第2次のものを星が、第3次を奈須野が主として担当した。
- 7 各章・節・目の執筆は、各調査員の担当遺構カードを基礎に調査員協議のもとに行い、文責を文末に記した。
- 8 出土図示土器（遺物）一覧表の作成は、第1次を直井・青木（和）が、第2次を星が、第3次を直井・青木（和）が担当した。
- 9 遺物や調査によって得た諸記録は、個人記録をのぞいて、長野市教育委員会で保管している。
- 10 本書の編集、印刷関係の業務は長野市教育委員会で行った。

本文目次

例 言

第1章	遺跡周辺の環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第2章	清野小学校校舎地点の調査	4
第1節	発掘調査の経過	4
第2節	住居址	8
第3節	小堅穴址	31
第4節	土壇墓及び土壇	34
第5節	溝址	39
第6節	包含層出土の遺物	45
第3章	清野小学校プール地点の調査	63
第1節	発掘調査の経過	63
第2節	住居址	67
第3節	堅穴状遺構	71
第4節	井戸址	80
第5節	建物址	85
第6節	土壇	90
第7節	包含層出土の遺物	92
第4章	清野保育園地点の調査	115
第1節	発掘調査の経過	115
第2節	住居址	118
第3節	土壇墓及び土壇	140
第4節	溝址	151
第5節	包含層出土の遺物	153
第5章	結語	166

挿 図 目 次

第1図	四ツ屋遺跡(調査地)周辺図	2
第2図	調査地周辺地形図	3
	(清野小学校校舎地点)	
第3図	遺構分布図	4
第4図	第1号住居址、ピット群実測図	8
第5図	第1号住居址出土土器	9
第6図	第2号住居址実測図	9
第7図	第2号住居址出土土器	10
第8図	第3・4号住居址実測図	11
第9図	第5号住居址実測図	12
第10図	第5号住居址出土土器	12
第11図	第6号住居址、溝址5実測図	13
第12図	第6号住居址出土土器	13
第13図	第7号住居址出土土器	14
第14図	第7号住居址実測図	14
第15図	第8号住居址実測図	15
第16図	第8号住居址出土土器	15
第17図	第9号住居址実測図	17
第18図	第9号住居址出土土器(1)	18
第19図	第9号住居址出土土器(2)・銅釧	19
第20図	第9号住居址出土土器(3)	21
第21図	第9号住居址出土土器(4)	22
第22図	第10・11号住居址実測図	24
第23図	第10・11号住居址出土土器	24
第24図	第12・13・16号住居址、溝址12・13・14実測図	25
第25図	第12・13号住居址出土土器(1)	26
第26図	第12・13号住居址出土土器(2)	28
第27図	第12・13号住居址出土土器(3)・石器	29
第28図	第14・15号住居址実測図	30
第29図	第14号住居址出土土器	30
第30図	第15号住居址出土土器	31
第31図	小竪穴址1(SK12)・2(SK13)実測図	32

第32図	小堅穴址及び周辺出土遺物	32
第33図	土塚墓(SK1)実測図、出土刀子	33
第34図	土塚4・11・14出土土器	34
第35図	上部土塚群実測図	35
第36図	下部土塚群実測図	37
第37図	溝址13出土土器	40
第38図	溝址4出土土器	41
第39図	包含層出土の弥生時代式土器	42
第40図	包含層出土土師器・須恵器	43
第41図	包含層出土須恵器・灰釉陶器・土製品	44
第42図	包含層出土鉄製品	46

(清野小学校プール地点)

第43図	遺構分布図	64
第44図	第16・17号住居址実測図	67
第45図	第16・17号住居址出土土器	68
第46図	第17号住居址、井戸址3出土土器	69
第47図	第16・17号住居址出土土器拓影	70
第48図	第1～3号堅穴状遺構及び井戸址1・2実測図	71
第49図	第1号堅穴状遺構出土土器	72
第50図	第1・2号堅穴状遺構出土土器拓影	73
第51図	第1号堅穴状遺構出土土器	74
第52図	第1号堅穴状遺構出土土器	75
第53図	第2号堅穴状遺構出土土器及び拓影	76
第54図	第2号堅穴状遺構出土土器	77
第55図	第2号堅穴状遺構出土土器	78
第56図	第3号堅穴状遺構出土土器及び拓影	79
第57図	井戸址3実測図	80
第58図	井戸址1・2、土塚43出土土器	80
第59図	井戸址1・2出土土器	81
第60図	建物址、土塚42実測図及びトレンチ位置図	82
第61図	トレンチ断面図	83
第62図	建物址、包含層出土土器	84
第63図	建物址出土土器拓影	85
第64図	建物址出土土器	86
第65図	建物址出土土器	87

第66図	I トレンチ出土土器	88
第67図	Ⅲ～V トレンチ出土土器	89
第68図	I・Ⅲ～V 出土土器拓影	90
第69図	土塚40・41・43実測図	91
第70図	土塚41～43出土土器	91
第71図	土塚40～42出土土器拓影	92
第72図	グリット及び区域外出土土器拓影	92
第73図	グリット出土土器	93
第74図	グリット及び区域外出土土器	94
第75図	区域外出土土器、第17号住居址、第2・3号堅穴状遺構出土遺物	95
第76図	出土墨書集成	96

(清野保育園地点)

第77図	第18号住居址実測図	118
第78図	遺構分布図	118
第79図	第18号住居址出土土器	119
第80図	第19号住居址実測図	120
第81図	第19号住居址出土土器	120
第82図	第20号住居址実測図	121
第83図	第20号住居址出土土器	121
第84図	第21号住居址及び土塚81・82実測図	122
第85図	第21号住居址出土土器	123
第86図	第22・23・33号住居址、土塚56実測図	124
第87図	第22・23号住居址出土土器	124
第88図	第24号住居址実測図	125
第89図	第24号住居址出土土器(1)	126
第90図	第24号住居址出土土器(2)	127
第91図	第24号住居址出土土器拓影	127
第92図	第25号住居址、溝址15実測図	128
第93図	第25号住居址出土土器	128
第94図	第25号住居址出土土器拓影	129
第95図	第26号住居址、溝址19実測図	130
第96図	第26・27号住居址出土土器	130
第97図	第27号住居址実測図	131
第98図	第28号住居址、土塚86実測図	132
第99図	第28号住居址出土土器	133

第100図	第28号住居址出土土器拓影	134
第101図	第30号住居址実測図	135
第102図	第30号住居址出土土器	136
第103図	第31号住居址実測図	137
第104図	第31号住居址出土土器	138
第105図	第32号住居址実測図	139
第106図	第32号住居址出土土器	139
第107図	第32号住居址出土土器拓影	140
第108図	土塚墓2～4実測図	141
第109図	土塚墓周辺出土五輪塔	141
第110図	土塚群(44～54・56～58・71・73・74)実測図	147
第111図	第34号住居址、土塚群(59～67・76)実測図	148
第112図	土塚群(68～70・72・75)実測図	149
第113図	土塚77・80・81、溝址15・23・20実測図	150
第114図	溝址15・16・17・18・20出土土器	152
第115図	溝址15・18出土土器拓影	153
第116図	包含層出土土器(1)	154
第117図	包含層出土土器(2)	155
第118図	包含層出土土器拓影及び石器・鉄器	156

付 表 目 次

(清野小学校校舎地点)

第1表	上部土塚群一覧表	36
第2表	下部土塚群一覧表	37
第3表	出土図示土器一覧表	47

(清野小学校プール地点)

第4表	出土図示遺物一覧表	97
第5表	出土土器拓影一覧表	112

(清野保育園地点)

第6表	第4号頭蓋骨主要計測値及び示数	143
第7表	土塚一覧表	146
第8表	溝址出土遺物	153
第9表	出土図示土器一覧表	158

図 版 目 次

- 第1図版 四ツ屋遺跡調査地遠景
(清野小学校校舎地点)
- 第2図版 上部遺構分布状態
- 第3図版 第1～3号住居址・柱穴群
- 第4図版 第7・8号住居址
- 第5図版 第9号住居址
- 第6図版 第10～13号住居址
- 第7図版 小堅穴址1・土塚墓・上部土塚群
- 第8図版 下部土塚群・溝址13・14
- 第9図版 第9号住居址出土土器(1)
- 第10図版 第9号住居址出土土器(2)
- 第11図版 第9号住居址出土土器(3)・銅釧
- 第12図版 第12・13号住居址出土土器・紡錘車
- 第13図版 溝址13出土土器
- 第14図版 溝址13・4・その他出土遺物
- 第15図版 調査スナップ
- 第16図版 調査スナップ
(清野小学校プール地点)
- 第17図版 清野小学校プール調査地
- 第18図版 第16・17号住居址
- 第19図版 第17号住居址遺物出土状態
- 第20図版 第17号住居址遺物出土状態
- 第21図版 第1～3号堅穴状遺構
- 第22図版 井戸址1～3・土塚43
- 第23図版 建物址
- 第24図版 第16・17号住居址出土土器
- 第25図版 第17号住居址・井戸址3出土土器
- 第26図版 第16・17号住居址出土土器
- 第27図版 第1・2号堅穴状遺構出土土器
- 第28図版 第2・3号堅穴状遺構出土土器
- 第29図版 建物址・土塚21・40～42出土土器
- 第30図版 I・IIIトレンチ出土土器

- 第31図版 IV・Vトレンチ・グリット出土土器
- 第32図版 第1・2号堅穴状遺構・建物址・井戸址1・2・土壇43・グリット
出土土器
- 第33図版 第17号住居址・第2・3号堅穴状遺構出土遺物
- 第34図版 出土墨書
- (清野保育園地点)
- 第35図版 住居址分布状態
- 第36図版 第18・20号住居址
- 第37図版 第21～23・33号住居址
- 第38図版 第24・25号住居址
- 第39図版 第26号住居址炉・第27号住居址
- 第40図版 第28・30号住居址
- 第41図版 第31・32号住居址
- 第42図版 土壇墓2～4・土壇56・71
- 第43図版 土壇群・溝址
- 第44図版 土壇群・溝址
- 第45図版 第18・21・22・24号住居址出土土器
- 第46図版 第25・27・28号住居址出土土器
- 第47図版 第30号住居址出土土器
- 第48図版 第30・32号住居址・溝址3出土土器
- 第49図版 包含層出土土器
- 第50図版 土壇58・その他出土石製品
- 第51図版 調査スナップ

第1章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

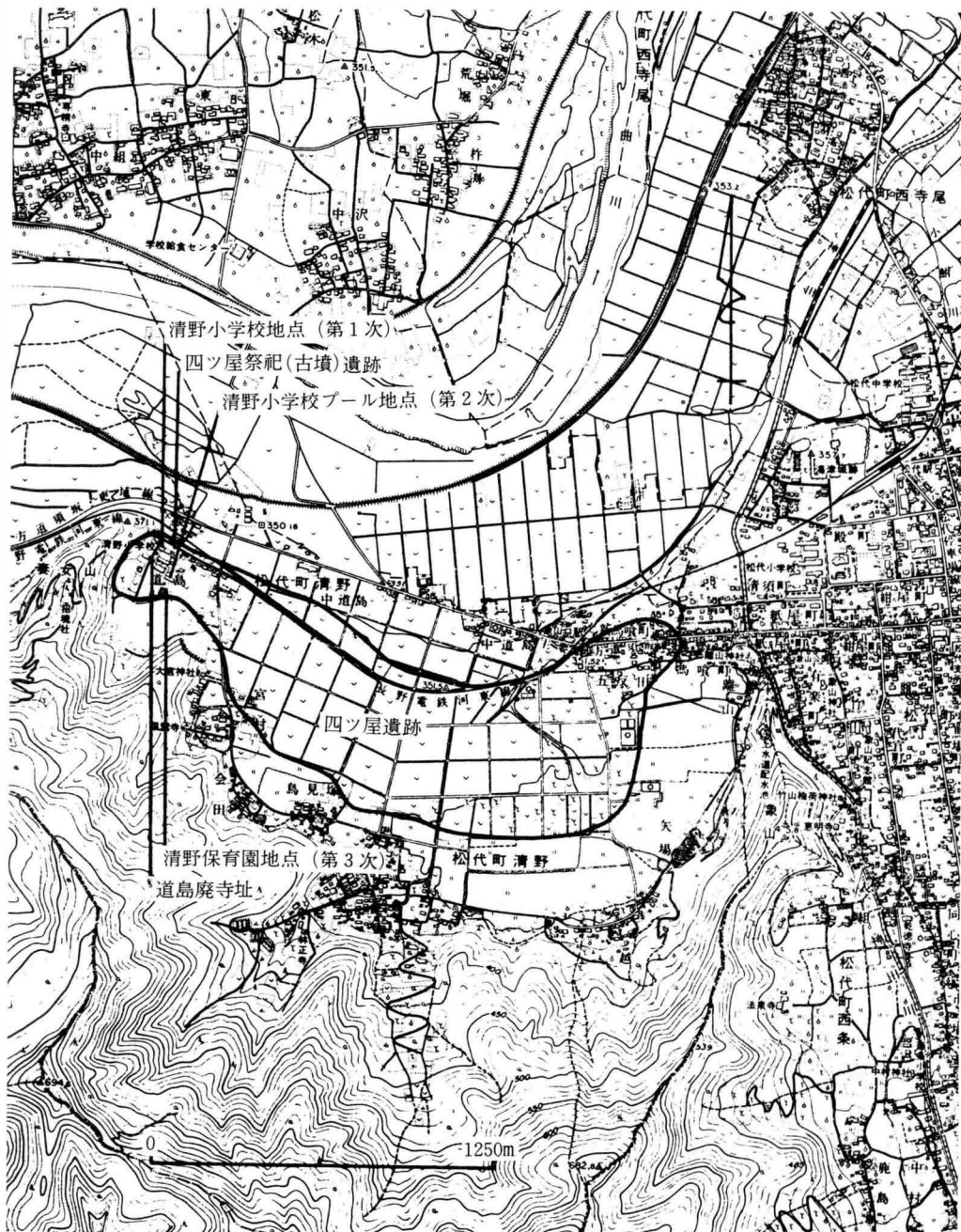
四ツ屋遺跡は長野市松代町清野地籍にある。東西の山間地を縦貫し、各山系突出部にぶつかり蛇行しながら流下してきた千曲川は、更埴地方に広い沖積地を形成するのであるが、長野市篠ノ井に至ると、犀川の堆積におされいままでも南北であった流路が、大きく屈曲し東西方向になり古くは東の山系山麓をえぐるようにして流れていた形跡がある。また松代に至ると、松代扇状地を形成する神田川等の押し出しによって再び流路を南北にとるようになる。四ツ屋遺跡はこの東西流路の範囲に入る位置にある。この地は妻女山と象山が突出し、内懐が広い穹入した地形になる。このため、犀川の堆積におされた古い千曲川はこの懐の山麓部をぬうようにして流れ、現在三ヶ月湖様の湿地を残し、蓮田・水田となっており、また長野電鉄河東線の北側は比高差1m以上ありここも千曲川の流路の形跡がある。これらにかこまれた東西約1.7km、南北最大巾約450mの帯状の自然堤防の微高地になる。尚この自然堤防は千曲川の右岸松代城跡、松原、大室へと続くものである。この微高地を詳細にみれば、北から南に緩く傾斜するようで、遺物の散布も北側から採集される量が多い。土質は全体に砂質地で、遺跡全体は宅地を除きすべて畑地となる。

調査地はこの遺跡西端の妻女山東側に位置し、標高352.9～351.2mの範囲にあり、南側の後背湿地で350mを測る。後に大きな蓮池（田）とよばれる湿地が残り、生産地をひかえた絶好の位置にあるといえる。

第2節 歴史的環境

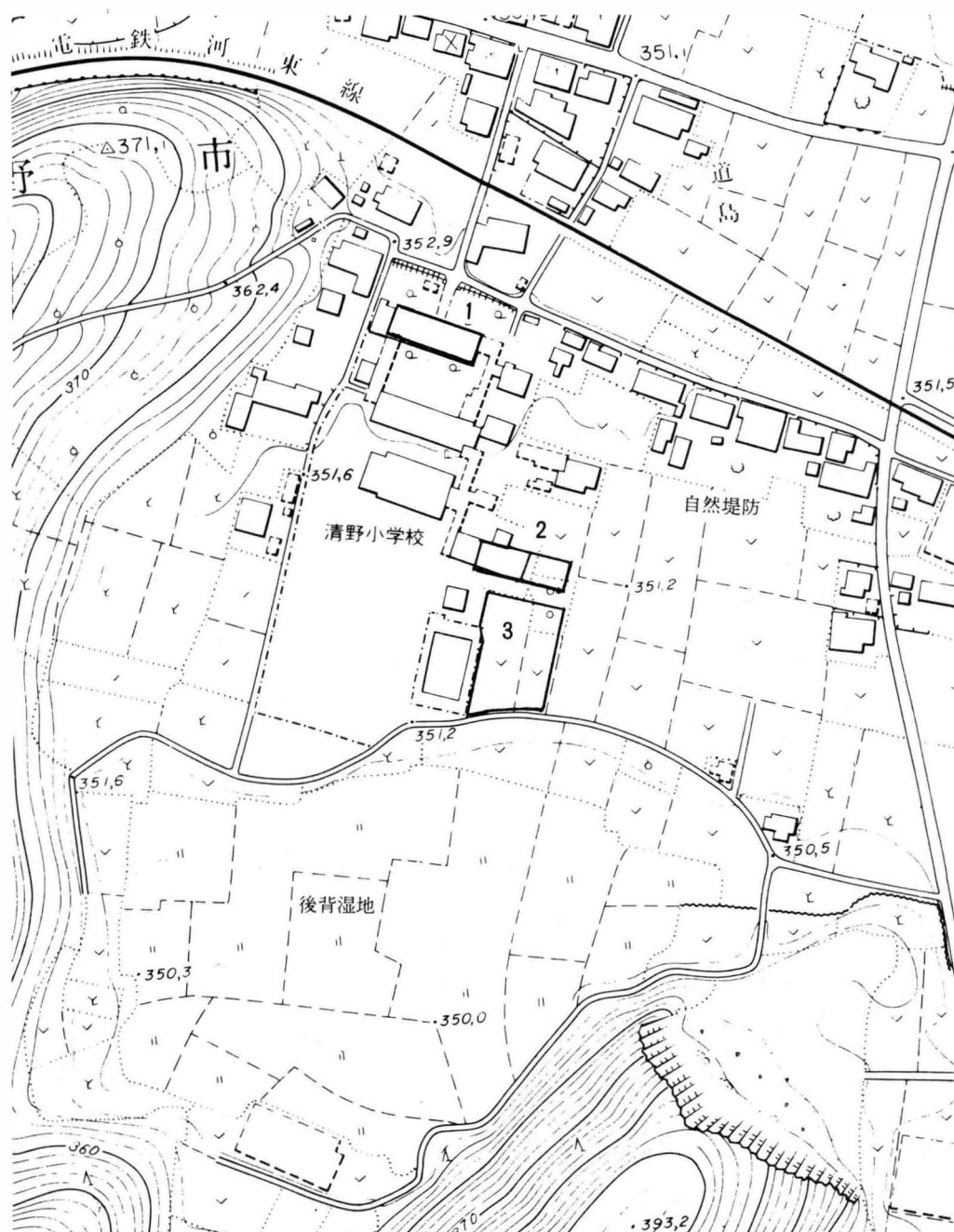
真田十萬石の城下をひかえ、中・近世では陰におしやられた感があるが、考古学的にみれば重要な遺跡があり、また注目される遺物が多い。この遺跡は弥生時代後期の箱清水期になって大展開をもたらすようで、その資料については数々の報文がある。これらはそのほとんどが調査地周辺のもので、これに後続する遺物にもみるべきものがあり、古墳時代初頭に編年され、また畿内・東海系の土器が出土している。遺構・遺跡としては、調査地とすぐ近接し、埴輪円筒列をめぐらし、径20mの円形周溝を有し、古墳というよりも周溝墓・台状墓と考える説が有力である四ツ屋祭祀(古墳)遺跡、そして西側には時代を遡るが、布目圧痕瓦を出す道島廃寺址があり、古代行政・文化の中心にかかわりのあった地とも言える。ただ松代沖積面を前面にして古式古墳に白銅鏡片及び伝滑石製刀子2点出土した径33mの舞鶴山第1号古墳、及び長軸40.8mの前方後円墳形態を呈する同第2号が想定されているが、これは象山山系を越えた東側にあ

り、この四ツ屋遺跡を対象にしたものとは思えず、むしろ伝承も根拠もないのであるが、妻女山古墳にみるとおり、その下段の上杉謙信の陣を張った地点にあった可能性があるのではないかと考えている。近辺にある古墳に清野古墳が2基確認されている。これは妻女山から東北に突出した山嘴の頂部にあり、径15m程度の円墳が山稜にそって2基並び、土墳で主体部は



第1図 四ツ屋遺跡(調査地)周辺図

不明である。あるいはこれが古式古墳の範疇に入るものとも考えられるから、意外と古いもの
 かもしれない。いずれにしても興味をそそる古墳のあり方である。 (矢口忠良)



第2図 調査地周辺地形図

- 1、清野小学校校舎地点
- 2、同校プール地点
- 3、清野保育園地点

第2章 清野小学校校舎地点の調査

第1節 発掘調査の経過

1 経過

長野市・長野市教育委員会が進めている老朽校舎の改築事業には、第1の要件として老朽校舎の解消にあるが、背景に市街化、団地化に伴う児童増がある。この清野小学校の対象とする通学区は千曲川沖積地には珍らしく、純農村地域で、旧岩野村・清野村の2村があたる。この地は第1章でみられるとおり、古くから長芋の収穫及び深耕に際し遺物が集中して出土することが知られており、また学術上著名の遺跡であった。この改築計画では半永久的なもので、地下に埋蔵される文化財が破壊される恐れがでてきたため、担当の学校施設課と協議を重ね、緊急に発掘調査を実施することにしたが、この年更に学校改築地の三輪小学校遺跡の第2次調査も予定しなければならなかった。これらの事業は工期が限られ、また同一期間の工事発注であったので、初の試みとして同一時期、2遺跡同時調査を計画しなければならなかった。幸い調査期間が、調査員の先生方及び学生の夏休みにあたっていたため、急ぎ調査会を結成し、三輪小学校遺跡の団長に米山一政先生をお願いし、本調査団長として森嶋先生に依頼し、これにより二班を編成して調査にかかることにした。調査期間は昭和51年7月25日から8月12日とし、作業員に学校施設課をとおして、PTAの会員へ協力をお願いし、器材の調達・配分作業を行いながら本格調査へ対応した。

2 調査日誌

7月17日 青少年の家にて、三輪小学校遺跡調査団と合同で調査団会議を開き、調査体制を整える。

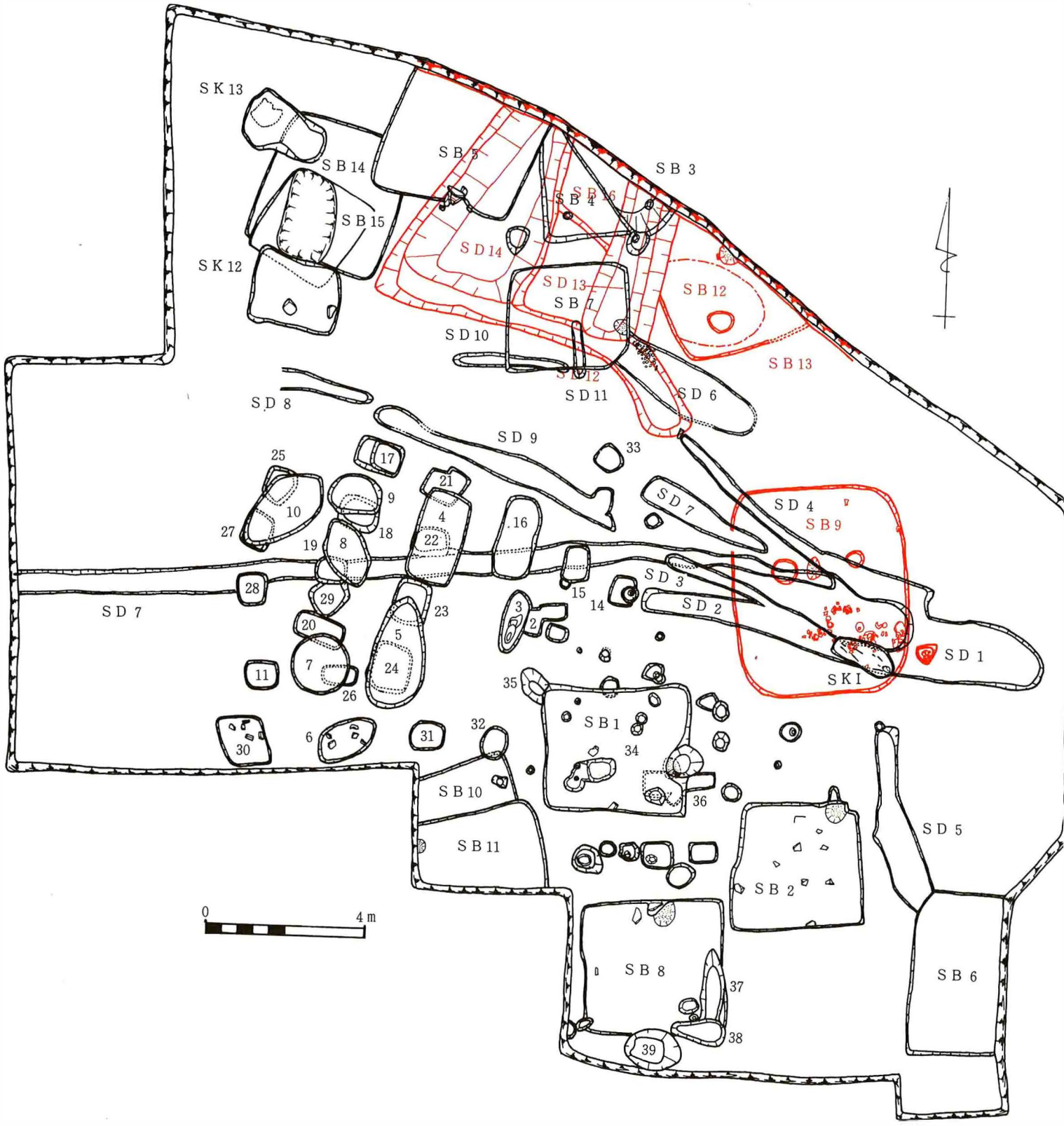
7月23日～24日 旧校舎の解体が終わり、本日より表土除去をブルトザーにて行う。また除去土集積地を調査予定地西側に求めたため、その下は調査未了である。

7月25日 森嶋団長参加のもとに結団式及び調査に際して「本調査は学術調査であること、怪我をしないように、そして仲よく」との諸連絡、注意説明を行い本格的調査に入る。南北軸を主に3mグリットを設定する。

7月26日～31日 昨日設定したグリットを東端から順次千鳥にあけ遺構の存在を確認する。

7月27日 遺構発見順に番号を付し、周辺のグリットを調査後グリットを拡張し、遺構プランの追求を行い、第1号住居址より調査にかかる。この周辺にピット群が散在する模様。

7月28日 第2・3～5・7号住居址周辺の拡張とプランを露呈後、第2・3・5・7号住居址の調査を開始する。この時番号は付してなかったが、土塚1より人骨頭部を発見し、大さわぎになる。第1号住居址完掘し、写真撮影・実測作業を行う。



第3図 遺構分布図

7月29日 昨日と同様作業を行う一方新たに第6・8号住居址及び周辺のピット群の調査にかかる。第3・5・7号住居址完掘後写真撮影・実測を行う。土坑1の人骨は伸展葬にて1体分ある模様。収納施設プランの追求を行なった結果楕円形の浅い落ち込みが認められた。

7月30日 西方のグリット調査を進めると西端付近を除き全面に遺構が認められるようであったので、全面の覆土を除去する方針を決め、昨日からの調査を継続しているものを除き他の者全員でこれにあたる。第2・6・8号住居址完掘し、写真撮影・実測作業を行う。人骨鑑定について信大医学部西沢技官に調査を依頼する。

7月31日 昨日に引き続き調査地覆土の除去を行うも、雷雨があり、一輪車による運搬は困難を極めたが、遺構面は砂地であったので調査にはそれ程影響がなかった。第4号住居址・溝址6・10・11の調査を開始する。ピット群の写真撮影・実測を行う。

8月1日 前日から開始した遺構は比較的単純なものであったので、午前中にはほぼ終了し、写真撮影・実測作業にかかる。土坑群のプラン追求後、確定したものから掘り下げる。溝址1は2～4と接継するものと思える。土坑1の隣りから後にわかったことであるが第9号住居址に付属する台付甕が出土した。

8月2日 土坑1をさげ溝址1～5・9・8及び小堅穴（SK12・13）の調査を開始する。SK13に焼土及び鉄滓粒が集中して認められた。他は注意深く調査をすすめた結果下部に掘り方様土坑がある模様。

8月3日 溝址1～4周辺に住居址（9号）がある模様で、第3～5号住居址付近に溝址又は住居址がある可能性が出土遺物、覆土の相違からでてきたため、調査を進める。上部土坑群・ピット群・溝址・小堅穴の写真撮影・実測作業を行う。西沢技官来訪し、土坑墓の人骨採集する。

8月4日 上部土坑群の実測がすんだところから、下部土坑群の検出にかかる。第9・15号住居址の調査する他、昨日と同作業を行う。溝址1～5・9・8の実測をする。

8月5日 第15号住居址の調査精査後、第14号住居址の調査にかかる。一部溝址7の調査をする他は昨日の調査を進める。

8月6日 下部土坑群・溝址7の調査を進め、第8号住居址付近の土坑の確認を行う。第9号住居址から遺物が集中して出土し、慎重に調査を進める。

8月7日 昨日と同作業を続ける。溝址12～14の調査にかかる。周辺に住居址があることが確実視される。一部下部土坑群の実測を開始する。

8月8日 溝址13・14は大規模で深い。埋土搬出に全力を上げる。第14号住居址完掘し、写真撮影・実測を行う。下部土坑群は以外と深い。

8月9日 土坑群の調査がわずかになったので主力を溝址に向ける。

8月10日 下部土坑群の写真撮影・実測にかかる。溝址の調査は深さと覆土の搬出が南側であるため時間がかかる。

8月11日 昨日と同作業を行う。溝址7を完掘する。下部土坑群の実測完了する。第9号住

居址からト占骨・銅釧等出土したためいねいに調査し、終了後、写真撮影・実測作業を行う。

8月12日 溝址13・14の完掘に全力を上げる。第16号住居址の精査をする。第12号住居址の調査にかかる。番号は早い、この検出中第13号住居址を発見、調査最終日であったのであわてた。溝址等の写真撮影・実測を行う。本日で実質調査を終了し、調査反省会を行う。

8月13日 本日から校舎改築工事の着手日にあたっていたため、早朝6時より第12・13号住居址の調査を行う。このため遺物が混乱してしまった。実測・写真撮影終了後、工事用ブルトザーが検出遺構面を蹂躪する様を見て、目をそむけ、何か無念な気をいだいた。

尚この調査中、雷雨等の時を主体に、他は数人をさいて土器の洗浄を行い、この中から「松井」の刻字のある須恵器を発見した。

3 調査会・調査団・参加者一覧・事務局

本調査に際し、四ツ屋遺跡調査会を結成したことは先に述べたところであるが、会長は長野市教育委員会教育長中村博二があたり、事務局を社会教育課においた。この調査会のもとに、下記調査団が編成された。

調査団

調査団長 森嶋 稔 (日本考古学協会員・上山田小教諭)

〃 主任 小林秀夫 (〃 篠ノ井西中教諭)

調査員 高野行栄 (長野県考古学会員・共和小学校教諭)

白田武正 (〃 池田小教諭)

百瀬新治 (〃 依田窪南部中教諭)

宮下健司 (〃 若穂中教諭)

森山公一 (〃)

小柳義男 (〃 川上第2小教諭)

赤羽宥夫 (〃 埴生小教諭)

土屋 積 (東京教育大大学院生)

調査補助員 烏羽英継 (長野県考古学会員・信大学生)

町田秀俊 (金沢大生)

特別調査員 西沢寿晃 (日本考古学協会員・信大医学部技官)

参加者一覧

(PTA) 上原唯兄・横川正義・久保きみい・上原敏男・高橋武彦・塚田考四郎・酒井信子・中沢静香・内山宏子・本堂定子・久保かつ子・中沢さだ子・酒井茂夫・駒村陽一郎・上原幸子・大沢かつ子・酒井勝子・久保けい・倉田績・小出武義・真島たけの・高野よし子・中沢ちよ枝・伊熊きみ子・宮尾佳子・窪田しげ子・西山敏井・林英子・吉岡敏子・志津幸子・本間重子・西村澄子・青木とき子・真島和子・宮本久子・玉井たか・真島武男・井堀幸子・窪田よし子・柄木田みよし・島田澄子・中沢尚志・安藤賢吾・久保善久・安藤晴紀・保林信彦・青

木貞元・伊熊武喜・中沢義輝・青木良寛・窪田良二・久保忠輝・小林一郎・大沢喜一郎・大沢巖・酒井輝雄・大沢優・大沢進・小林貞夫・窪田益美・中沢重昌・若林代利子・元田佳次・上原徳治・橋本時寛・池田光男・池田啓一・佐藤今朝人・駒村茂嘉・宮沢賢治・西山昌也・中村真一・中沢忠実・多良沢弘男・小出武義・山越幸夫・倉石忠雄・高野尚治・志津康男・横川正義・室賀健三・市川亨・小林一夫・林盛人・中沢照人・真島至・山崎忠良・窪田昭・窪田積・久保けさい・真島芳定・久保博正・上願敏彦・窪田勲・吉岡貴川・上原義正・山崎澄夫・真島重雄・上原信貞・吉岡勲・山崎宜昭・赤塚茂喜・大沢栄一・柄木田稔・久保はるみ・林繁良・須坂刀丈・上原国照・真島友見・塚田孝四郎・酒井俊夫・上原英一・吉岡幸司・青木昭司・久保秀人・真島一男・宮尾利治・新村金俊・安藤誠・宮沢勇・倉島勝大・本堂昇・野口幸一・富樫勝彦・内山富雄・曾我部忠雄・清水英雄・北村学・緑川幸夫・高橋勝房・久保恩・北沢孝・島田武・丸山教雄・堀内安喜・酒井英夫・柳沢秀行・渡辺英雄・倉田祐雄・池田勝・原田邦男・本間公宏・中沢武雄・井堀勇夫・笹沢恵・近藤洸光・市川哲夫・玉井勝敏（会長上原唯兄・校長田中一郎・教頭奥村栄成）

（坂城高校地歴班）青木定昭（部長）・萩原和之・武富昭・小松正美・橘田和義・加藤秀之・中沢博幸・小林重高・大井清恵・平林克子（顧問成瀬三磨）

（屋代高校地歴班）青木一男（部長）・千野浩・高沢史納・山崎正子・小関幸子・吉田千恵子・久保公子（顧問北沢守）

（篠ノ井高校）森嶋美加

事務局

事務局長 横山 勝（教育次長）

事務局員 丸山喜正（社会教育課長）

〃 松橋 順（〃 課長補佐）

〃 内田早苗（〃 文化財係長）

〃 矢口忠良（〃 〃 主事）

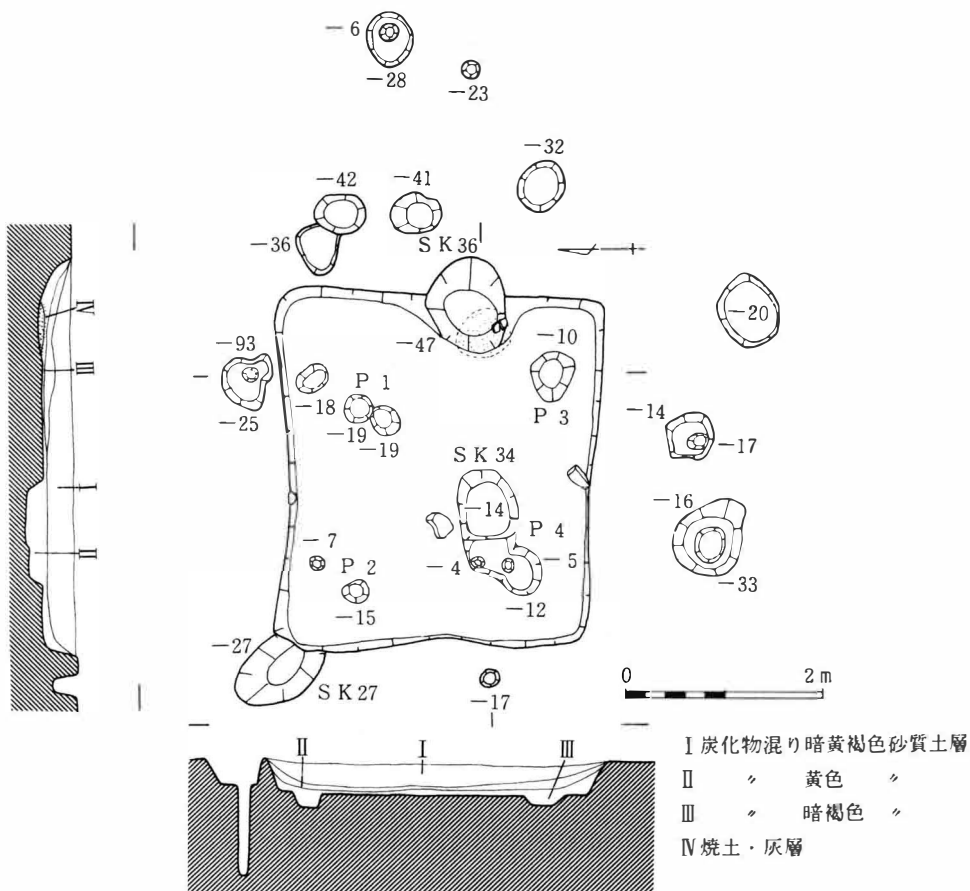
（事務局）

第2節 住居址

第1次の調査で確認された住居址は、総数16軒で、全体を確認できたものは、第1・2・7～9・14・15号住居址の7軒にすぎない。他は調査地外に一部がかかる。掘り込み面は暗黄色砂質土層で、覆土は第9・12・13・16号住居址が茶褐色砂質土になる他は、暗褐色砂質土である。レベル高は校標より1m下である。

1 第1号住居址・ピット群 (第4・5図、第3図版)

遺構 住居址は調査地のほぼ中央南よりに位置し、周辺にピット群が散在する。プランは、東壁をのぞき他の各壁の中央付近を最大に内側に窪む幾分隅に丸味を有する不整形になる。カマドは東壁中央付近に構築されているが土坑36により破壊され、袖一部と火床の焼土を残すのみである。カマドの位置から主軸方向はほぼ東西を指す。規模は主軸 3.7m・南北軸3.3mである。各壁の掘り込みは傾斜があり、東壁15cm・西壁27cm・南壁28cm・北壁17cmを測る。

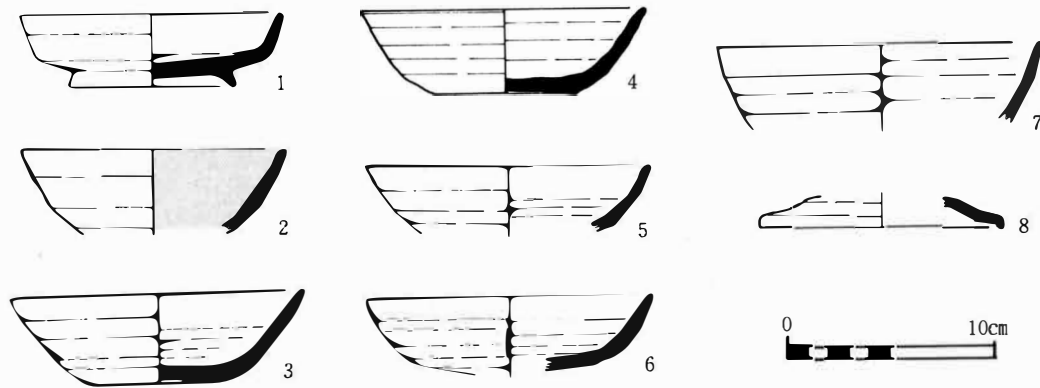


第4図 第1号住居址・ピット群実測図

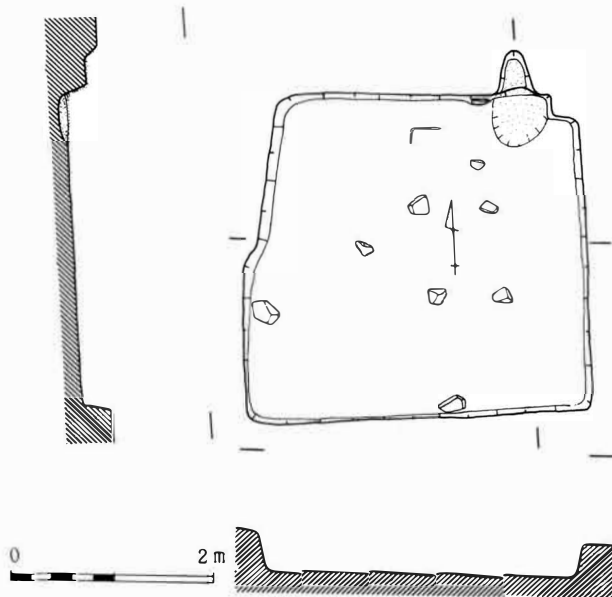
床面は平担で軟弱である。柱穴はピット群と調査の段階では区別することができなかったが、実測図からの想定ではP1・P2・P3・P4の不整形配列4本柱をあてることができようか。床壁に接して長軸30cm大の角礫がある。

ピット群はこの住居址と第8号住居址にかけて認められ、中には径15cm前後の柱痕があるものがあり建物址が想定されるところであるが、その配列に規格性がなく、また規模も不揃いで一定性がない。これらの深さは遺構確認面より図中数字にして記した。

遺物 住居址のカマド周辺から土師器甕形土器片が出土しているが図示できなかった。図示したものは床面からいく分浮いた状態での出土で2の他はすべて須恵器坏・蓋形土器である。1は体部の低い皿形を呈し、高台が付される。8の蓋形土器は口縁部が鈍い嘴状になる。これらはロクロ成形痕が明瞭に残る。底部に糸切り痕を残す。この他覆土中より内面黒色を呈する



第5図 第1住居址出土土器



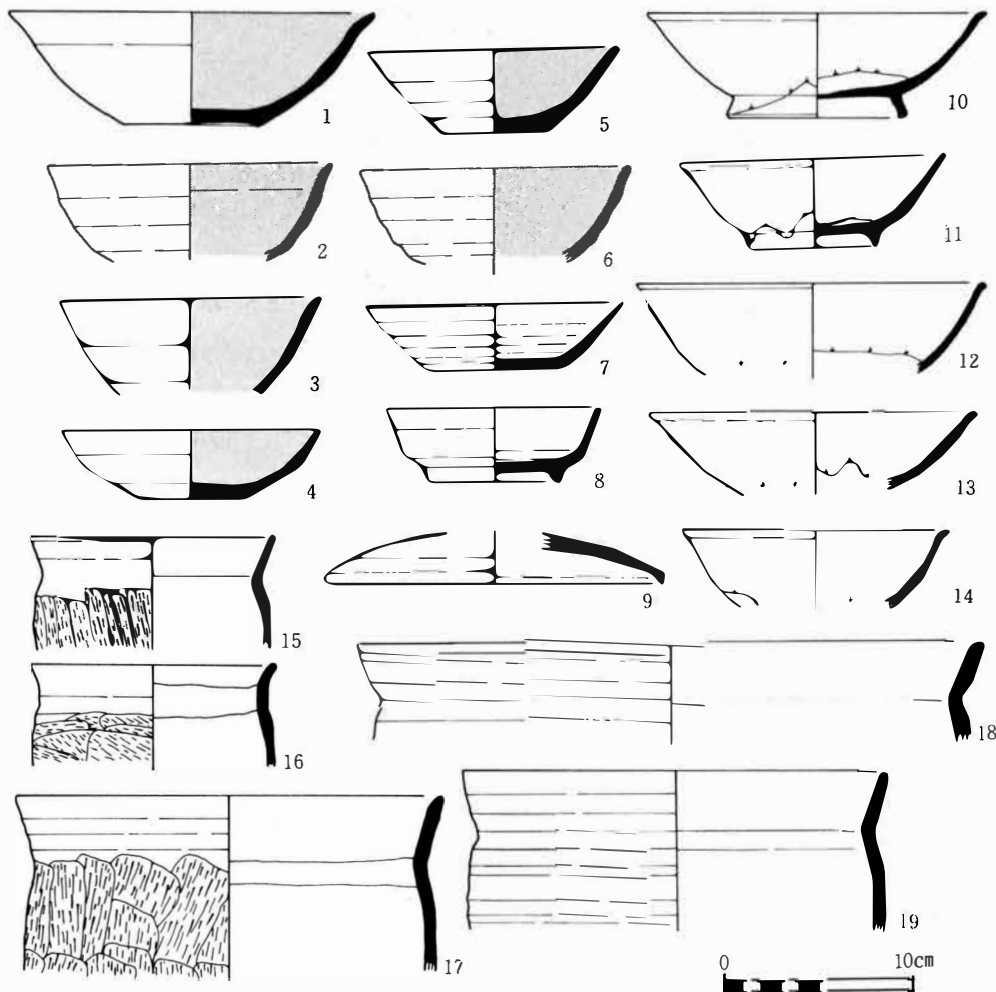
第6図 第2号住居址実測図

土師器坏形土器も若干出土している。

ピット群内からのものは、この住居址と同時期の土師器坏・甕形土器が少量出土しているにすぎない。

2 第2号住居址（第6・7図、第3図版）

遺構 第1号住居址の南東に近接して検出されたもので、全プランが確認できた。プランは西壁が拡張のためかゆがみ、北東隅がこける不整形になるが、他壁をみると整然とした方形を呈する。規模は南北3.15m・東西の最も広い位置で3.4mを測る。掘り込みは直に近く、東壁23cm・西壁27cm・南壁27cm・北壁25cmを測り、床面は平坦で軟弱である。カマドは北壁東隅付近に設けられるが、調査時ではすでに破壊されており煙道及び床面より10cm程窪んで火床・焼土等が残存するのみであった。柱穴等他の施設はなかったが、床面に頭大の角礫が散在して



第7図 第2号住居址出土土器

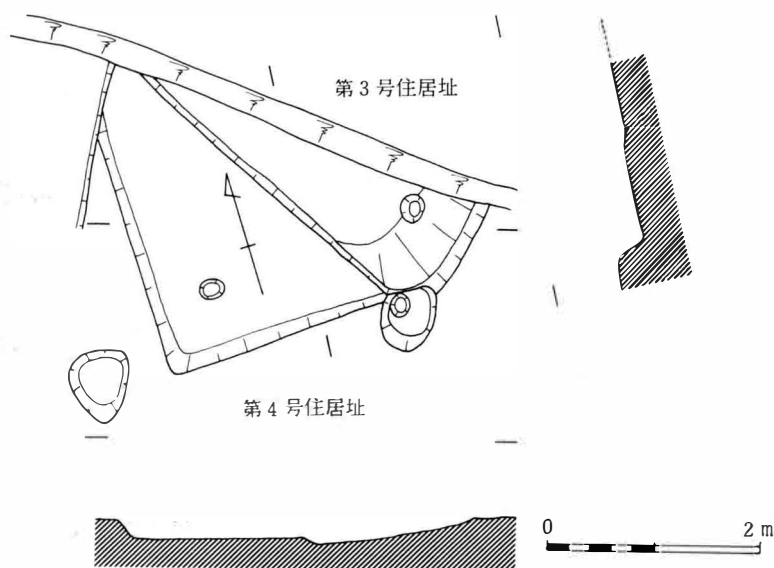
いた。

遺物 出土量は比較的多く、甕形土器を除いた他は覆土中からの出土である。1～6は土師器坏形土器で、外面にロクロ成形痕を残す。体部が内弯し、口縁部が短かく外反する器形になるものが多い。内面は良く研磨されて黒色処理されたもの（1・3～6）が多く、底面に糸切り痕を残す。7～9は須恵器坏・蓋形土器で、全体の出土量は少ない。8は高台が付され、ロクロからの切離は糸により同心円文状の痕が残る。10～14は灰釉陶器で、出土した時はすべて破片であった。体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反する器形になるが、皿形（10～13）と椀形（14）がある。釉はほぼ全面に認められる。甕形土器も破片出土で、大中小あり、小形の15・16及び中形の17の外面はヘラケズリが施こされ器肉を薄くする。18は大形で口縁端部が面取り様になり、17とともにロクロ整形痕を明瞭に残す。この他カマド左手の床面から直角におれた棒状の鉄製品が出土している。

3 第3号住居址（第8図、第3図版）

遺構 調査地中央の北端から検出されたもので、それも南東隅一部分のみで、大部分は未調査である。尚この住居址は第4号住居址と重複関係にあり、それよりも新しい。プランは隅丸方形になると思われるが、南壁と東壁の角度はいくぶん鋭角になるようであり、壁は直線的である。掘り込みはやや傾斜があり、南壁で31cm、東壁で一度壁を構築したのち床面平坦部まで法面を有し、この地点まで17cmを測る。柱穴は東壁より長軸25cm・深さ20cmのものが1個確認された。

遺物 出土遺物は少なく、時代を推定されうるものに覆土から得た土師器坏形土器の糸切り



第8図 第3・4号住居址実測図

痕を有する底部とロクロ整形された甕形土器体部片がある。

4 第4号住居址（第8図）

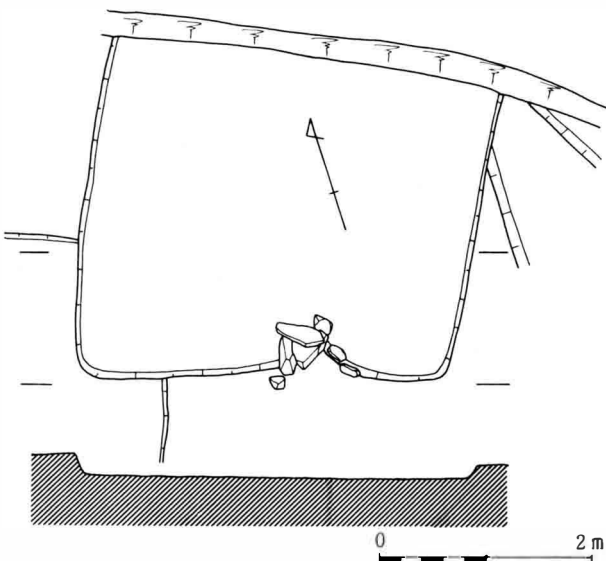
遺構 第3・5号住居址より古い住居址でそのため西壁と南壁の一部を検出したのみである。プランは方形を呈し、その南壁での規模は、第3号住居址南東隅より延びることがないので、2.55m以内の小規模なものと予想される。壁の掘り込みはやや傾斜を有し、西壁で16cm・南壁で24cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、南西隅に径25cm・深さ12cmの柱穴を1個確認した。また遺構外に長軸70cm程の不整楕円ピットがあるが、本遺構とは関係ないものと考えている。

遺物 この住居址も出土量が少く、その器種の特色は第3号住居址のものに似る。全て覆土出土である。

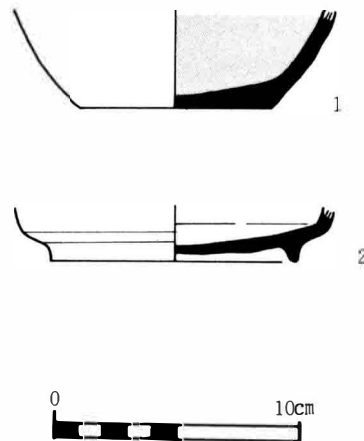
5 第5号住居址（第9・10図）

遺構 調査地北端にあり、第14・15号住居址と重複するが、中で最も新しい住居址である。調査では南半分を検出し、他は調査地外にある。プランは南壁にカマドを有する隅丸方形になり、東西間の規模は3.7mを測る。主軸方向はS-30°-Eである。掘り込みは直に近く、東壁10cm・南壁15cm・西壁30cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、柱穴はなかった。カマドは南壁東よりに構築され、調査時には全体に破壊をうけており構築材の長軸50cmを最大とする角礫が7個集石して、その周辺から焼土が認められた。

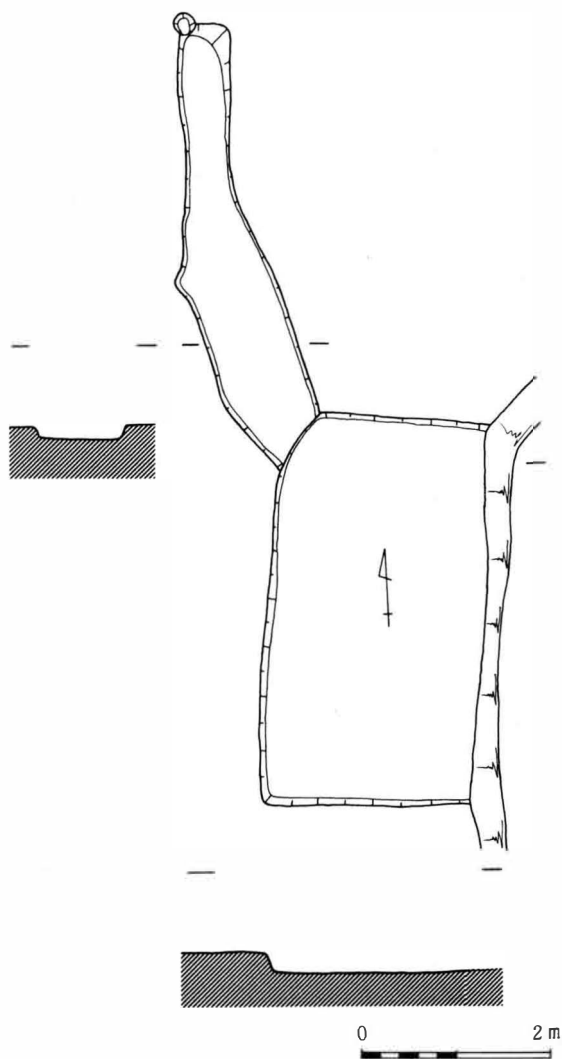
遺物 住居址部分の広い面積にかかわらずその出土量は非常に少ない。図示できるものは内面黒色を呈する土師器及び高台が付され底部外面中央付近に糸切り痕を有する須恵器坏形土器のみである。



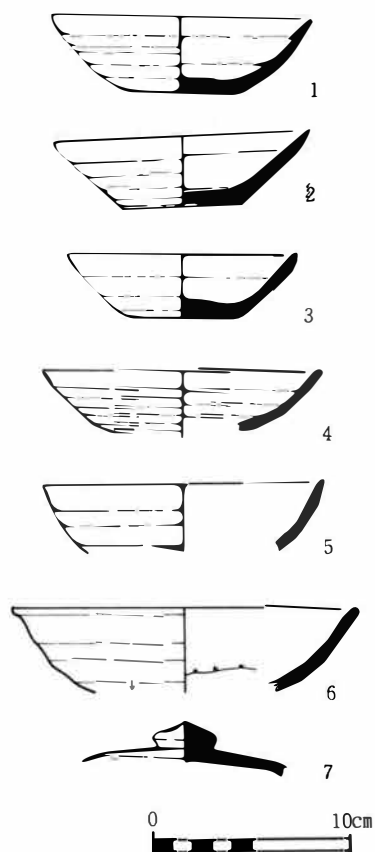
第9図 第5号住居址実測図



第10図 第5号住居址出土土器（1：4）



第11図 第6号住居址・溝址5実測図

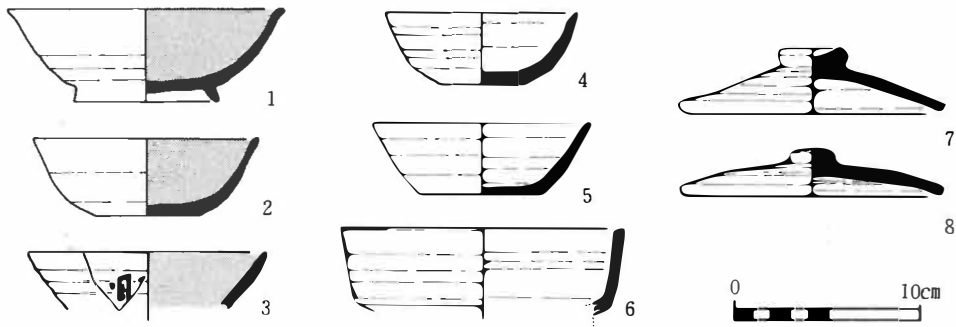


第12図 第6号住居址出土土器

6 第6号住居址 (第11・12図)

遺構 調査地東端より西側半分のみの検出で、北西隅は溝址5により破壊をうける。プランは北西部が隅丸を呈するようであるが、基本形態は方形を呈するものと思われる。南北間の規模は4.1mを測り、その方向はほぼ南北である。掘り込みはやや傾斜を有し、西・南壁20cm・北壁32cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴等はなかった。

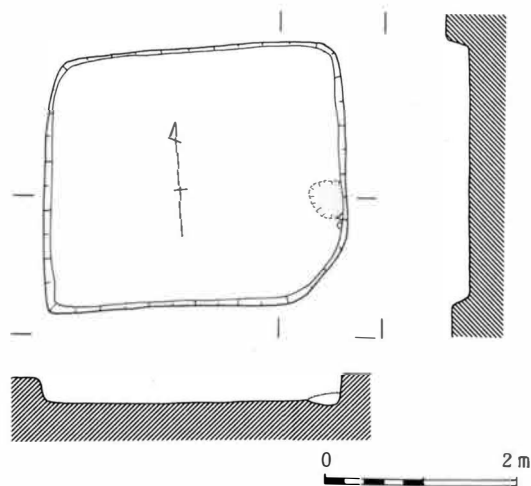
遺物 須恵器坏形土器が目立つ。全て覆土中からの出土である。1～5は須恵器坏形土器で、ロクロ成形痕が顕著に残る。体部は直線的になり、口縁部も素直に立ち上がるものが多い。底部に糸切り痕を残す。6は灰釉陶器で、ほぼ全面に半透明の釉がかかる。7は須恵器の蓋形土器のつまみ部付近の破片で、つまみは擬宝珠形を呈する。この他土師器坏・甕形土器片がある。



第13図 第7号住居址出土土器

7 第7号住居址 (第13・14図、第4図版)

遺構 第4号住居址の南に隣接し、上部遺構として溝址6・11・12がある。プランは南東隅・北西隅が丸くなり、他隅は角ばる不整な方形になる。規模は主軸が3.1mで南北軸2.6mを測る。主軸はN-95°-Eを指す、掘り込みは直に近く、東壁27cm・南壁23cm・西壁18cm・北壁22cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、柱



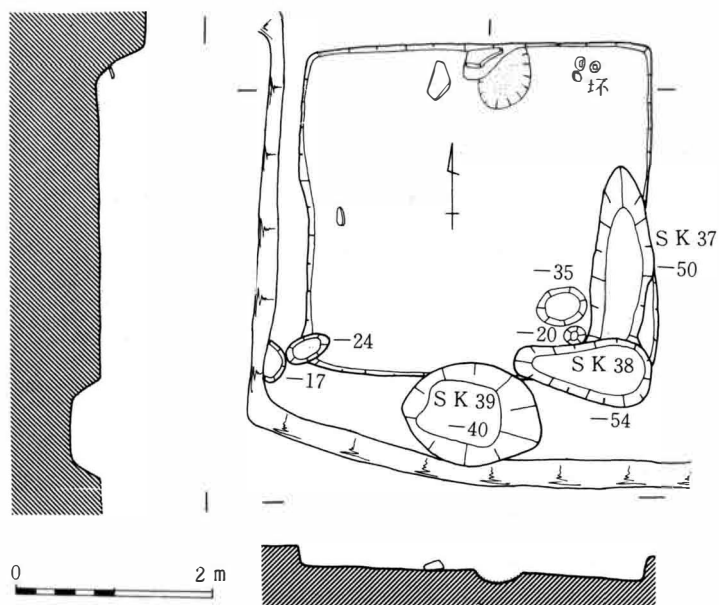
第14図 第7号住居址実測図

穴等はない。カマドは東壁南よりにつくられるが、調査では舟底状を呈する火床及び焼土と小礫が確認されたのみであった。

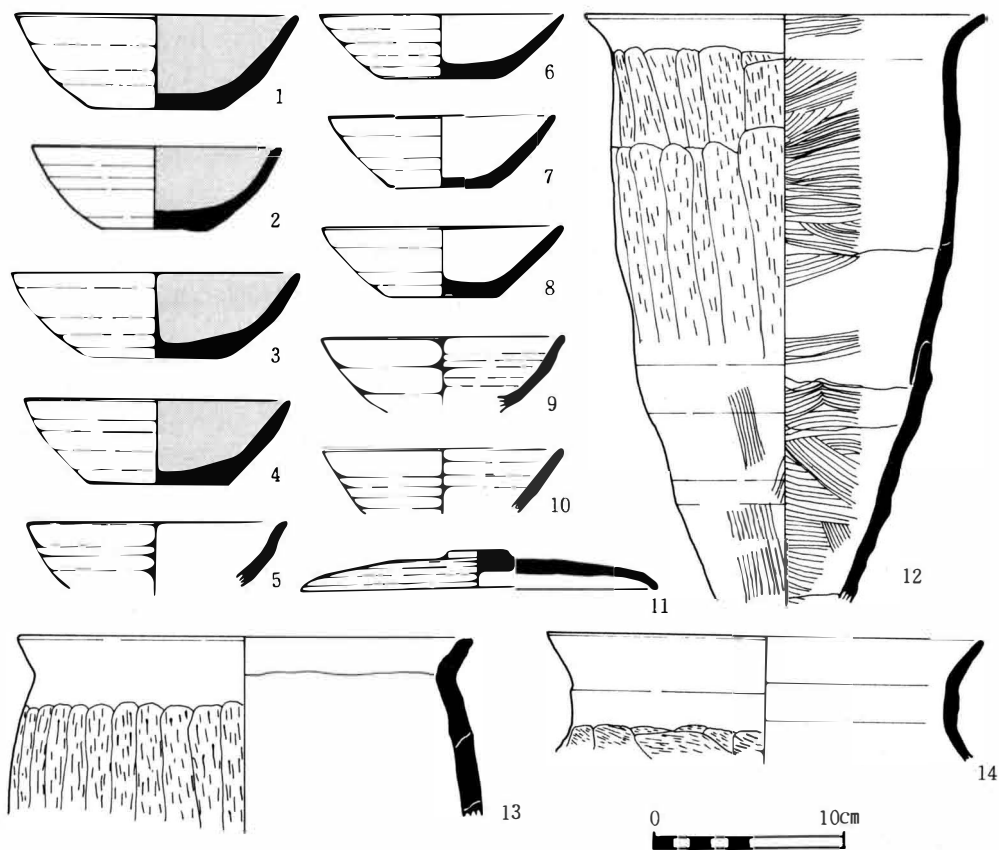
遺物 出土量は少なく、すべて覆土出土である。土師器には坏・甕形土器が出土しているが、図示できるものは1～3の坏形土器のみである。1には外開する高台が付され、3には墨書がある。外面にロクロ成形痕が残り、内面は研磨され黒色処理がほどこされ、底部外面には糸切り痕がある。須恵器には坏・蓋形土器がある。4～6は坏形土器で、6の体部は直立的になり高台が付される器形になるものと思われる。蓋形土器の器形は扁平な三角形状を呈する。口縁部は折れ曲がり、端部は鋭い嘴状にならず丸味をもっておさめる。つまみは7が内にえぐれ、8は扁平擬宝珠形になる。

8 第8号住居址 (第15・16図、第4図版)

遺構 調査中央の南端にあり、全掘できた住居址であるが、東・南壁の一部は土塚及び柱穴群等により破壊をうける。プランは方形を呈するものと思われる。規模はカマドが北壁に設けられ、主軸3.37m・東西軸3.5m測る。主軸方向はほぼ南北である。掘り込みは直に近く、東



第15图 第8号住居址实测图



第16图 第8号住居址出土土器

壁22cm・南壁13cm・西壁18cm・北壁51cmを測る。床面は平坦で軟弱であるが、東側に傾斜する。本住居址内南東隅付近に径50cmの柱穴様ピットを検出したが、他隅にないので、ピット群に属するものと考えている。カマドは北壁中央よりやや東側に構築されるが、調査時にはすでに破壊を受けて、左袖の一部と構築石材が2個及び主軸60cm程の火床のみ残存していた。

遺物 甕形土器はカマド付近より集中して出土しており、その右側に1・6・7の坏形土器が床面に接して発見された他は覆土からの出土である。坏形土器には2種あり、1～5は土師器で、5を除いて内面黒色処理され、6～10は須恵器である。土師器の内面を除きクロコ成形が残り、底部には糸切り痕を残す。器形は土師器の体部が内弯気味になるのにたいし須恵器のそれは直線的になるものが多く、口縁部は共にわずかに短かく外反する。甕形土器には3形態ある。12は底部を欠く以外全形を知り得、口縁部に最大径があり、体部上位でいくぶん張るがそれ以下は底部に集約する烏帽子形になる。13は口縁部が短かくくの字状に外開し、体部中位付近に最大がある長胴形になるものと思われる。14は頸部下が欠損していて全形は不明であるが、頸部は体部から直線的に立ち上がり、口縁部との境に段を構成し、そこから口縁部が外開する器形になる。整形は外面肩部下が逆時計廻りでタテヘラケズリが施こされる。12は上から下へ2回行なわれ、器体接合点下は成形痕の凹凸がそのまま残る。12の内面に刷毛ナデ整形痕を残す他はヨコナデである。

9 第9号住居址（第17～21図、第5・9～11図版）

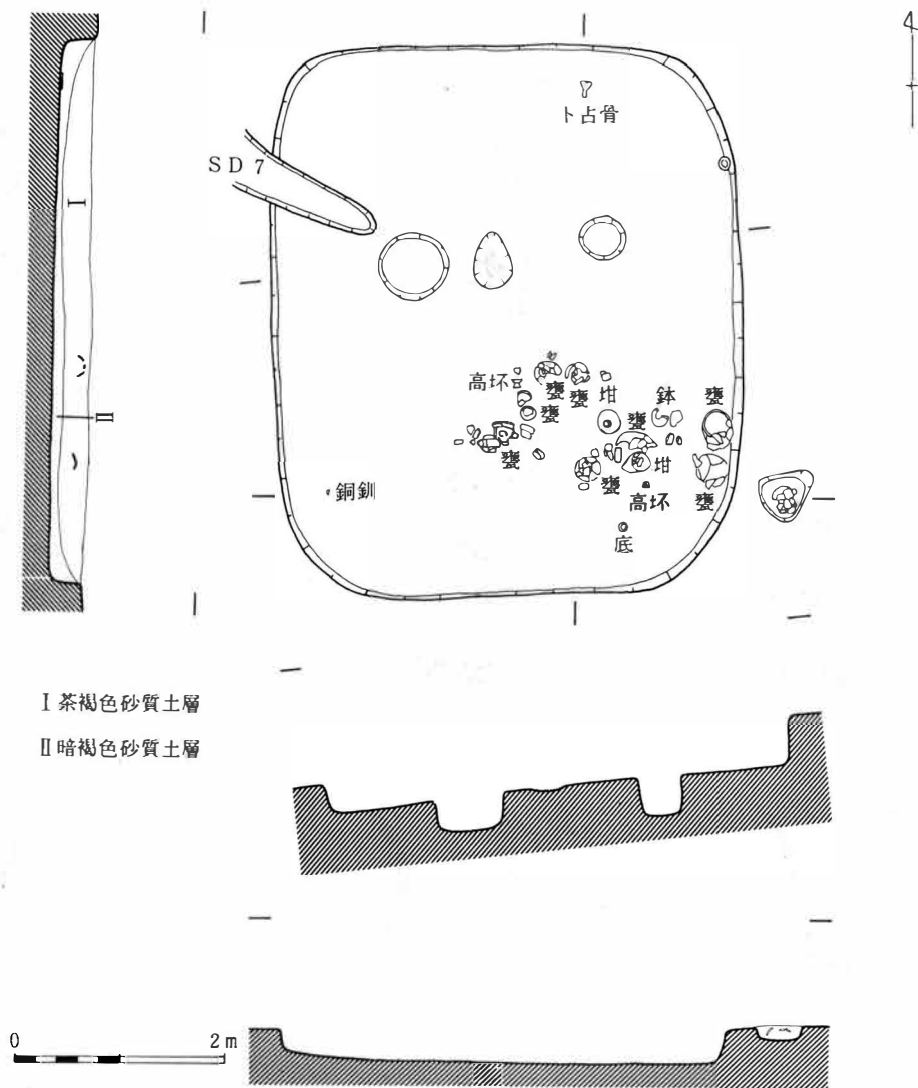
遺構 調査地中央付近の東側、溝址2～4の下から確認された。プランは隅丸の大きい方形プランになる。規模は主軸が5.2m・東西軸4.4mを測る。主軸方向はほぼ南北を指す。掘り込みは直に近く、東壁45cm・南壁34cm・西壁28cm・北壁30cmを測る。床面は炉周辺で堅緻な所を確認した他は平坦で軟弱である。炉は長軸50cm・短軸35cmの3cm窪む舟底状の地床炉で、内に焼土・灰がつまっていた。その位置は中央よりやや北によっている。この炉をはきんで東南に2個の柱穴を確認し、これにたいする南壁よりのものはなかった。西の柱穴は径65cm・深さ34cmで、東のものは径34cm・深さ55cmを測る。この他南東隅付近の外側に三角形を呈し内に本住居址出土の土器と同時と思われる甕形土器片が出土したピットがあるが、本遺構とのかかわりは不明である。

遺物 覆土は2層に分けることができ、上から茶褐色砂質土層と暗褐色土層になる。土器の出土はこの上層に集中し、下層から破片が若干出土しているにすぎない。いわば覆土出土である。また住居址南東部に土器の集中ヶ所があり、本文でいう第2類を主体としていた。

第I類（第18・19図）

本類は赤色塗彩、櫛描簾状文・波状文に代表される箱清水式土器の特色の強いものを本類にあてる。

壺形土器（1・3～9）1は頸部付近の破片で他は底部片である。頸部でしまり、そこから口縁部は外反しながら外開するラッパ形になる。文様は頸部から体部にかけて、7本歯の櫛状

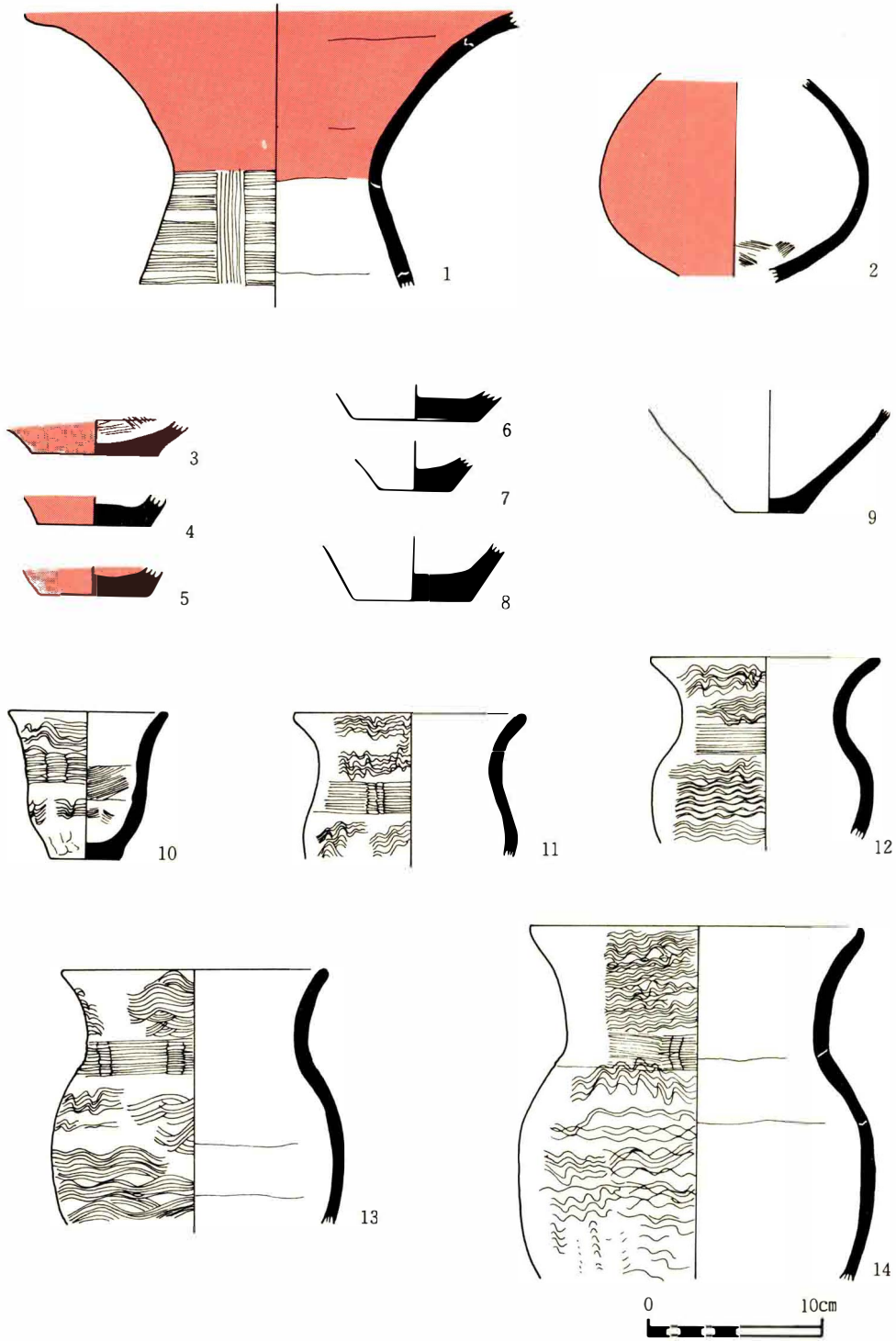


第17図 第9号住居址実測図

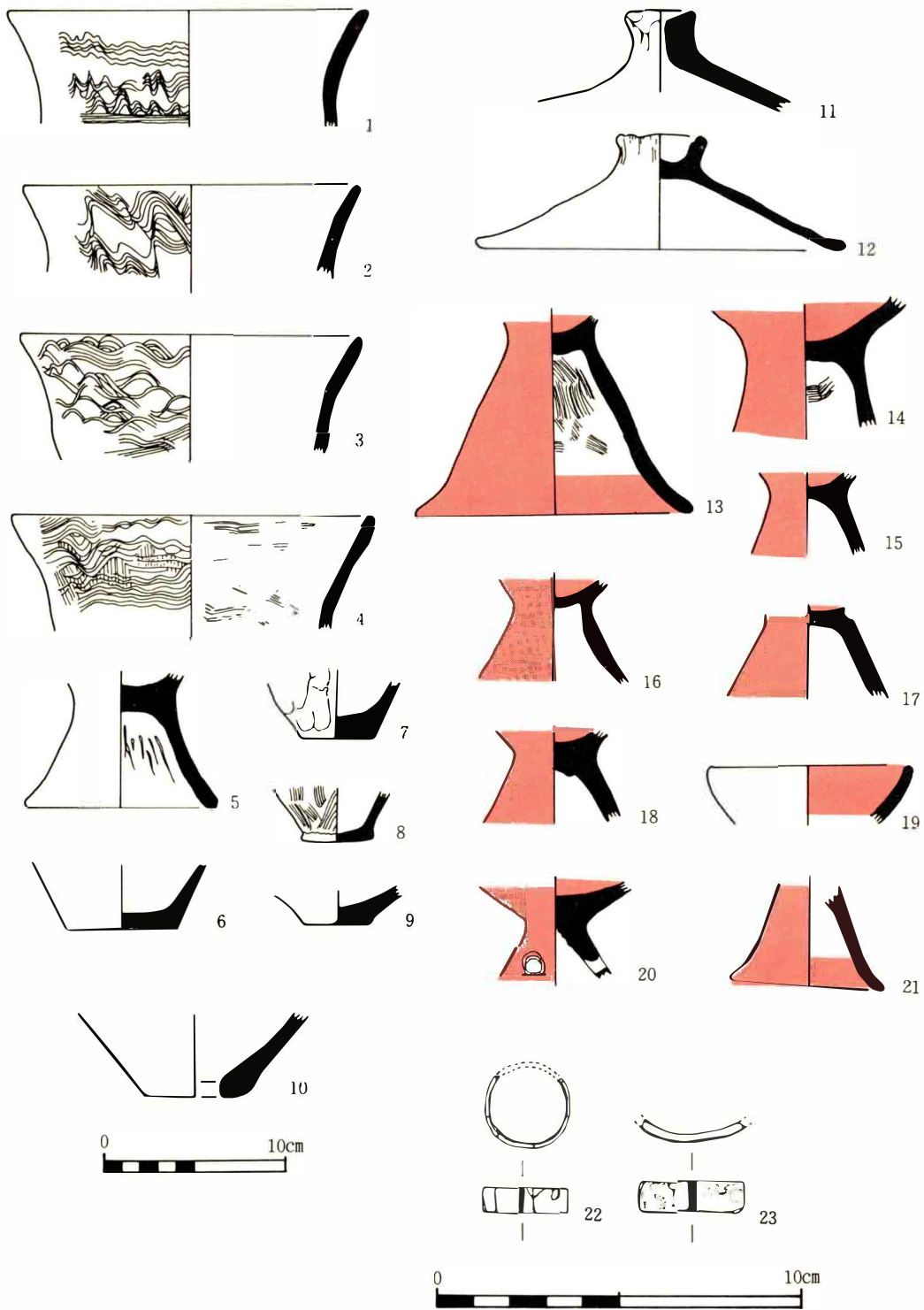
工具により5帯以上の横帯文とそれを縦に切るいわばT字状文になる。1の内外面及び3～5の外表面は赤色顔料が塗られる。

埴形土器(2)口縁部と底部を欠く。体部下半に最大径がある下ぶくれ形になる。外面は研磨され赤色塗彩される。

甕形土器(10～14、第19図1～9)頸部に簾状文を、それをはさむように口縁端部付近から体部下半まで波状文をめぐらし、波状文は右上りで、概して雑である。器形は最大径が肩部にあるものが多く、頸部は立ち上がり気味で、口縁部がそこから外反し、端部は素直におさめるものが主体となり、14のみ立ち上がり受口状になる。肩部はなだらかに張り、体部を含め丸味を有する。10は小形でミニチュアであろう。第19図5は高台、6～9は底部片で、底部を意識的に



第18图 第9号住居址出土土器 (1)



第19图 第9号住居址出土土器(2)·銅釧

つくり出している点特色がある。整形は外面がミガキ様のタテヘラナデで、内面はヨコヘラナデである。

甑形土器(10) 底部付近のみ1点出土しており、底部に1.5cmの1孔がうがたれる。体部は直線的で鉢形になる。整形は内外面ともヨコナデである。

蓋形土器(11・12) 器形は扁平な二等辺三角形状になる。つまみ部は外開し、上面がえぐれ、11には1孔がうがたれる。天井部は直線的で、口縁部が肥厚し外開する。天井部はタテヘラミガキで、口縁部付近ではヨコヘラミガキの整形である。

高坏形土器(13~18) 図示できるものは坏底部及び脚部の破片である。脚部の器形は13にみるとおりラッパ状に外開する。外面はタテヘラミガキで整形され赤色塗彩が施こされる。

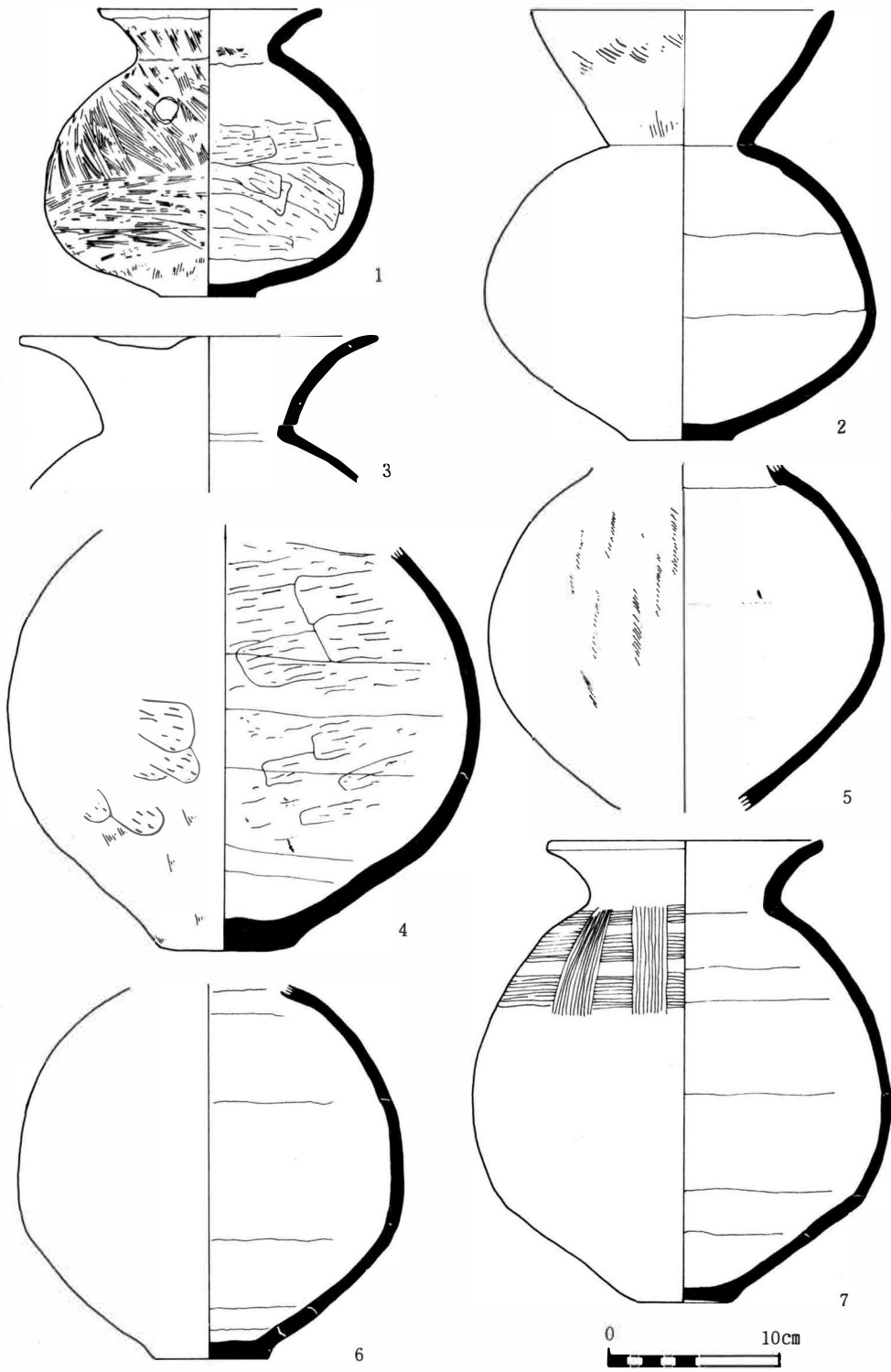
器台形土器(19~21) 19は器体受部の破片で、口縁部がわずかに立ち上がり、端部は丸くおさめ丸味を帯びる皿形を呈する。20・21は脚部の破片で、20には3個の円孔がうがたれる。外面はヘラミガキが施こされ、19は内外面とも、他は外面が赤色塗彩される。

Ⅱ類 (第20・21図)

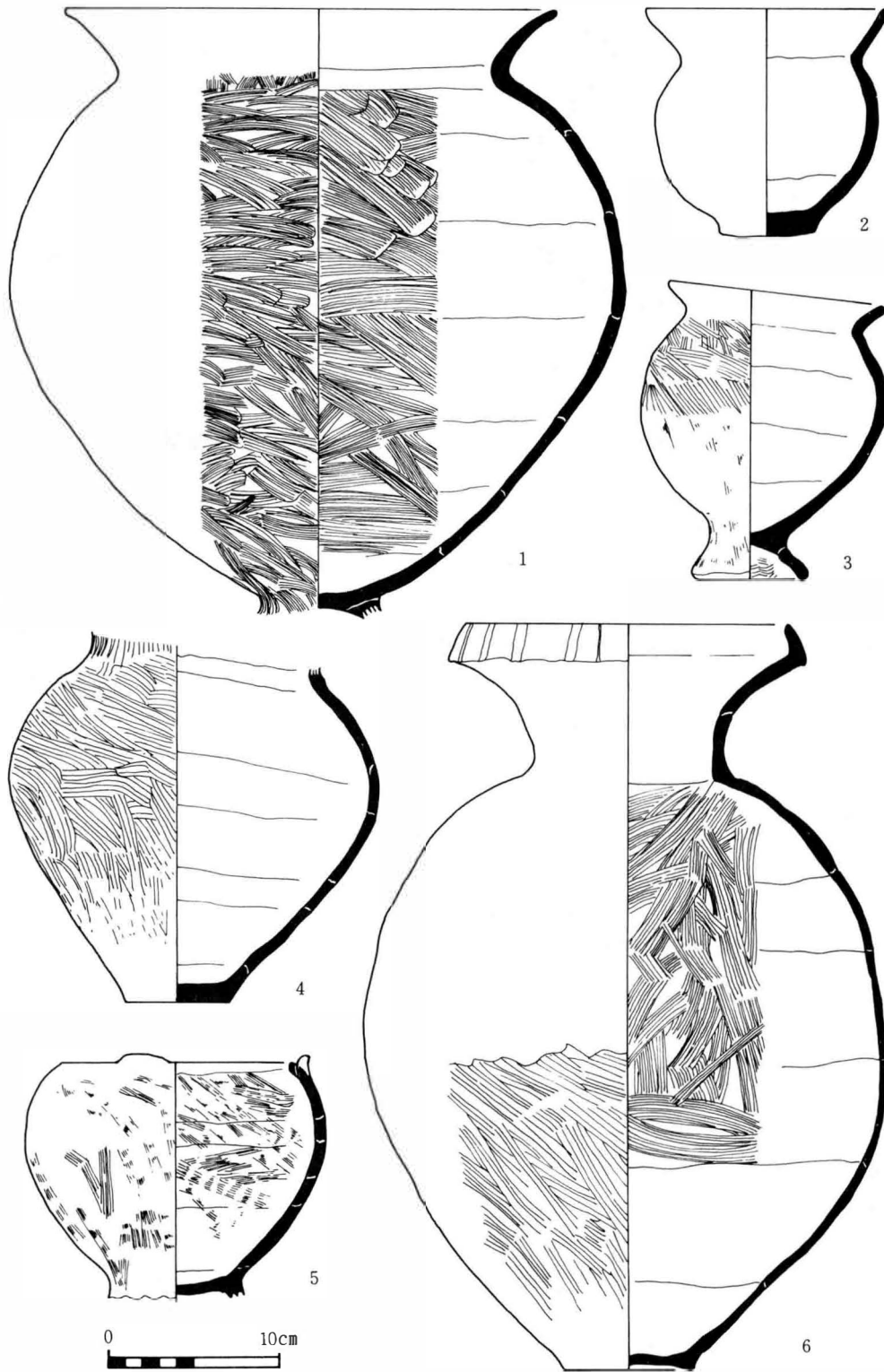
I類とは全く異質なもので、罍・壺・甕・片口鉢形土器の器種がある。

罍形土器(1・2) 球形のつぶれた下膨れの体部に平底の底部がつくり出され、頸部は鋭角のくの字形になるが、1の口縁部は短かく外開し、端部は更に外反するのにたいし、2のそれは長く内弯気味の器形になる。共に最大径は体部下半にある。1の整形は外面・内面口縁部が体部上半でタテ及びナメの下半はヨコ方向の刷毛が用いられ、その方向にそってヘラミガキが施こされる。内面は上半及び底部付近がナデ、中位にヘラケズリ様のナデが施こされる。2も基本的には1と似るが、それよりもていねいで、刷毛目を口縁部に残すのみである。体部上半はヨコ、下半から底部にかけてはタテヘラ整形で、内面はナデで整えられる。

壺形土器(3~7、第21図6) 器形には2種あり、3~7と第21図6である。3~7の器形は体部上半が球形になり、下半から底部にかけ箱清水式土器の影響を残して、いくぶんけて直線的になる。最大径は体部中位にある。底部は平底であるが、7は上げ底になる。口縁部は3のようにくの字形に外反しながら外開するものと、7の頸部が短かく立ち上がった後短かく外反するものがある。また文様は7のみの肩部にみられ、三帯の櫛描平行線文とそれを縦に切るいわばT字状文になる。整形は4のヘラケズリ状の整形、これと5の刷毛整形痕が認められる他は、タテ方向のヘラミガキをていねいに施こす。内面は4にヘラケズリ状ナデが行なわれる他は単なるナデ整形である。3はヘラナデの後、粗いヘラミガキが施こされる。7の器面は荒れている。また5の外面は薄く赤色顔料が塗り込まれ、明赤褐色を呈する。第21図6は口縁端部が内弯気味に立ち上がり受口状を呈し、また体部は肩が張り、球形を横から押した感じになるところに特色がある。頸部は直立した後大きく外反する。底部は上げ底である。口縁端部外面は間隔が一定でない縦の沈線で飾られる。整形は粗い刷毛状工具によるナデを第一次とし第二次に口縁部から体部上半にかけタテヘラミガキが施こされる。内面は口縁部がヨコナデされるのにたいしそれより下方は刷毛によっている。



第20图 第9号住居址出土土器 (3)



第21图 第9号住居址出土土器 (4)

甕形土器（第21図1～4）この器種も多様性がある。1は大形のもので、頸部がゆるくくの字形に外開したのちそこから口縁部は更に外反し、体部上半は球形で丸味があり、中位付近にある最大径から下半は丸味を減じて底部に至る器形になる。高台が付されるが欠損して器形は不明である。整形は細かい刷毛で口縁部を除き、内外面ともていねいにナデられ文様の効果を出している。2は小形のもので頸部がくの字形に折れ、口縁部が内弯気味に立ち上がり、体部は球形を呈し、底部は厚い平底になる。器面は2次焼成を受け器面があられているが、ヘラナデ痕を残す。3はやはり小形のもので、高台が付される。頸部・体部の器形はやや器高が高い点を除けば近似する。口縁部は外反し、底部高台は低く外開し、端部が内弯気味になる。外面の整形は刷毛ナデ整形後体部下半から高台にかけ、タテヘラミガキが施こされる。内面はヨコナデ整形である。刷毛目付近にススが付着する。4は口縁部を欠くが他は完形である。体部上方に最大径がありその部位まで丸味が有し、それ以下は直線的に底部に集約される。底部は平底である。整形は粗い刷毛ナデを基調とするが、体部下方はタテヘラミガキになり、内面はヘラケズリ様ナデ整形される。全面にススが付着する。

片口鉢形土器（第21図5）わずかに外反する片口が1個つくり出される。体部は内弯しながら立ち上がり口縁部で更に内弯し、端部は面取りされる。内外面とも刷毛ナデ整形され、その後外面の口縁付近でヨコミガキを施こされる他はタテ及びナメのミガキである。また外面は2次焼成をうけ器面あれる。

これら土器の他床面より、推定径2cm・巾7mm・厚さ1mmの指輪状及び、推定径5cm・巾9mm・厚さ2mmの鉋状の銅製品片が出土し、またこれも床面よりの出土で棒状先端による焼焦げ痕のある鹿の肩甲骨が出土したが、時間がたつにしたがい、取り上げ処理する段階で骨粉化してしまい、今はその一部が残存するだけである。

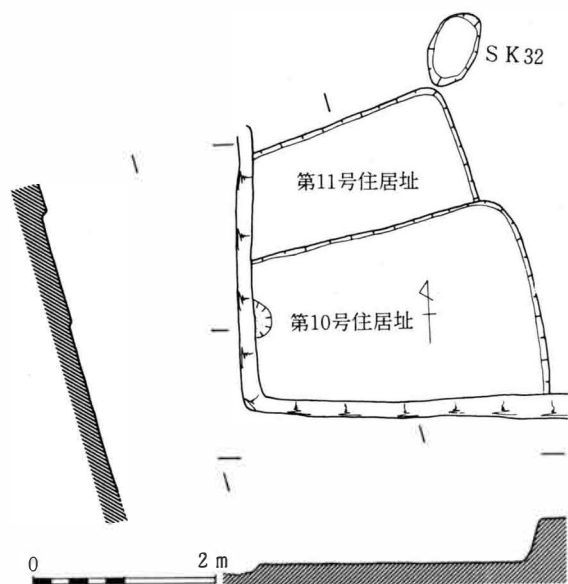
10 第10号住居址（第22・23図、第6図版）

遺構 調査地南端に位置し、ほぼ北東部を検出したのみで、他は調査地域外にある。また第11号住居址の南側を切り、それよりも新しい。プランは隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは傾斜を有しており、東壁48cm・北壁で第11号住居址床面より5cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、柱穴はない。ただ西壁の東よりにカマドの存在をうかがわせ、調査地内外の境いに深さ8cmの楕円形になるとと思われる舟底状ピットがあり、内に焼土が残存していた。

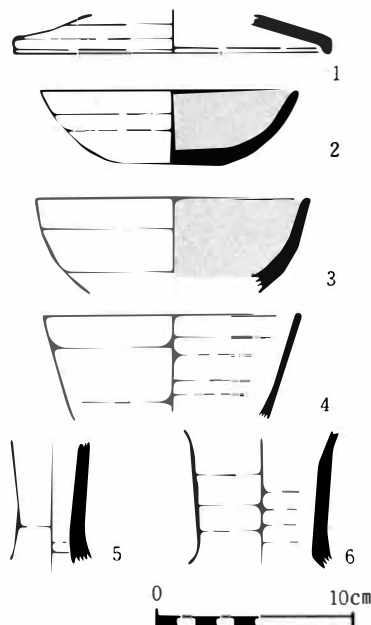
遺物 出土量は少なく、カマド周辺から土師器甕形土器が数点出土した他は覆土中からであるが、図示できるものは須恵器蓋形土器の天井部下位の1点のみである。

11 第11号住居址（第22・23図、第6図版）

遺構 第10号住居址により南側が切られて西側は未調査である。プランは北東隅の形態から方形を呈するものと思われる。規模は不明である。掘り込みは浅く、東壁10cm・北壁8cmである。床面は平坦で軟弱である。柱穴はない。



第22図 第10・11号住居址実測図



第23図 第10(1)・11(2～6)号住居址出土土器

遺物 掘り込は浅いためかすべて床面出土の遺物である。器種には、体部が内弯しながら立ち上がり、口縁端部が素直におさまるもの（2）と外反するもの（3）で、内面が黒色処理される土師器坏形土器、体部が直線的で口縁部にいたる深い須恵器坏形土器及び同種長頸壺片がある。これらはロクロ成形され、糸切り痕を残す。

12 第12・13号住居址（第24～27図、第6・12図版）

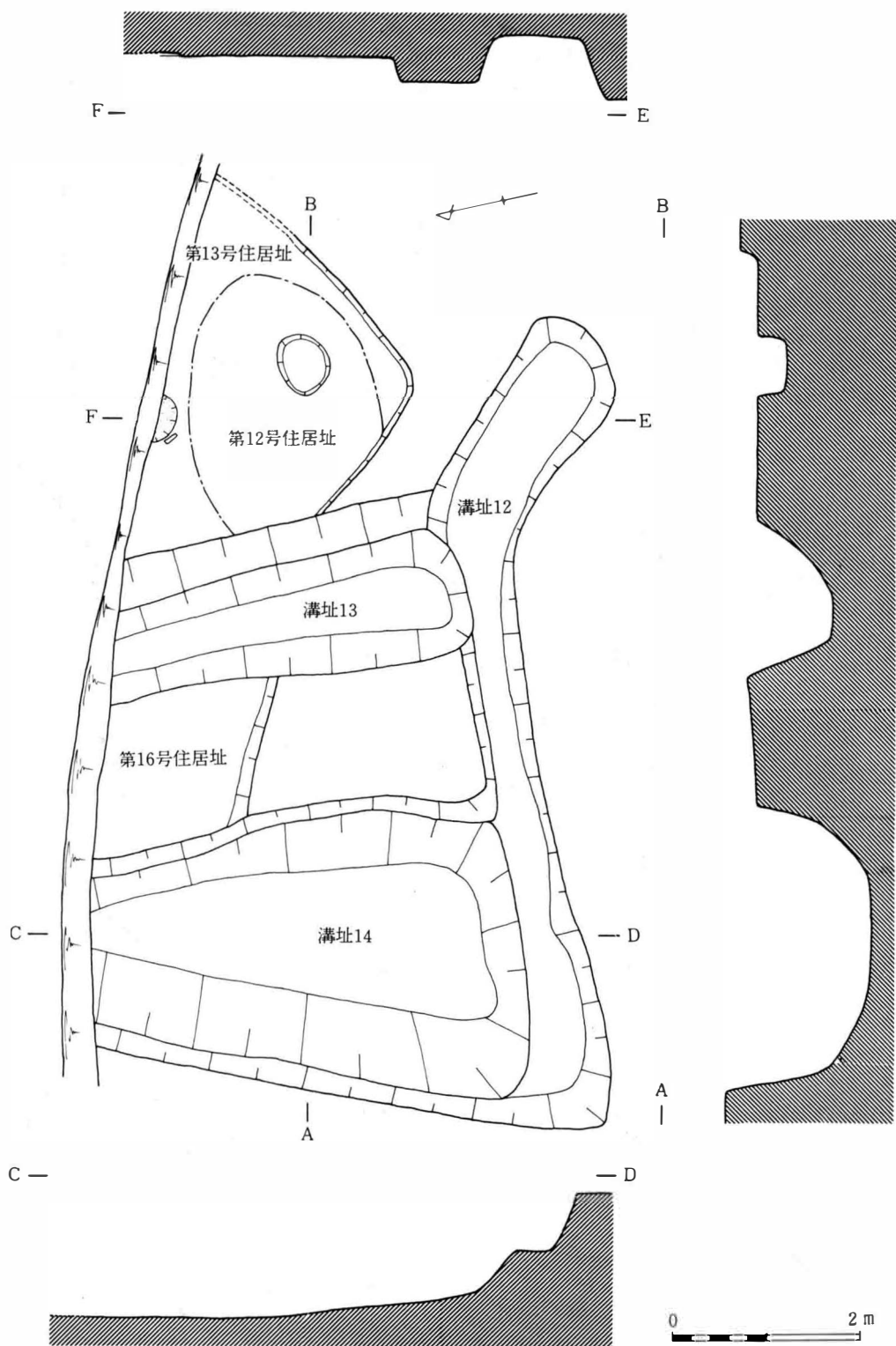
遺構 調査地北端から検出されたもので、北壁の一部は溝址13により切られ、北側は調査地外へ延びる。第13号住居址を調査していく中で、第12号住居址の床面を検出したもので、調査所見では第12号住居址が先行するようである。このため遺物が混同してしまい、第12・13号住居址出土遺物としてあつかう。

第12号住居址は第13号住居址内にあり、床面は堅く（一点鎖線内）平坦である。この堅緻な床面は第13号住居址の西壁から出なくこの枠におさまるものと思われる。柱穴等はない。

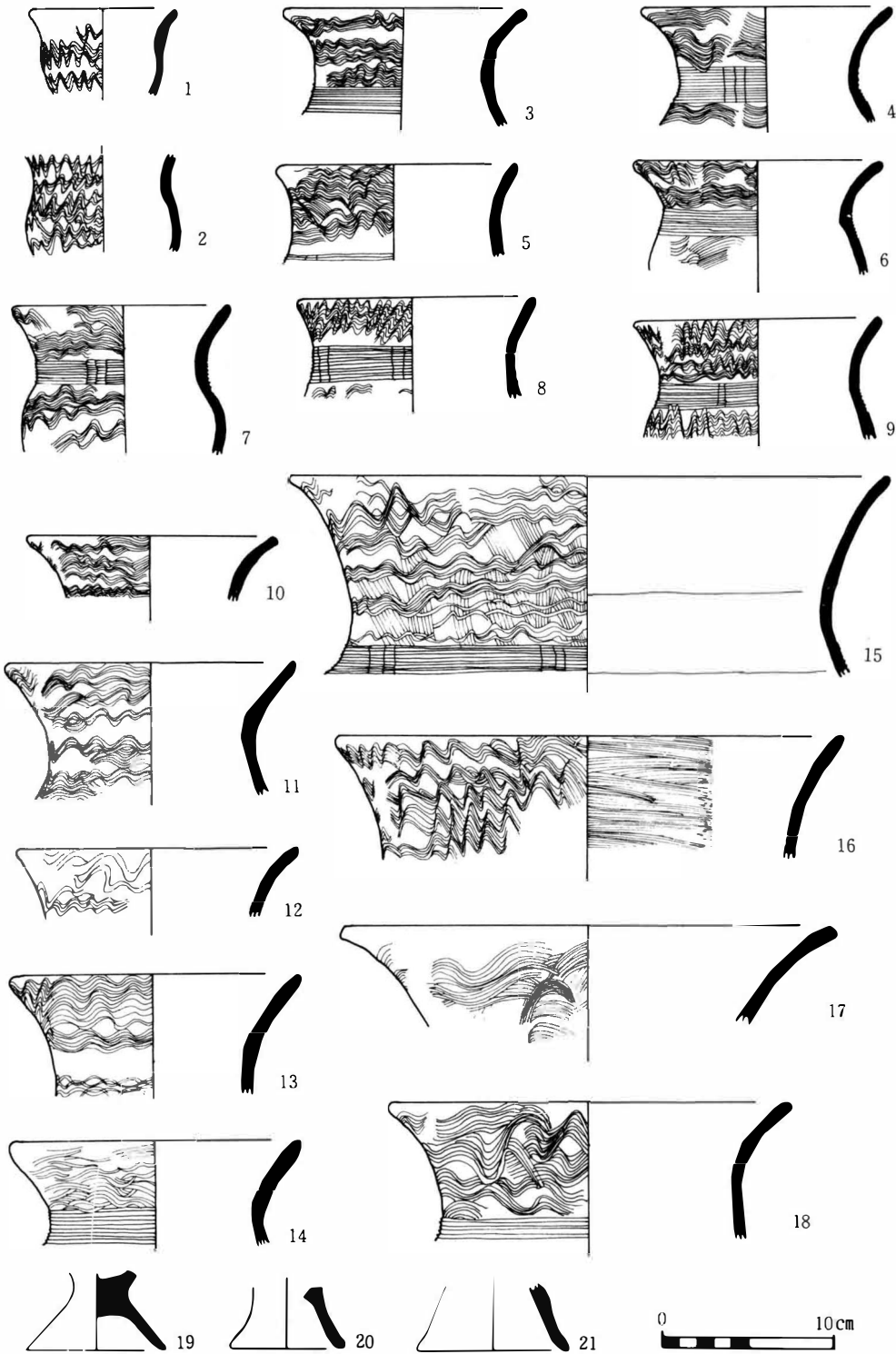
第13号住居址のプランは隅丸方形になるものと思われ、その規模はさだかでない。掘り込みはやや傾斜を有し、東壁で20cm・西壁で25cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴は南東隅から径68cm・深さ17cmの大形のピットを検出した。炉は調査地内と調査地外の境いから発見したが全形及び主軸のかたよりは明確でない。検出した部位は長軸55cmで、約3cm程舟底状に窪むようで、内に焼土が残存し、南に長軸15cm程の石がおかれていた。

遺物 出土量は非常に多く、甕・高坏形土器が目立つ。

甕形土器（第25図）器形には大（15～18）中（3～14）小（1・2）がある。総体的にみる



第24图 第12·13·16号住居址、沟址12·13·14实测图



第25图 第12·13号住居址出土土器 (1)

と、頸部が肥厚し、直立的に立ち上がるものと内面に鈍い稜をもつもの(2・6)があり、そこから口縁部が外反し、端部が素直におさまるものを普通とするが、面取り様になるもの(9・17)もある。一方体部は2・7のように球形様丸味をもつものがあり、他はいくぶん丸味をもつが素直に外開する。文様構成は頸部に櫛描簾状文(4・5・7～9)、平行線文(3・6・14・18)が1帯(3・5～7・9・14・15・18)のものと2帯(4・8)のものがあるようである。これを境いとして口縁部から体部下半は、右上りの波状文が全面に認められる。小形の1・2及び中形の11・13には頸部文様がなく、大形のもの不明である。波状文は振幅・波長が一定でなく雑なものである。整形は刷毛及びヘラナデを基調とする。19～21は高台で、体部が球形丸味をもつ器形のものに付着されるものであろう。

高坏形土器(第26図)全形を知りえるものはない。坏部は内弯しながら立ち上がり口縁部で外反するもの(1・2)と体部上方で立ち上がり、同形態の口縁部になるもの(3・5)があり、4・5には口縁端部に小突起がつき、内面にヘラ先により刻みを入れている。この他浅鉢形を呈し、口縁部が短く立ち上がり気味になるものがあり、前記したものより小形である。これらは内・外面とも良く研磨され赤色塗彩がほどこされる。脚部の破片も多く出土しており、9・11に代表されるようにラッパ状に外開し、裾部は更に外開する。底部及び外面はよく研磨がほどこされ赤色を呈する。ただ12は台付甕形土器の高台様になる。

器台形土器(第26図15)1点のみ確認され、碗形で口縁部が内弯する器形になる。外面は赤色塗彩される。

壺形土器(第27図1)多く出土している割りには図示できるものは1点にすぎない。それもくの字形に口縁部及び体部が外開するもので、赤色塗彩されずに無文のものである。この他頸部に簾状文で装飾され、内外面とも赤色塗彩される器種が大部分を占める。

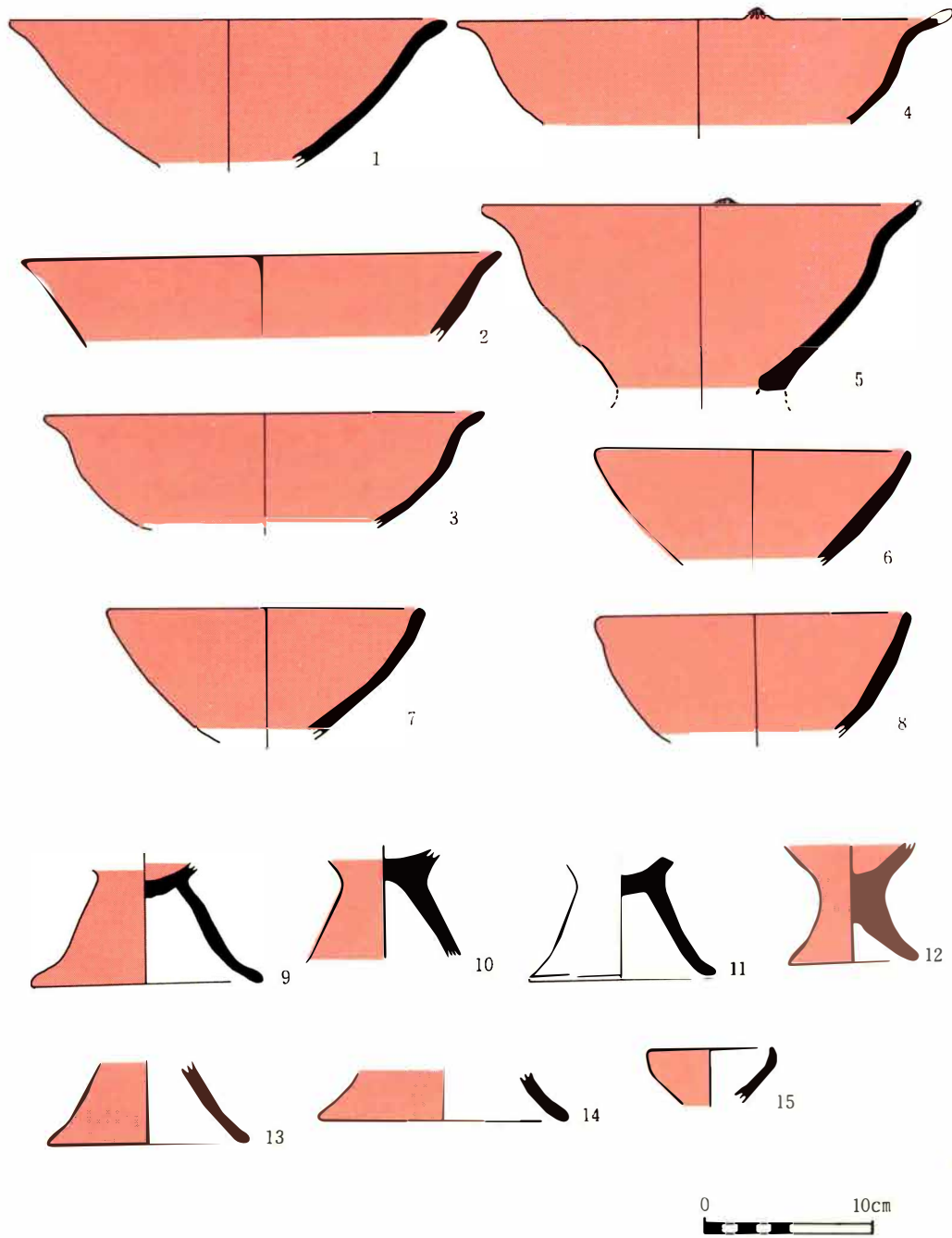
蓋形土器(第27図2～6)口縁部が長くなり、天井部でくびれ状を呈する断面三角形状の器形になり、器高は意外と高い。3は明確なつまみ部をなさないが、2・4・5は体部から立ち上がっており、上面が窪む形になり、2・5には小円孔がうがたれる。

鉢形土器(第27図7～14)体部が内弯気味に立ちあがり、更に口縁部が内弯し、口径より器高の数値が大きく又はそれに近くなるもの(8・10・12)と体部が直線的に外開するもの(7・9・11・13)がある。また後者の7は低い高台が付され、9を除き他は両面とも研磨され赤色塗彩される。9は口縁部内面がえぐれ、全面に刷毛整形で調整される。前者は外面のみに赤色塗彩される。14は片口で体部は直立的に立ち上がり、口縁部はいくぶん内弯気味になる。

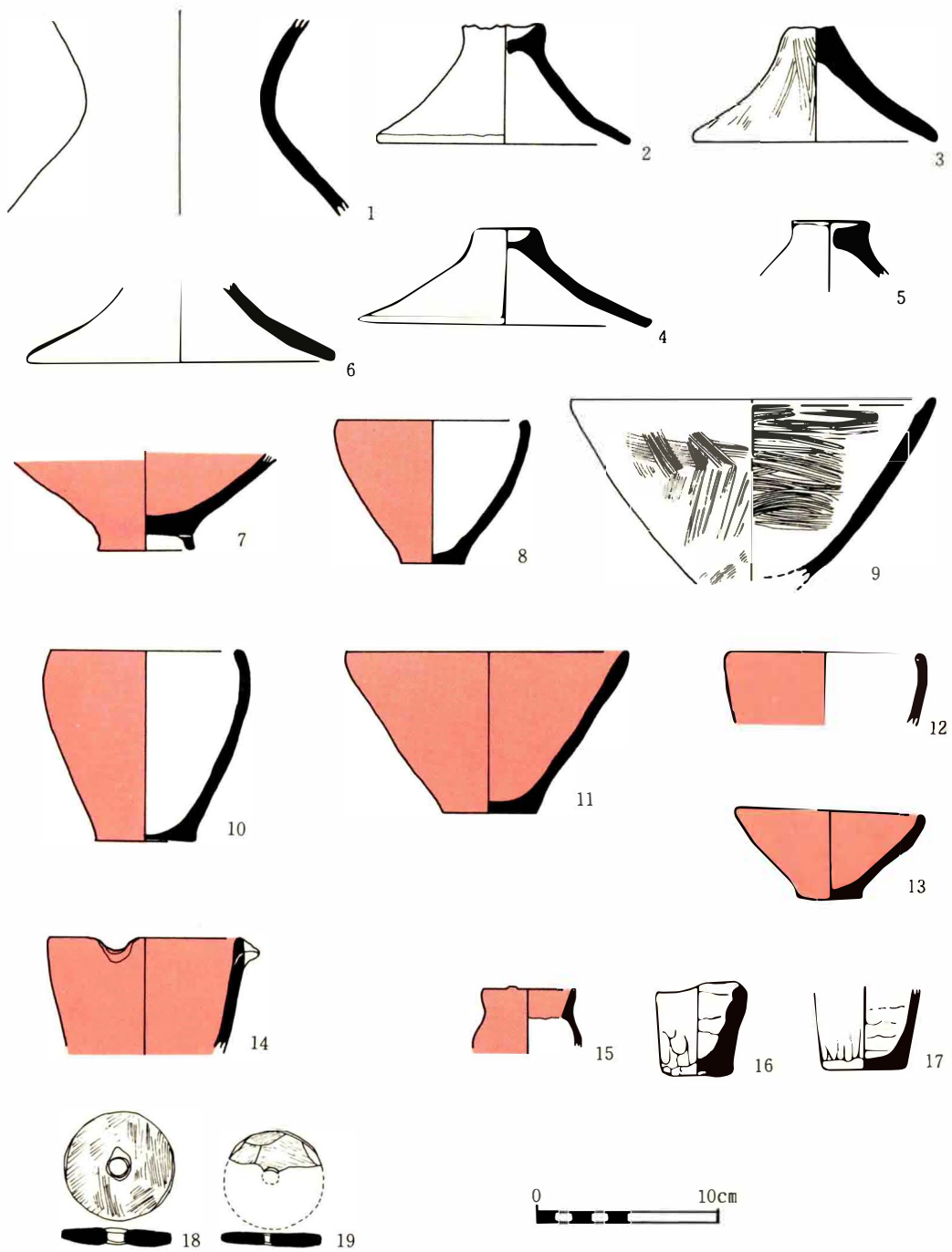
ミニチュア形土器(第27図15～17)小形の埴形土器(15)と手捏形土器(16・17)がある。15は口縁部が外開し、球形胴になるものと思われ、外面及び内面頸部上は赤色塗彩が施こされる。16・17には輪積成形痕及び指頭痕が顕著に残る。

石製紡錘車(第27図18・19)2点出土しているが、1点は破片である。18は直径6.2cm・厚さ0.5cmの凸レンズ状になり、中央に0.5cmの円孔を両側からあけられる。粘板岩製である。

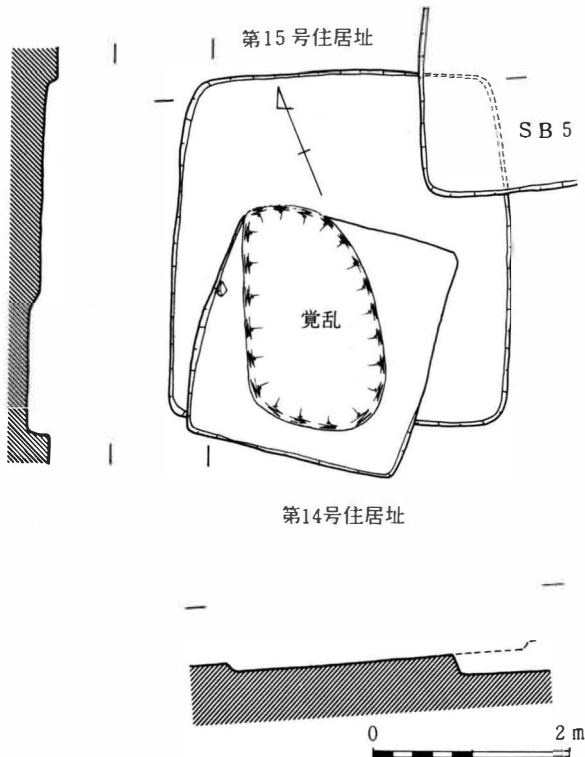
これらの他に床面直上及び覆土中から鹿の骨が出土し、保存状態のよいものに肋骨片が2本



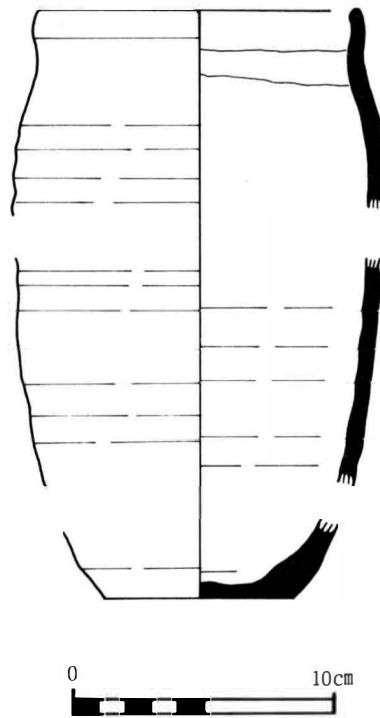
第26图 第12·13号住居址出土土器 (2)



第27图 第12·13号住居址出土土器(3)·石器



第28図 第14・15号住居址実測図



第29図 第14号住居址出土土器

出土しただけで、卜占に使用したと思われる肩甲骨片も出土したが、とり上げる際には骨粉化してしまっていた。

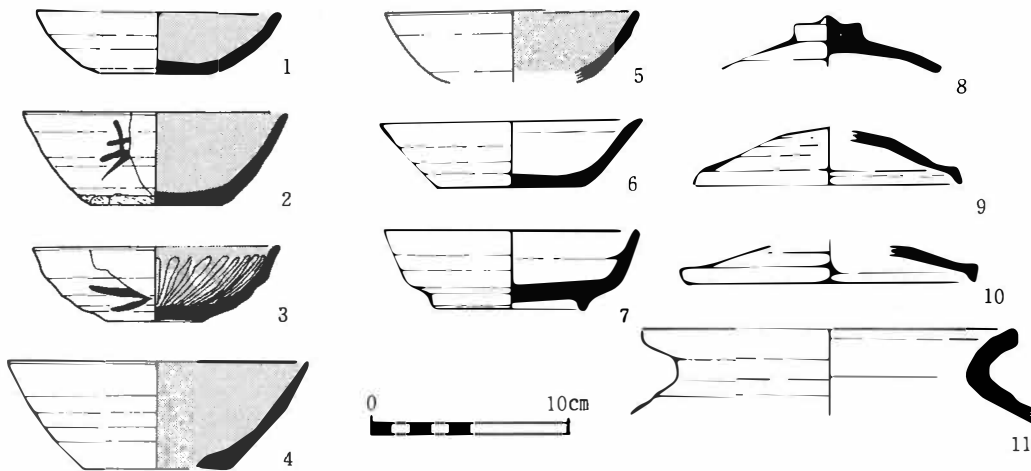
13 第14号住居址 (第28・29図)

遺構 調査地西北に位置し、上部に小竪穴址1があり南壁が破壊され、第15号住居址より新しい。この住居址も第15号住居址検出床面より更に落ち込みがあることで判明した住居址で、西壁・南壁の掘り込みを確認したのみである。プランは方形を呈し、規模は南北2.45m・東西2.38mの小形のものである。掘り込みは南壁中央で15cm・西壁で第15号住居址の床面より8cm程低くなる。床面はそのほとんどが後世の攪乱をうけるが、西に傾斜し、軟弱である。柱穴・カマド等はなかったが、床面付近は炭化物が多く散在していた。

遺物 出土量は少なく、床面直上から壺形土器が1点出土しているのみである。器形は底部が平底で、体部はやや丸味のある長胴形になり、頸部が直立し、口縁部は短く内弯する。最大径は肩部にある。整形は全面にロクロ目を残し、底部はヘラにより調整される。

14 第15号住居址 (第28・30図)

遺構 上部に小竪穴址2があり、北東隅を第5号住居址に、南側を第14号住居址に切られる。



第30図 第15号住居址出土土器

プランは南北3.54m・東西3.42mの隅丸方形である。掘り込みはやや傾斜があり8cmを測る。

遺物 図示したものは土師器環形土器、須恵器環・蓋・甕形土器である。この他に土師器甕形土器の体部破片が出土している。土師器環形土器は体部が内弯気味にたち上がり口縁部がわずかに外反するもの(1・3)がある他は素直に仕上げる。外面にロクロ痕が残り、1～5は内面研磨及び黒色処理され、3には放射状暗文がある。6・7は須恵器環形土器で、ロクロ目が明瞭に残り、6の口縁部は外反し、7のものは体部から直線的で、直立する高台が付される。これらはともに糸切り痕を残す。蓋形土器のつまみは扁平な擬宝珠形で、天井部は丸味があり、口縁部は屈曲し先端は嘴状になる。甕形土器は頸部が強くくの字状に折れ、口縁部は更に外反し、端部はわずかにたち上がり、面取りされる。

15 第16号住居址 (第24図)

遺構 溝址13・14を検出中に発見したもので、これらの遺構に東・西側が切られ、また北側は調査地外へ延びるため南壁の一部分を検出したのみである。南壁は直線的になり、その掘り込みは傾斜を有し23cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴等他の施設は確認できなかった。

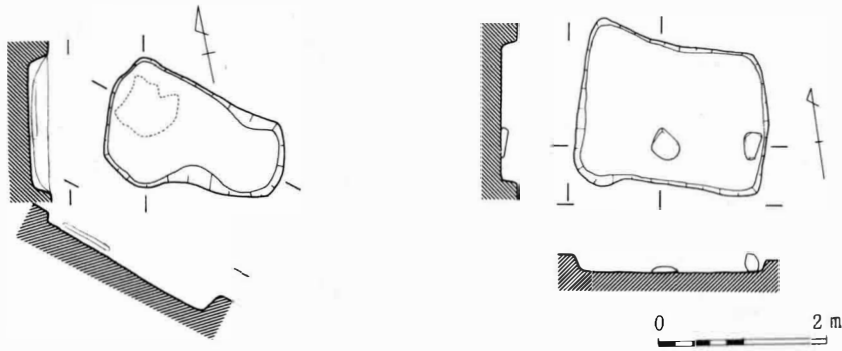
遺物 弥生時代土器片を数点得たのみで、他時期の遺物は認められなかった。(矢口忠良)

第3節 小竪穴址

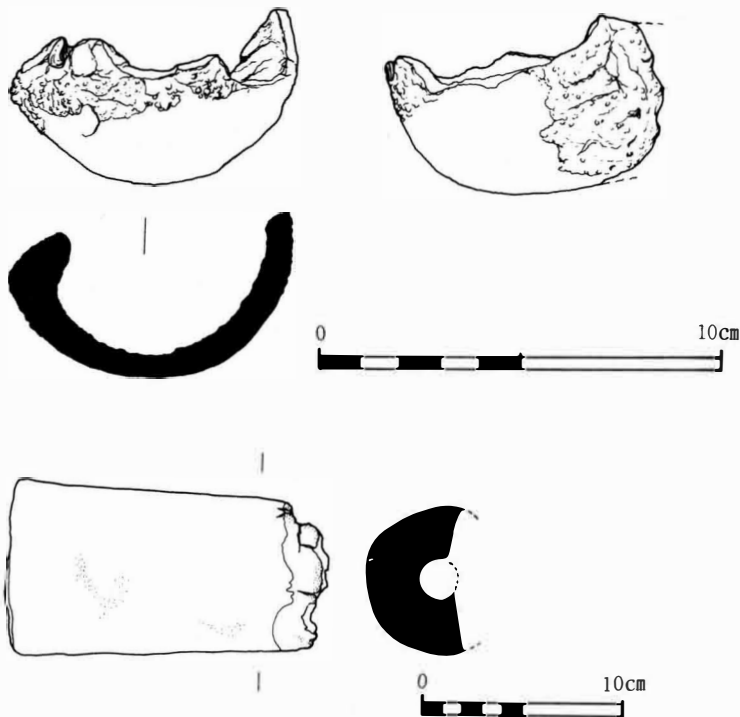
本節では通常の土壇より大きく、住居址形態を示す遺構で、生活の痕跡がないものをあてる。

1 小竪穴址1 (SK12) (第31図)

遺構 調査地の西北より検出され、第14号住居址の上部にある。プランは西壁が1.95m・東壁が1.7mで、北・南の壁中央が窪み状の隅丸不整形を呈する。尚東西壁間の距離は2.28m



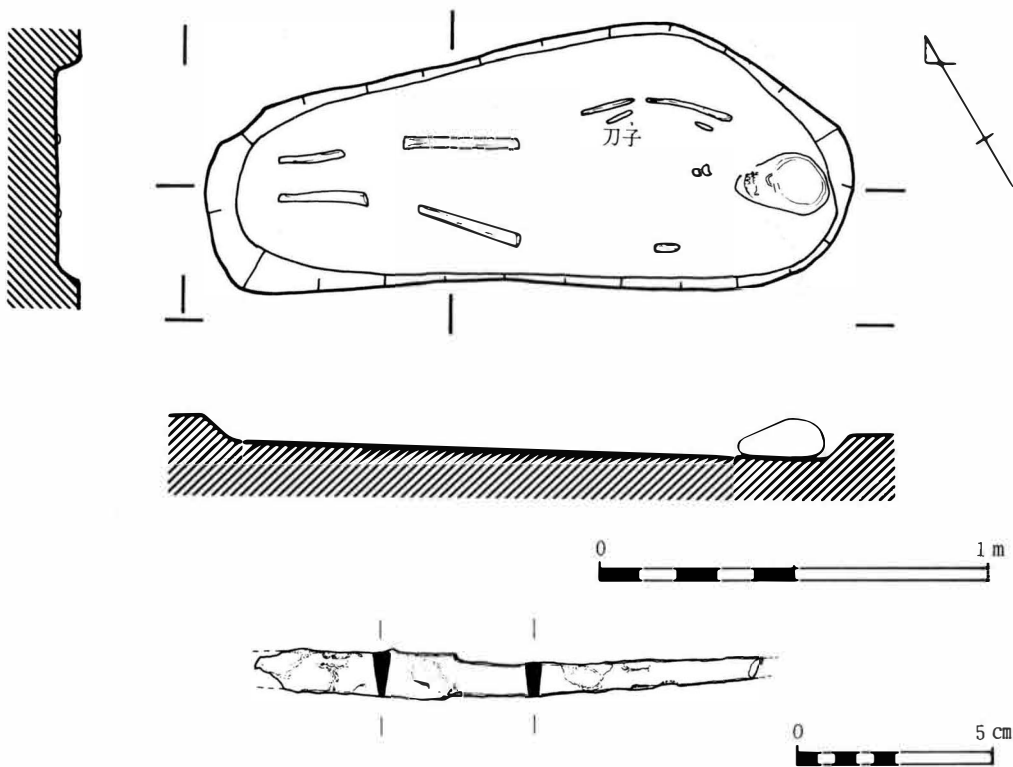
第31図 小堅穴址 1 (S K 12) ・ 2 (S K 13)実測図



第32図 小堅穴址(1) 及び周辺出土遺物(2)

を測る。掘り込みは傾斜を有し、東壁14cm・南壁20cm・西壁20cm・北壁19cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、それに接して長軸35cm程の礫が2個あった。そのうち西側のものは扁平なものである。焼土・柱穴等はない。

遺物 全て覆土中からのもので、量も少なく、器種として土師器坏・甕形土器及び須恵器坏形土器が確認できる程度のものであった。

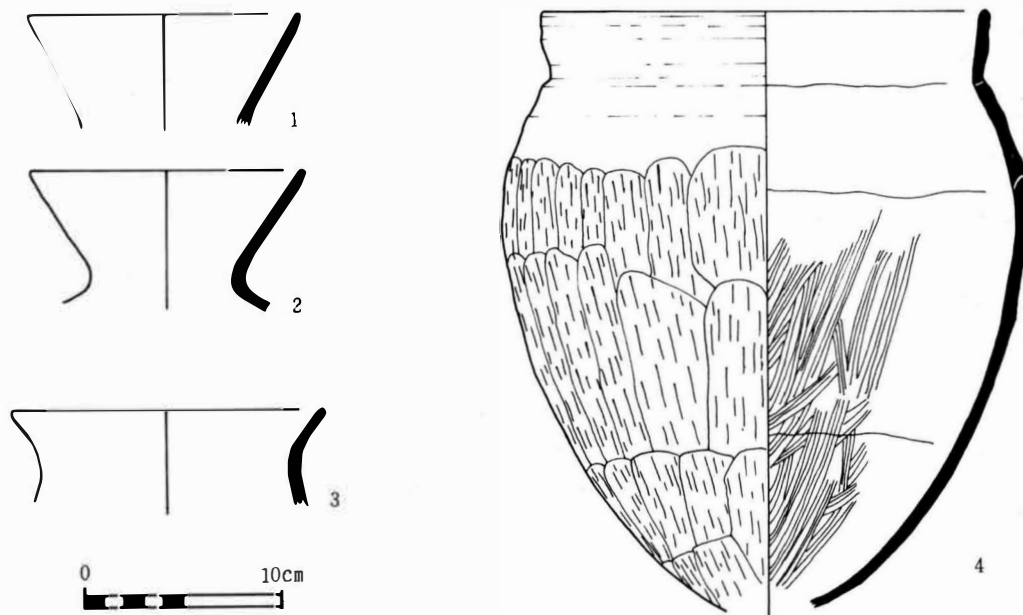


第33図 土坑墓(SK1) 実測図、出土刀子

2 小堅穴址 (SK13) (第31・32図、第7図版)

遺構 調査地西北部北端近くにあり、下部遺構に第15号住居址がある。プランは南西隅が張り出す不整隅丸長方形を呈する。長軸2.25m・南北軸の最大1.43mを測る。長軸方向はN-30°-Eである。掘り込みは傾斜を有し、長軸の西壁は浅く10cmで、東壁25cmを測り、床面は平坦であるが、西から東へ傾斜する。この遺構で注目されるのは、西側のふくらみ部中央よりやや西にかたよって65cm×70cmの範囲(図中鎖線内)に床面より4cm程浮いて、厚さ6cmの砂利状の焼土塊を含む(鉄滓)が集中していたことである。ちなみにこの周辺包含層より外径8cm、円孔1.8cmの羽口片を3点得ているので、これと積極的に関係する遺物であると考えている。覆土は2層にわかれ、上層が暗黄色砂質土層でその下底に鉄滓塊がある。下層は木炭混り暗黄褐色砂質土層である。

遺物 鉄滓集中地点より土師器のロクロ目を残す坏形土器1点と遺構東側の上層下部から鉄分を付着した小椀形の埴塼と思われる土器を1点得たのみである。この埴塼は手捏様で、外面が強熱のためかごつごつして、鉄分が付着し重い。(矢口忠良)



第34図 土塚4(1・2) 11(3) 14(4) 出土土器

第4節 土塚墓及び土塚

1 土塚墓 (SK 1) (第33図、第7図版)

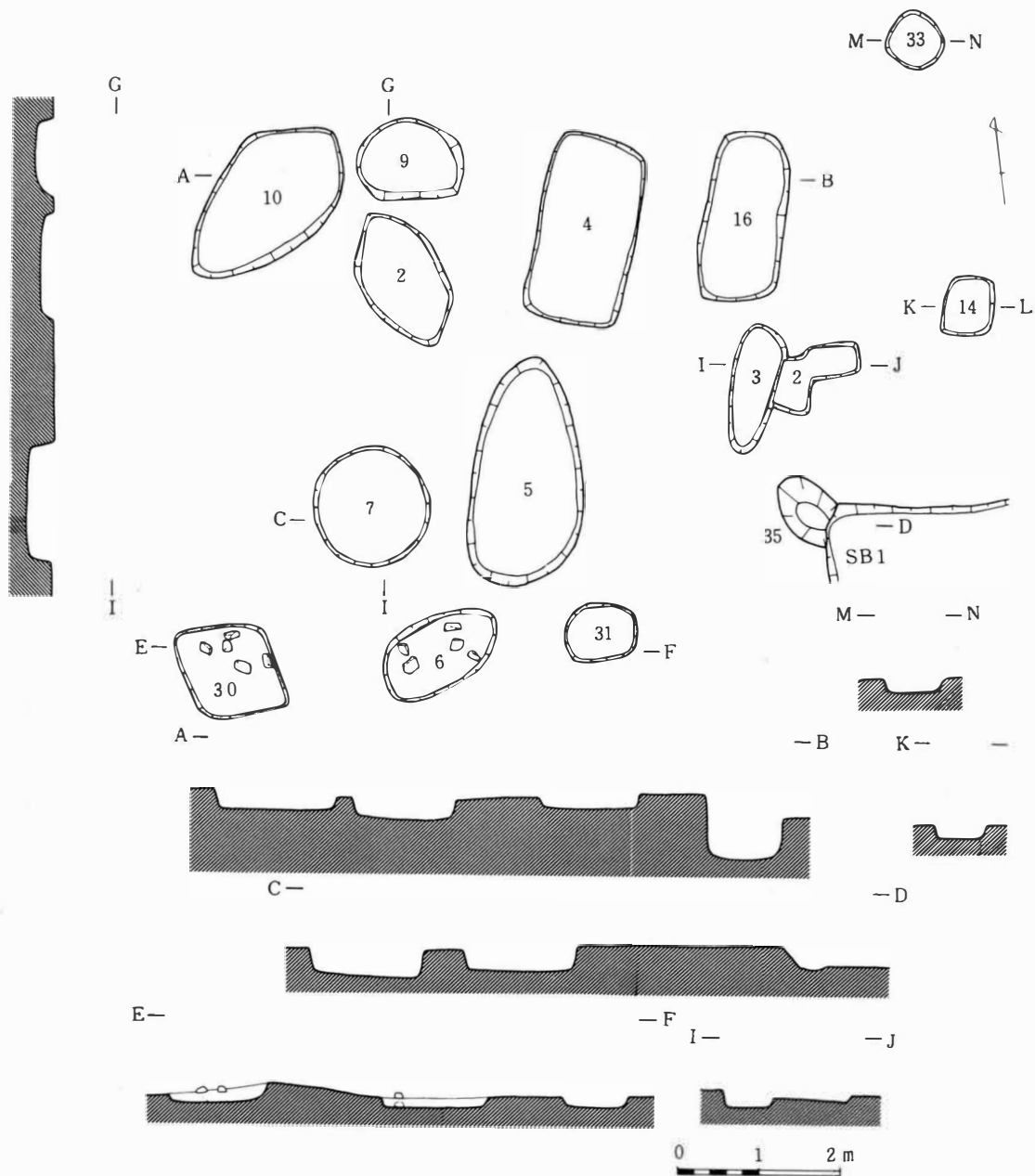
遺構 溝址1を検出中に頭蓋骨の上部を削ずりとして、初めて発見した遺構である。プランは長軸が東西方向にある、長軸1.67m・短軸最大巾0.7mの不整楕円形を呈する。人骨は東に頭部を、西に足を向ける伸展葬で、胸部にあたる部位の掘り込みに短軸最大巾がある。掘り込みは傾斜を有し、底面が西から東へ傾斜し、東壁下が最も深く7cmを測る。遺骸は底面に接する。

遺物 遺骸右手の胸部付近より、刃先を下方に向けた刀子が1点出土したのみである。刀子は径が長く、背閃を有するものである。

2 土塚

柱穴と思われる円形及び柱痕様ピットを残すものを除きこれらより大きいもので、墓址である可能性を残し又意味不明なものを土塚として扱う。この遺構は上部と下部に分けることができ、その確認差は10cm程ある。これらはSKの記号を付したが、SK 1は土塚墓、SK 12・13は小堅穴址としてあつかった。

(1) 上部土塚群(第35図、第7図版) 第1・8号住居址付近を東端に、調査地中央よりやや北側の溝址9付近より南側に展開する。次記した表にみるとおり形状・規模・方向等一定でな



第35図 上部土塚群実測図 (1:80)

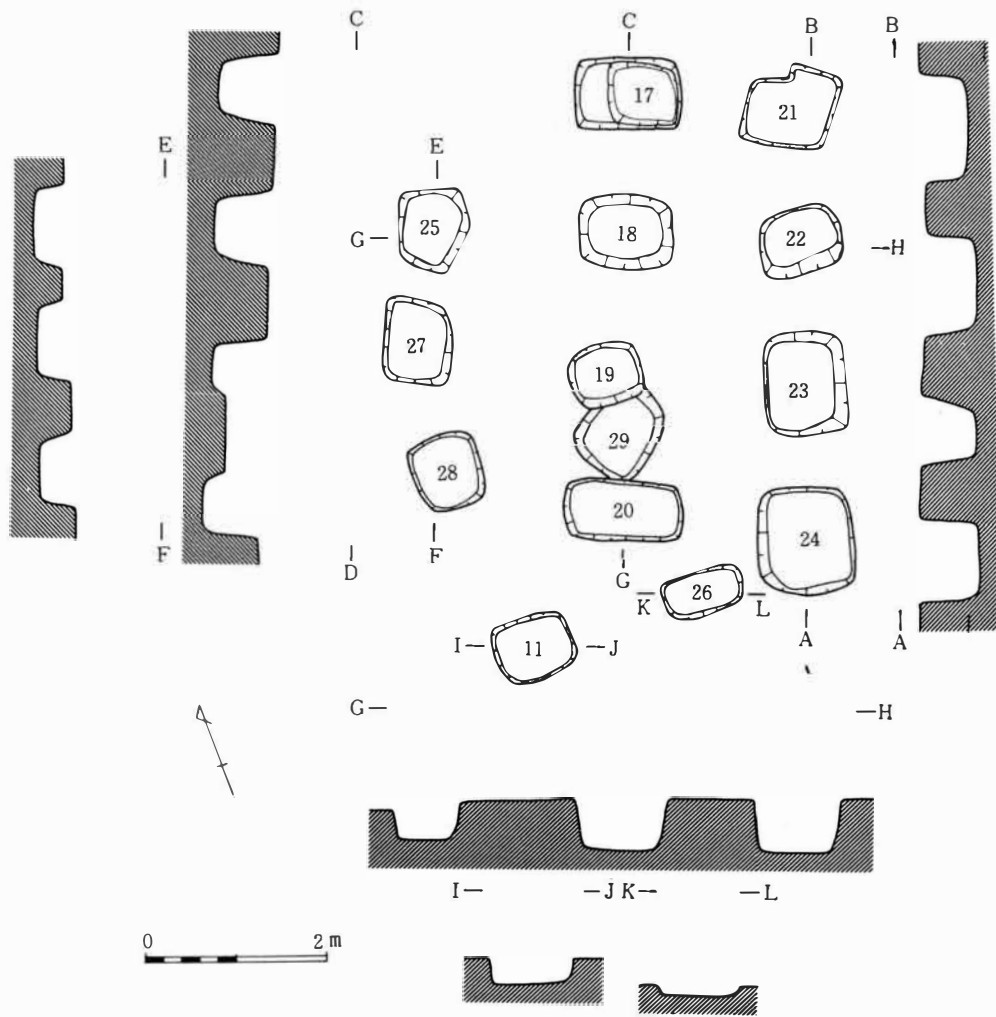
い。ただこの中で注目するものに、土塚墓と近似又はやや大きい数値のものが認められ、それも下部土塚群に重なるような集中した配置状態にあり、群としての墓塚が想定できる可能性があるがそれを証する出土遺物はない。

第1表上部土坑群一覧表

番号	図番号	プラン	規模(東西×南北×深さ) ^m	長軸方向	出土遺物等	備考
2	35	不整形	(1.0)×0.7×20			長方形のもの2個か
3	〃	長卵形	0.6×1.62×8	N-22°-E		墓壇?
4	〃	隅丸長方形	1.2×2.35×17	N-22°-E	土師器壇	〃?・下部土壇?
5	〃	長卵形	1.4×2.85×29	N-16°-E		〃?
6	〃	不整楕円	0.93×1.6×12	N-62°-W	覆土上面に礫	〃?
7	〃	円形	径1.5×22			〃?
8	〃	不整楕円	1.31×1.0×20	N-80°-W		〃?
9	〃	不整楕円	1.03×1.83×16	N-35°-W		〃?
10	〃	長卵形	1.43×2.45×22	N-54°-E		
14	35	不整形	0.62×0.75×16	N-14°-E	土師器甕	墓壇?
15	〃	長卵形	1.4×2.85×30	N-20°-E		〃?
16	〃	隅丸長方形	1.0×2.12×75	N-16°-E		
30	〃	菱形	1.13×1.17×15			
31	〃	不整楕円	0.9×0.75×10	N-80°-E		
32	22	楕円	0.44×0.6×11	N-25°-E		SB11を切る
33	35	不整形	径0.75×17×22		覆土上面に礫	
34	4	不整形	0.7×0.6×(14)	N-86°-W		SB1内
35	4	楕円形	(0.8)×63×27	N-40°-W		SB1を切る
36	4	〃	0.96×0.8×47	N-70°-E		SB1
37	15	不整長楕円	06×(1.72)×50	南北		
38	7	長卵形	1.4×0.7×54	N-72°-W		
39	8	不整楕円	1.45×1.05×40	N-78°-W		

(2) 下部土坑群(第36図、第8図版)上部の大形土坑群下より検出したもので、重複関係にあるものは19と29のみで、他は独立して存在する。形態は割合しっかりして、長方形態をとるものが多く、底部が平坦で、掘り込みもていねいである。その配置から建物址とも考えられるが、掘り込みの規模・主軸が不揃いで柱列として通らない。それ故上部のものを伸展葬と考え、下部をその深さから座位屈葬用の墓壇と考える方がより説得力があるように思う。

遺物 上部・下部遺構のどちらにも平安時代に比定される土師器・須恵器片及び少量ではあるが弥生時代土器が土坑に混入しているが、時期を決する遺物ではない。図示できるものに土坑4から出土した古い形態の壇形土器口縁部付近、土坑11から頸部が立ち上がりそこから口縁部



第36図 下部土壇群実測図

がゆるく外開する甕形土器、14から口縁部が立ち上がり、体部が砲弾形になり肩部より上をロクロ整形し、下部を底部まで4回のタテヘラケズリが施こされる甕形土器がある。

第2表 下部土壇群一覧表

番号	図番号	プラン	規模(東西 ^m ×南北 ^m ×深さ ^{cm})	長軸方向	出土遺物等	備考
11	36	隅丸長方形	0.85×0.62×27	N-87°-E	土師器甕	
17	〃	長方形	1.17×0.8×60	N-70°-W		2個か
18	〃	隅丸長方形	1.0×0.84×58	N-70°-W		
19	〃	〃	0.8×0.7×55	N-88°-W		SK 29を切る

20	〃	隅丸長方形	1.3 × 0.68 × 60	N-70°-W		
21	〃	不整長方形	0.98 × 0.94 × 63	N-70°-W		
22	〃	隅丸長方形	0.92 × 0.74 × 60	N-88°-W		
23	〃	〃	0.9 × 1.15 × 55	N-20°-E		
24	〃	〃	1.05 × 1.2 × 42	N-20°-E		
25	36	不整方形	0.8 × 0.9 × 37	N-28°-E		
26	〃	隅丸長方形	0.9 × 0.52 × 13	N-83°-W		
27	〃	不整方形	0.76 × 0.95 × 35	N-23°-E		
28	〃	〃	0.75 × 0.85 × 40	南 北		
29	〃	隅丸長方形	0.84 × 1.4 × 40	N-56°-E		

(矢口忠良)

3 出土人骨について

第1号人骨 埋葬の形態は仰臥伸展位で、各骨の連結位置から移動の跡はみられない。両上肢は体側に平行で、下肢も約25cm間隔で伸直であった。しかし残された骨の部位は頭蓋骨の一部と各長骨の骨体中央部のみで、これらの遺存骨からみでの推定によるものである。

頭蓋骨は発掘の際に前頭部を大きく削取されたが、上下顎の前部が比較的保存され、右側頭骨もやや原形を保つ。しかし土圧により全体に押し潰されて変形し、特に下顎骨は前下方へ突出し、歯列が上方へ露出していた。その他頸椎2個、左右の上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨等は、上下においてその形状は観察されたが、クリーニングの際に殆んど崩壊し、骨粉状となった。頭頂骨より脛骨下端まで約143cmであった。

以下、残された部分の骨について略記する。

下顎骨の左側下顎角の前後がのこる。下顎枝角は約132で大きく、下顎枝幅は小さい。第2大臼歯部における下顎体高も低い。歯の保存は良好で歯式は次のとおりである。

×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I	I	I	I	C
P ₂	P ₁	M ₁	M ₂	M ₃	C	I	I	I	I	C
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
×										

- 印 残存歯
- 印 歯根のみが残る
- ×印 欠失歯

すべての歯に齲蝕痕や歯石の沈着は全く認められない。下顎臼歯部の頬側縁にやや強い一様な咬耗がみられるが、全体に進捗は少なく、歯列も整形である。咬耗度はMartinの第1～2度に相当する。萌出した第3大臼歯にも僅かな咬耗がみられ、壮年期に属する年齢が推定される。

なお、後頭骨の後側、頭蓋底の下部に須恵器片がそれぞれ附着していた。

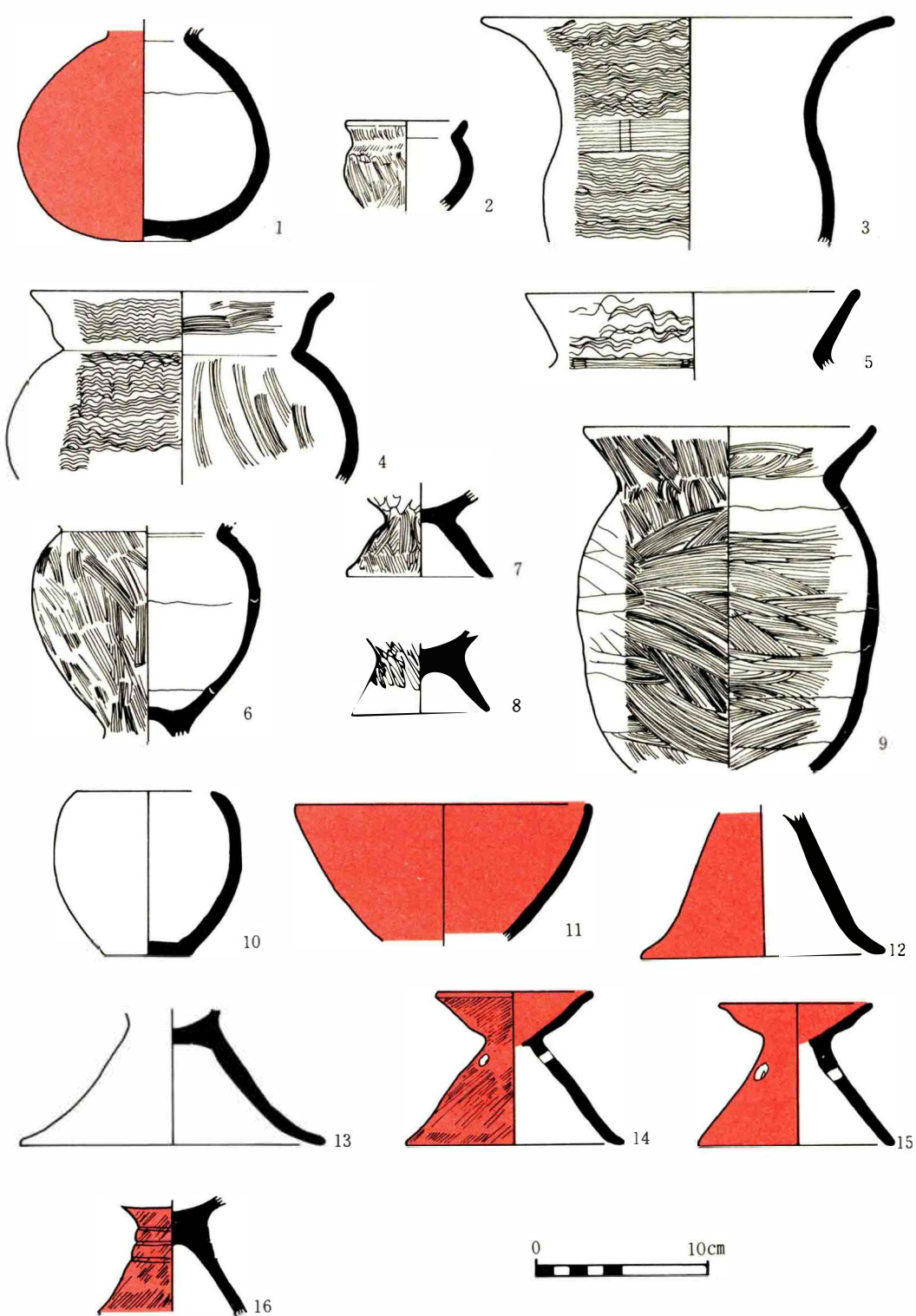
第2号人骨 すでに取り上げられていた骨の一部で、頭蓋骨各部の細片に限られている。褐色の堅緻な骨質である(須恵器片1ヶ混入)。

後頭部の人字縫合は断片的であるが大部分で離開している。上顎骨の一部が残り、左側歯槽に犬歯・第2大臼歯が植立している。この部位の歯槽縁にはやや吸収の痕がみられる。犬歯の尖頭は鈍く、舌側面は一面化し、いわゆる浮彫像の形成はみられない。第二大臼歯の近・遠にの舌側咬頭は咬耗により平滑面をつくり、中心隆線も消失している。象牙質の露出が点状に見える。第1号に比して同歯種の咬耗程度は著しく進んでいる。

(西沢寿晃)

第5節 溝 址 (第3・37・38図、第13・14図版)

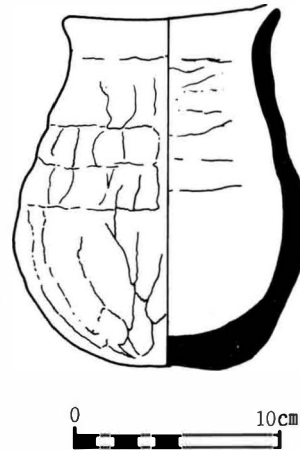
平安時代遺構面を検出中に発見したものに1～11があり、他の12～14は第3～5号住居址の検出中にその存在が明らかになった。本来溝の用途に共しうるものは、溝址7及び13・14である。7は上下部土坑群より古いもので、これらに切られ、第9号住居址より新しく、その上部から溝が掘られ、U字形を呈する掘り込がしっかりしたもので、東から西へ流路をとる。巾は50～70cmの範囲にあり、東端付近の深さは16cm・中位で22cm・西端で38cmを測る。13は14と併行して存在し、第12・13・16号住居址を切って底面が北方向にいくに従い低くなっていることから南から北に流路をとるものと思われる。巾1.7m・深さ1.15mのU字形を呈する。14は13とほぼ形態等似るが、それよりも大形で、南端が巾広く3.4m、調査地北端は狭くなり2.0mを測る。深さは南で1.05m・北で1.3mを測る。この溝址に巾約1mで深さ60cmのU字形態である15がその終末形態から積極的に関係するものと思われる。ただこれらは何のために掘られたか意味するところは不明である。1～4は同一のもので東端が広く深く1.59m・24cmを測り、2の西端で巾54cm・深さ7cm、3の同所で巾35cm・深さ11cm、4のものは巾28cm・深さ8cmの浅いU字溝になる。巾30～40cm、深さ6～13cmの8・9はその方向から3に接続するものと思われる。5は北から南方向に流路をとるもので、第6号住居址の上部を覆う。北の先端付近は巾55cmで深さ10cmを測り、第6号住居址付近では巾75cm・深さ16cmの浅いU字溝形を呈する。6は第7号住居址の東南隅から住居址内を覆うものと思われるが、住居址の検出を急いだので全形を露呈できなかった。確認規模は全長3.8mで、巾2.5m・深さ10cmのもので西端に拳大の角礫の集中カ所がみられた。11・12はやはり第7号住居址の上部にあり、11は東西方向に2.9



第37图 沟址13出土土器

m の長さで、巾30cm・深さ25cmを測る。12は11にたいしほぼ直角に折れ南北方向で、長さ 1.5m ・巾27cm・深さ 9 cmのものであり周溝様形態を呈する。

遺物 1～12の覆土中からは平安時代の土師器・須恵器の小破片が出土しているが、図示できるものは4の先端から出土した体部下半がふくれ、頸部がつぼまり、口縁部が短かく外開するいわば蛸壺形の土器（第38図）があるだけである。13・14からは弥生時代の土器が多く出土し、特に13からの覆土中からみるべきものがある（第37図）。器種には埴・甕・鉢・高坏・器台形土器がある。



第38図 溝址4出土土器

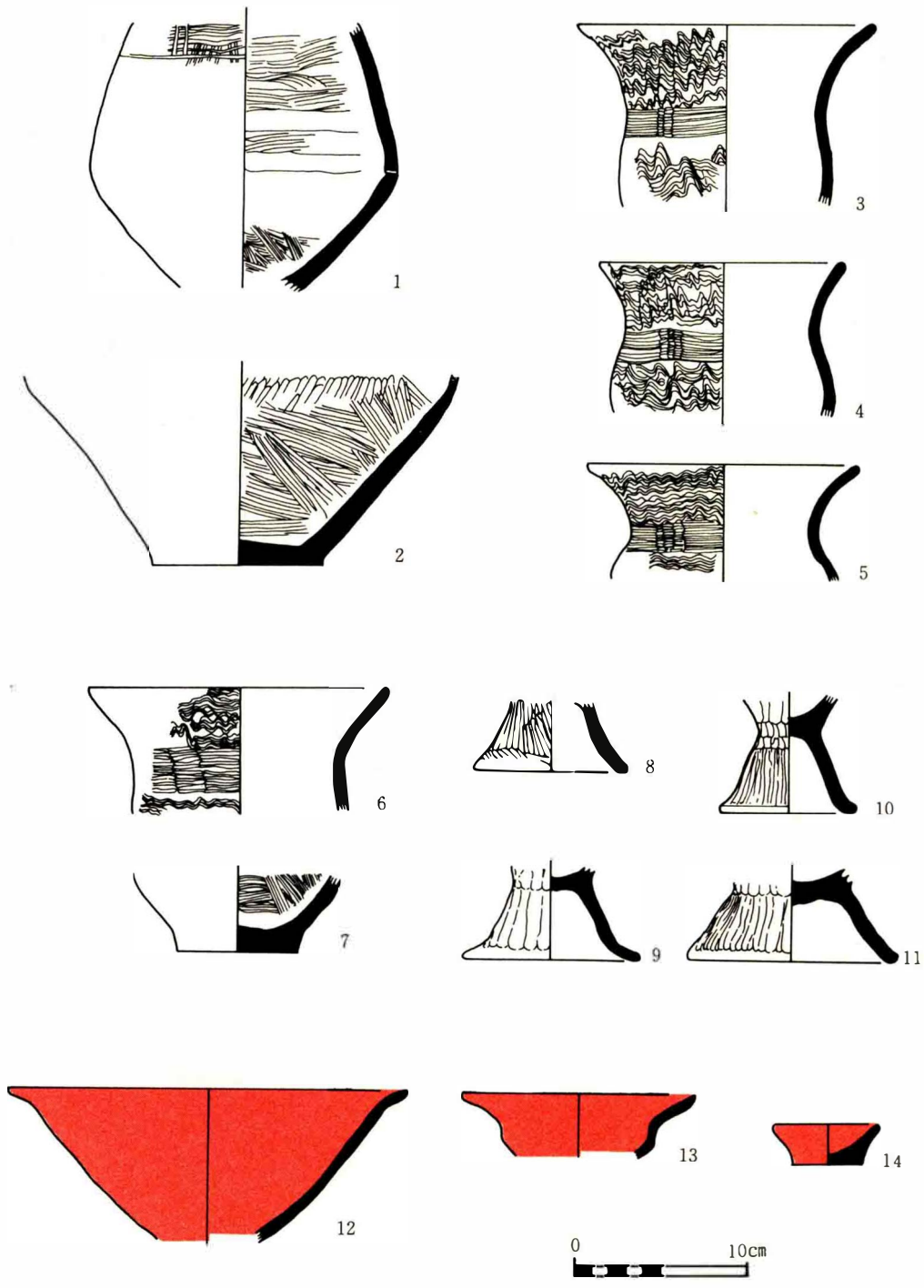
埴形土器（1）口縁部を欠き、体部が下膨れの球形胴である。外面はよく研磨され赤色塗彩される。

甕形土器（2～9）文様及び器形から4種に大別することができる。その1は楕状工具により施文されるもので、3は口縁部が直立した頸部から大きく外反し、その端部に最大径があり、肩がわずかに張る器形になり、4は体部上半に最大形を有し、頸部がくの字形に屈開し、そこから内弯気味に立ち上がった口縁部は上半から更に外反し、球形胴になる器形で、5の口縁部は直線的な器形になる。これらの施文は3・5は頸部に簾状文を有し口縁部・体部は右上がりの波状文で飾られ、内面はヘラ状工具によりていねいにナデ整形される。4は波状文のみで施文され、内面の整形は刷毛ナデによる。その2は小形のもの（2）で、口縁部が頸部よりくの字形に屈開し、体部が球形で、外面に比較的深い刷毛目を残す。その3は高台が付され、外面に刷毛を顕著に残し、頸部はくの字形に折れ、肩部が張り最大径から底部にかけて集約する器形で、高台は短く直線的に外開した後裾部でわずかに外反する。その4は大形のもの（9）で体部中位が筒形になり肩部・底部がこけるずんぐりしたもので、頸部がくの字を呈し、口縁部が直線的に外開して端部付近が内弯気味になる。内外面の整形は刷毛により、細かい整形痕を残す。

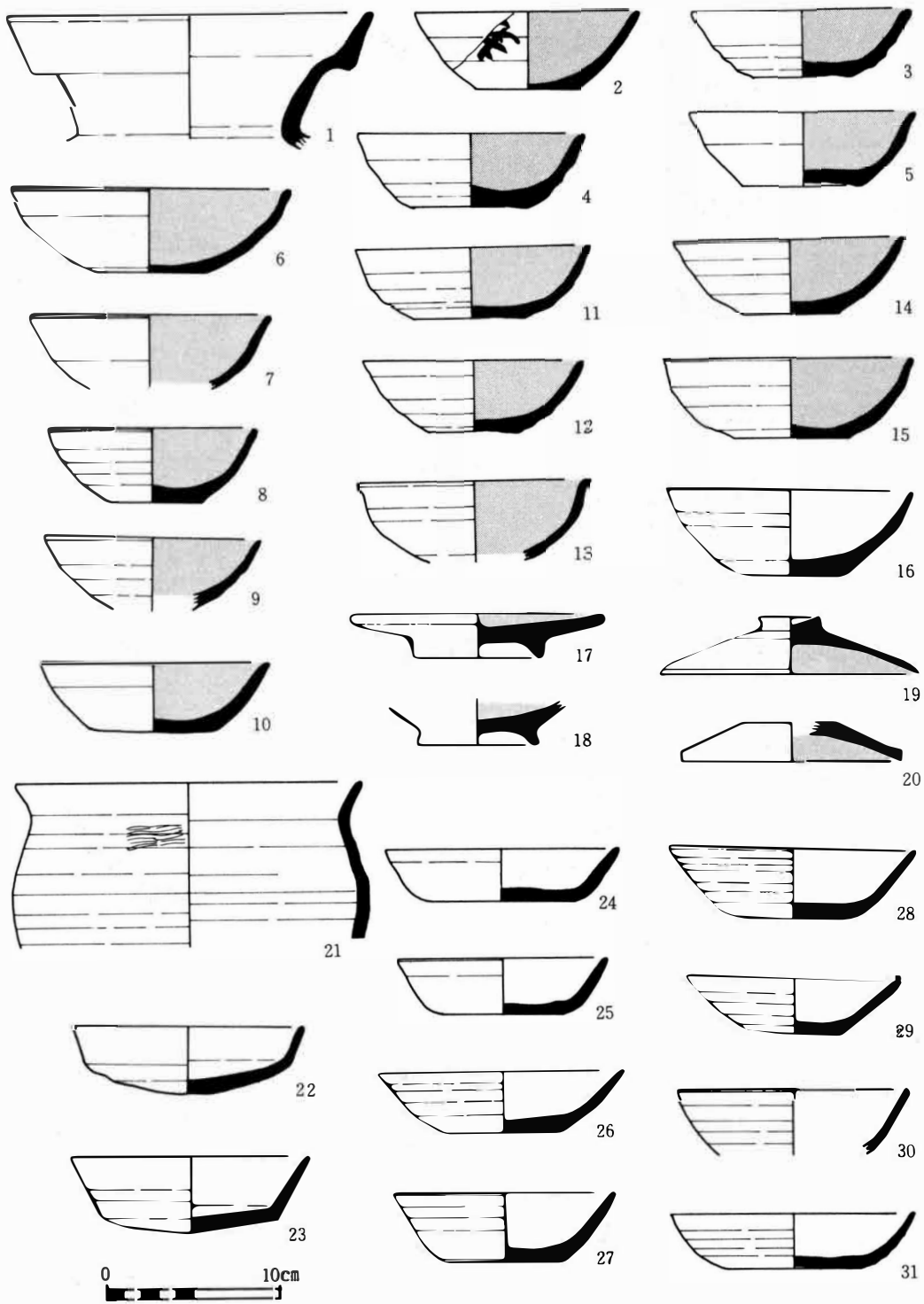
鉢形土器（10）体部から口縁部にかけて内弯する器形で、底部は平底になる。ヘラミガキ整形が施こされる。

高坏土器（11～13）坏部は浅鉢形のもので口縁端部は肥厚し内弯する。脚部はラッパ状に外開し裾部は更に外反する器形になる。坏部内外面及び脚部外面は研磨され赤色塗彩される。

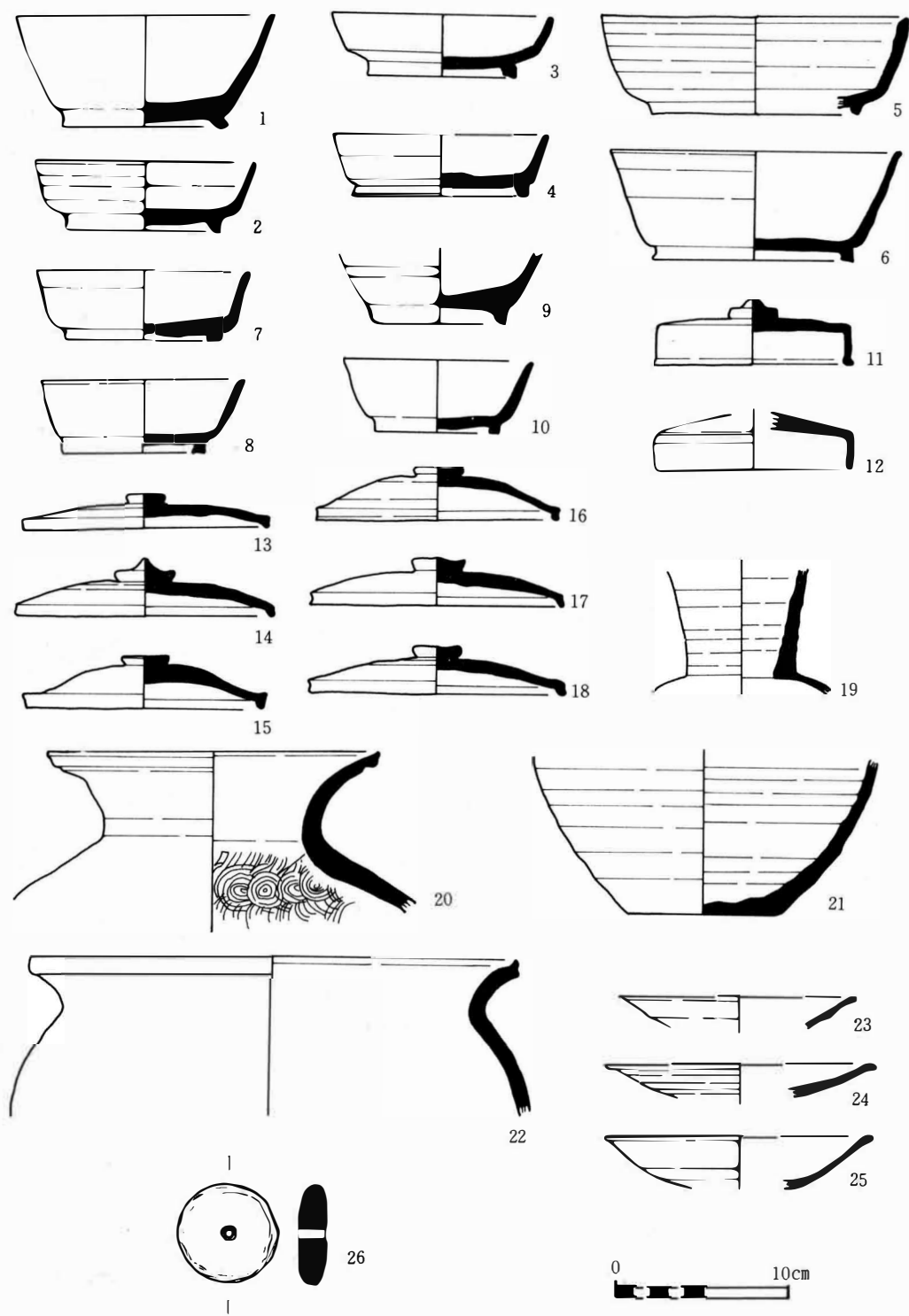
器台形土器（14～16）ほぼ完形のもものが2点出土している。坏部口縁部がわずかに外反し、体部が直線的で、14・15は底部から脚部にかけて円孔が貫ぬかれ、脚部は直線的に外開し、上方に3個の円孔が穿たれる。14の裾部は外反する。16は脚部上方に3本の沈線がめぐらされる。ともに坏部内外面及び脚部外面は研磨され赤色塗彩が施こされる。（矢口忠良）



第39図 包含層出土の弥生時代土器



第40図 包含層出土土師器(1~21)・須恵器(22-31)



第41図 包含層出土須恵器(1~22)・灰釉陶器(23~25)・土製品(26)

第6節 包含層出土の遺物

弥生時代遺物（第39図）

出土量は少なく、第12・13号住居址付近により多くみられた。1・2は壺形土器底部付近の破片で、1は頸部から体部が内弯気味に外開し、下半に最大径があり、そこから底部にかけこける器形になり、外面肩部に簾状文様が施こされる。2も同様器形になると思われ、内面にヘラ及び刷毛による整形痕を残す。3～6は甕形土器口縁部から体部上半までの破片で文様は頸部に簾状文をめぐらし、それを境いに口縁部から体部下半にかけ右上がりの波状文が施こされる。7は底部片で内面に刷毛による整形痕が残され、他面はタテヘラナデにより整形される。8～11は同種の高台でラッパ状に外開し裾部が更に外反する器形になる。12・13は高坏形土器坏部の破片で、12は内弯しながら外開した体部が口縁部にいたり外反する器形で、13は体部上端が立ち上がり、口縁が大きく外開する。共に内外面とも研磨され赤色塗彩される。14は皿形の小型の土器である。

土師器（第40図1～21）

出土量は多く、図示できるものは坏形土器を中心とする。1は有段口縁を呈する古手の壺形土器片である。坏形土器（2～16）は椀形の体部で、口縁部がわずかに外反し、底部はロクロからの切離を糸切りによってなされておき、上げ底状を呈する器形になる。外面にはロクロ目が残り、内面は16を除きヘラミガキされ、黒色処理される。2の体部外面に墨書がある。17・18は外開する高台が付される皿形の土器で、内面が黒色処理される。19・20は蓋形土器で、19のつまみは上端が窪み、体部は丸味をもって外開し、口縁部が折れる器形になり、20はつまみ部を欠き形態はわからないが、天井部はヘラケズリで平坦になり、体部は直線的で、口縁部で強く折れ、端部は嘴状になる。共に内面は研磨され黒色を呈する。21は中形の甕形土器で、頸部がゆるく折れ、口縁部もそこから素直に立ち上がり、最大径は体部上半にある。内外面ともロクロ整形痕が残る。

須恵器（第40図22～31、第41図）

やはり坏形土器が目立つ。器形から坏形のものと同高台付のものに分けられ、更に底部のロクロからの切離により大分類できる。第40図22～25及び第41図1～4はヘラにより切離されたもので、22・23・1～4は更にヘラケズリ整形が行なわれ、底部に丸味を有する。24・25は口径に比して器高が低い皿形のもので、ヘラ切離痕をそのまま残している。この手は次の糸切り痕を有すものと相違してロクロ目を明瞭に残さないものが多い。また高台は3のみやや内側にありますが他は底部外周に外開するものが付される。他は糸切り痕を残す一群で、やはり高台を付すもの（第41図5～10）と付されないもの（第40図26～31）がある。体部はいくぶん内弯気味で、口縁部がわずかに外反する器形が多く、上げ底気味になる。6・7・9・10は外周にヘラケズリ

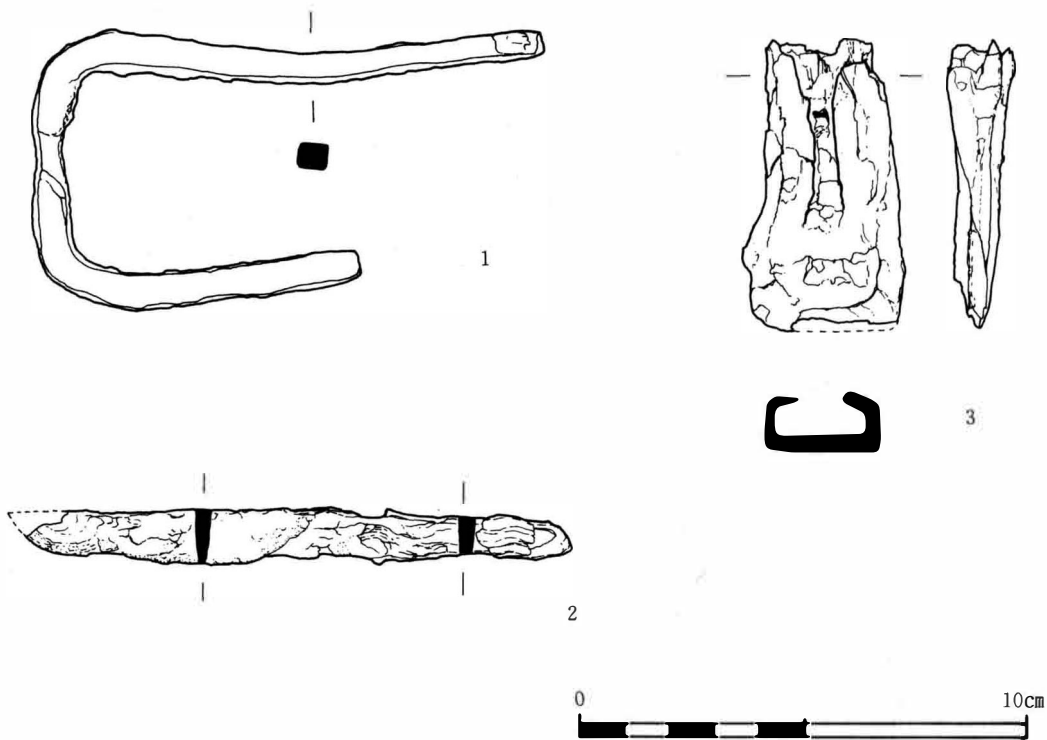
が施こされ、中央付近に糸切り痕を残す。高台の付し方は底部外縁付近に付されるが、前者と比べ短かく直立する。蓋形土器（第41図11～18）には短頸壺に用いられたと思われる天井部が平坦で口縁部が直角に長く折れるもの（11・12）と天井部が内弯しながら外開し口縁部が短かく折れ、端部が嘴状になるもの（13～18）に大別できる。11の口縁端部は肥厚し外反気味になる。つまみは11・14を扁平な擬宝珠形になるのにたいし他は扁平擬宝珠形を意識した扁平なものである。19・21は細口の長頸瓶で、ロクロ目が明瞭に残る。20・22は甕形土器で外面に叩き目を残し、20の体部内面には青海波文がある。

灰釉陶器（第41図23～25）

出土量は思いのほか少なく3点で、それも図示した皿形のものである。破片全面に透明の釉がかかる。たぶん高台が付されるものと思う。

この他 平安時代検出面から鉄斧（第42図3）・帯金具・刀子及び土製紡錘車が各1点出土している。

（矢口忠良）



第42図 包含層出土鉄製品

第3表 出土図示土器一覧表

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
第1号住居址 (第5図)											
1	坏	3.6	12.7	8.0	皿形・付高台やや外開	ロクロ成形	小 砂	良好	赤灰色	赤灰色	覆
2	〃		12.9		椀形	〃 ・ヘラミガキ・内面黒色処理	〃	〃	赤褐色	黒 色	
3	〃	4.4	14.3	6.7	〃	〃 ・糸切り	〃	〃	青灰色	青灰色	
4	〃	4.1	13.7	6.9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
5	〃		13.7		〃	〃	〃	〃	赤灰色	赤灰色	
6	〃		13.8		〃	〃	〃	〃	赤灰色	赤灰色	
7	〃		15.6		〃	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	
8	蓋			11.8	口縁部鈍い嘴状	〃 ・ヘラ切り痕	〃	〃	〃	〃	
第2号住居址 (第7図)											
1	坏	5.9	19.1	7.1	体部やや内弯・口縁部短く外反	ロクロ成形・ヘラミガキ・内面黒色処理	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	覆
2	〃		14.9		椀形	〃	〃	〃	〃	黄褐色	
3	〃		13.6		〃	〃 ・ヘラミガキ・	〃	〃	〃	黒 色	
4	〃	3.6	13.4	5.5	体部やや内弯・浅い	〃 ・糸切り・暗文	〃	〃	〃	〃	
5	〃	4.4	13.1	5.6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃		14.1		椀形	〃	〃	〃	〃	〃	
7	〃	3.5	13.5	6.9	坏形	〃 ・糸切り痕	〃	〃	青灰色	青灰色	
8	〃	3.9	11.1	7.0	体部下端に稜・付高台は直	〃	〃	〃	〃	〃	
9	蓋			17.7	天井部丸味をもつ	〃 ・ヘラ切り	〃	〃	〃	〃	
10	皿	5.6	17.7	8.9	皿形・口縁部が外反・付高台	〃	良 選	〃	灰白色	淡緑色	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
11	皿	4.7	13.8	6.8	口縁部外反・付高台直に近い	ロクロ成形	良 選	良好	灰白色	灰白色	覆
12	〃		18.3		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
13	〃		17.1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
14	椀		13.8		〃	〃	〃	〃	淡緑色	淡緑色	〃
15	甕		12.8		小形・口縁部やや外反	〃・タテヘラケズリ	小 砂	〃	黒褐色	黄褐色	床
16	〃		12.7		〃・〃	〃・ヨコヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
17	〃		22.3		中形・口縁部に最大径	〃・タテヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
18	〃		32.9		大形・口縁部やや内弯・端部面取り	〃	〃	〃	〃	〃	〃
19	〃		22.4		中形・〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第 5 号住居址 (第10図)

1	坏			7.7	体部内弯気味	ヘラミガキ・ヘラケズリ・内面黒色処理	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	覆
2	〃			9.9	体部下端に稜・付高台直に近い	ロクロ成形・糸切り痕	良 選	〃	青灰色	青灰色	〃

第 6 号住居址 (第12図)

1	坏	3.8	13.0	5.8	环形	ロクロ成形・糸切り痕	小 砂	良好	青灰色	青灰色	覆
2	〃	3.6	12.8	5.9	〃	〃・〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
3	〃	3.3	11.4	5.5	〃	〃・〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
4	〃		13.9		体部やや内弯	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃		14.0		椀形	〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	椀		17.3		〃・口唇部外反	〃	良 選	〃	灰白色	灰白色	〃
7	蓋				つまみ擬宝珠形	〃・ヘラ切り	小 砂	〃	赤灰色	赤灰色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	

第7号住居址 (第13図)

1	坏	5.0	14.7	7.6	碗形・口縁部外反・付高台外開	ロクロ成形・ヘラミガキ・糸切り痕・内面黒色処理	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	覆	
2	◇	4.2	12.0	5.4	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	
3	◇		12.7		◇	◇	◇	◇	灰褐色	◇	◇	
4	◇	3.8	10.2	4.6	◇	◇	◇	◇	青灰色	青灰色	◇	
5	◇	3.8	11.4	6.5	坏形	◇	◇	◇	◇	暗青灰色	◇	◇
6	◇		15.1		体部下端に稜・体部口縁部直線的・端部に丸味	◇	◇	◇	青灰色	暗灰色	◇	
7	蓋	3.5		13.9	天井部扁平三角形・つまみ内部にえぐる	◇	◇	◇	◇	青灰色	◇	
8	◇	2.6		13.8	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	

第8号住居址 (第16図)

1	坏	5.0	14.8	7.1	体部やや内弯しながら外開	ロクロ成形・ヘラミガキ・内面黒色処理・糸切り痕	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	床
2	◇	4.4	13.2	5.6	◇	◇	◇	◇	◇	◇	覆
3	◇	4.6	15.2	7.2	◇	◇	小砂石	◇	灰褐色	◇	◇
4	◇	4.5	14.0	7.4	◇	◇	小 砂	◇	黄褐色	◇	◇
5	◇		13.5		◇	◇	◇	◇	◇	赤褐色	◇
6	◇	3.4	12.8	6.3	坏形	◇	良 選	◇	青灰色	灰白色	床
7	◇	3.7	11.7	5.4	◇	◇	小 砂	◇	暗青灰色	青灰色	◇
8	◇	3.7	12.6	5.8	◇	◇	◇	◇	青灰色	◇	覆
9	◇		12.6		体部やや内弯	◇	◇	◇	◇	◇	◇
10	◇		12.6		体部口縁部直線的	◇	◇	◇	暗青灰色	◇	◇

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
11	蓋	2.0		13.7	口縁部屈曲なし・つまみ扁平	ロクロ整形	小 砂	良好	暗灰色	暗灰色	覆
12	甕		21.0		長胴形・最大径口縁部	ヘラケズリ・ヨコナデ・刷毛ナデ	小砂石	〃	橙褐色	黄褐色	〃
13	〃		23.8		長胴形・口縁部外開・最大径体部中位	〃	〃	〃	黄褐色	茶褐色	〃
14	〃		22.7		頸部口縁部間に段・口縁部外開	〃	〃	〃	赤褐色	黄褐色	〃

第9号住居址出土土器 (第18~21図)

1	壺				口縁部外反しつつ外開・頸部しまる	ヘラミガキ・T字状文・赤色塗彩	小 砂	良好	赤 色	赤 色	覆
2	埴				球形胴・体部下半に最大径	〃	〃	〃	黄灰色	〃	〃
3	壺		7.2		平底・底部外反	〃	〃	〃	茶褐色	〃	〃
4	〃		6.3		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃		6.0		〃・底部内弯	〃	〃	〃	赤 色	赤 色	〃
6	〃		7.0		〃・やや上底気味	〃	〃	〃	黒褐色	黄灰色	〃
7	〃		4.0		〃	〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
8	〃		6.5		〃	〃	〃	不良	暗褐色	黄褐色	〃
9	〃		3.8		〃・体部張る	〃	〃	良好	暗褐色	茶褐色	〃
10	甕	8.3	8.8	3.8	小形・口縁部に最大径	指整形・刷毛ナデ・ヨコナデ・波状文・10本歯・簾状文	〃	〃	暗赤褐色	赤褐色	〃
11	〃		12.8		口縁部外反頸部立上り気味・体部丸味	ヘラミガキ・ヨコナデ・波状文・10本歯・簾状文	〃	〃	暗褐色	暗赤褐色	〃
12	〃		12.8		口縁部外反・肩部張る・頸部立上り気味・体部丸味	ヘラミガキ・ヨコナデ・波状文・簾状文	〃	〃	〃	暗褐色	〃
13	〃		14.7		口縁部外反・頸部立上り気味・体部丸味	〃	〃	〃	黒褐色	黒褐色	〃
14	〃		18.5		口縁部外反・口唇部受口・頸部立上り気味・体部丸味	〃	〃	〃	〃	暗赤褐色	〃
1	〃		20.0		口縁部外反	〃	〃	〃	暗褐色	暗赤色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
2	甕		18.4		口縁部外反	ヘラミガキ・ヨコナデ・櫛描波状文	小 砂	良好	黒褐色	茶褐色	覆
3	〃		18.8		〃	〃	〃	〃	〃	明褐色	〃
4	〃		19.7		〃	〃	〃	〃	褐色	茶褐色	〃
5	〃台		10.4		台端部ゆるやかに外反	〃	〃	〃	暗褐色	〃	〃
6	甕			6.4	平底やや上底気味	ヘラナデ・ヘラミガキ	〃	〃	〃	暗黄褐色	〃
7	〃			4.0	平底・底器面厚	手捏	〃	〃	赤灰色	淡黄褐色	〃
8	〃			4.0	底部端かえし	刷毛ナデ	〃	〃	赤褐色	明赤褐色	〃
9	〃			3.9	平底・体部張る	ヘラナデ	〃	〃	暗褐色	黄褐色	〃
10	甌			5.8	孔径 1.4cm	〃	〃	〃	黄褐色	〃	〃
11	蓋				つまみ部穿孔孔径 3 ~ 6 mm	ヘラミガキ	〃	不良	暗褐色	暗褐色	〃
12	〃		19.6	6.4	つまみ頂部内弯・体部に稜、口縁部や外反	刷毛ナデ・ヘラミガキ	〃	良好	明黄褐色	茶褐色	〃
13	高坏			15.2	脚部ラッパ状外開・脚端部外反	〃	〃	〃	赤 色	赤 色	〃
14	〃				脚部ラッパ状外開・脚上部やや垂下	〃	〃	〃	〃	赤 色	〃
15	〃				〃	〃	〃	〃	〃	赤 色	〃
16	〃				〃	〃	〃	〃	〃	赤 色	〃
17	〃				〃	〃	〃	〃	〃	赤 色	〃
18	〃				〃	〃	〃	〃	〃	赤 色	〃
19	器台			10.7	口縁部外開しつつ内弯	〃	〃	〃	明褐色	赤 色	〃
20	〃				脚部3方開口・脚部ラッパ状外開	〃	〃	〃	赤 色	赤 色	〃
21	〃			8.2	脚部ラッパ状外開	〃	〃	〃	赤 色	赤 色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	罎	16.8	13.1	5.7	頸部くの字・口縁外開・端部外反・体部球形・最大径胴下部	刷毛ナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ・穿孔	良 選	良好	明褐色	暗褐色	覆 土
2	〃	25.4	17.7	5.9	頸部くの字・口縁部直線的に外形・体部球形・最大径胴下部	〃 ・ 〃 ・ ナデ	〃	〃	〃	〃	〃
3	壺		21.0	7.8	口縁外開しつ外反・体部球形・口縁一部整形時に補修	〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	黄褐色	黒褐色	〃
4	〃			7.8	球形胴下部直線的・最大径体部中位・平底	ヘラケズリ状ナデ・ヘラミガキ	小 砂	〃	〃	暗褐色	〃
5	〃				〃 ・ 〃	刷毛ナデ・ヘラミガキ・ナデ・外面赤色塗彩	〃	〃	赤褐色	灰褐色	〃
6	〃				〃 ・ 〃	ヘラミガキ・ナデ	〃	〃	赤褐色	暗褐色	〃
7	〃	27.2	15.8	5.6	〃 ・ 〃 ・ 口縁外開しつ外反	〃 ・ 〃 ・ 6本歯丁字状文	〃	不良	〃	赤褐色	〃
1	甕		28.6		〃 ・ 長大径底部口縁部外開しつ外反・付高台	刷毛ナデ・ヘラミガキ	〃	良好	暗褐色	暗褐色	〃
2	〃	18.4	14.1	5.7	口縁部外開し最大径口縁部・肩張球形胴・底部つくり出し	ヘラナデ・ナデ	〃	不良	〃	〃	〃
3	〃	17.0	17.6	6.2	口縁部外開しつ外反・付高台・球形胴・最大径肩部	刷毛ナデ・ヘラミガキ・ナデ	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃			6.1	最大径肩部・平底	〃 ・ 〃 ・ ヘラケズリ	〃	〃	里褐色	黒褐色 黄褐色	〃
5	鉢		18.5		口縁部内弯端部面取り・片口・付高台。体部内弯	〃 ・ 〃	〃	良好	赤褐色	暗褐色	〃
6	壺	44.0	18.9	17.5	口縁部受口状・肩張球形胴・頸部直立後外反・底部上げ底	〃 ・ 〃 ・ ナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃

第10号住居址 (第23図)

7	蓋			16.1	天井部下位のみ	ロクロ成形	小 砂	良好	青灰色	黒 色	覆 土
---	---	--	--	------	---------	-------	-----	----	-----	-----	-----

第11号住居址 (第23図)

1	坏	3.7	13.0	5.2	体部内弯しながら立ち上がる	ロクロ成形・ヘラミガキ・内面黒色処理・糸切り痕	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	床 面
2	〃		13.9		〃 ・ 口縁部外反	〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃
3	〃		12.8		体部口縁部直線的	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
4	壺				長頸壺頸部	〃	〃	〃	淡緑色	灰白色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	
		器高	口径	底径					外 面	内 面
5	壺				長頸壺頸部	ロクロ整形	小 砂	良好	青黒色	淡青色

第12・13号住居址 (第25~27図)

1	甕		8.3	小形・頸部肥厚	ヘラナデ・ヨコナデ・櫛描波状文	小砂石	良好	黒 色	茶灰色
2	〃			〃・頸部内面に鈍い稜・体部丸味	〃・〃・〃・〃	〃	〃	黒褐色	茶灰色
3	〃		13.8	中形・頸部肥厚	〃・〃・〃・〃・横線文	〃	〃	暗褐色	淡褐色
4	〃		14.4	〃	〃・〃・〃・〃・簾状文	〃	〃	〃	黒褐色
5	〃		13.6	〃	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	褐 色	茶 色
6	〃		14.4	〃・頸部内面に鈍い稜	〃・〃・〃・〃・横線文	〃	〃	茶褐色	黒褐色
7	〃		12.3	〃・頸部肥厚・体部球形	〃・〃・〃・〃・簾状文	〃	〃	〃	黄褐色
8	〃		13.5	〃	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	褐 色	明褐色
9	〃		14.0	〃・口縁端部面取り様	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	茶褐色	明褐色
10	〃		14.3	〃	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	褐 色	〃
11	〃		16.6	〃・頸部肥厚	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	褐 色
12	〃		16.1	中形	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	暗褐色	暗灰色
13	〃		16.4	〃・頸部肥厚	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	暗赤黒色
14	〃		16.5	〃	〃・〃・〃・〃・横線文	〃	〃	茶灰色	茶灰色
15	〃		34.6	大形	〃・刷毛整形・櫛描波状文・簾状文	〃	〃	淡紫赤色	褐 色
16	〃		29.1	〃	〃・〃・〃・〃	〃	〃	茶灰色	〃
17	〃		28.2	〃・口縁端部面取り様	〃・櫛描波状文	〃	〃	茶 色	明褐色
18	〃		22.7	〃	〃・〃・〃・横線文	〃	〃	黄褐色	黄褐色

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
19	甕(台)			7.6	台部のみ	ヘラナデ	小砂石	良好	黒褐色	茶褐色	覆
20	〃(〃)			6.4	〃	〃	〃	〃	〃	褐色	
21	〃(〃)			8.6	〃	〃	〃	〃	茶灰色	黄灰色	
1	高坏		25.7		坏部内弯・口縁部外反	ヘラミガキ・赤色塗彩	小砂	〃	赤 色	赤 色	
2	〃		28.1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
3	〃		25.9		坏部上方で立ち上がる・口縁部外反	〃	〃	〃	〃	〃	
4	〃		28.4		口縁部に小突起	〃	〃	〃	〃	〃	
5	〃		25.5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃		18.4		浅鉢形・口縁部短く立ち上がる	〃	〃	〃	〃	〃	
7	〃		18.5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
8	〃		18.2		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
9	〃		13.2		ラッパ状に外開・裾部更に外開	〃	〃	〃	〃	灰褐色	
10	〃				脚部のみラッパ状に外開	〃	〃	〃	赤 色	〃	
11	〃		10.8		〃	〃	〃	〃	暗褐色	赤褐色	
12	〃		7.5		台付甕形土器高台?	〃	〃	〃	赤 色	灰褐色	
13	〃		11.6		ラッパ状に外開	〃	〃	〃	〃	暗褐色	
14	〃		14.4		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
15	器台		7.2		椀形・口縁部内弯	〃	〃	〃	〃	黒褐色	
1	壺				頸部のみ「く」の字形に外開	〃	〃	〃	淡褐色	黄褐色	
2	蓋	6.5		13.8	断面三角形状・つまみ部上面窪む・円孔	〃	〃	〃	赤褐色	黒褐色	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
3	蓋	6.4		13.4	断面三角形・明確なつまみ部をなさない	刷毛整形・ヘラミガキ・ヨコナデ	小砂石	良好	黒褐色	茶褐色	覆
4	〃	5.4		15.9	〃 ・つまみ部上面窪む	ヨコナデ・ 〃	〃	〃	暗赤褐色	暗赤褐色	
5	〃				〃 ・ 〃 ・ 1円孔あり	ヘラミガキ	〃	〃	暗黒色	黒紫色	
6	〃			17.0	〃	〃	〃	〃	黄褐色	赤褐色	
7	鉢			5.3	体部直線的に外開・高台	〃 ・赤色塗彩・高台	小 砂	〃	赤 色	赤 色	
8	〃	7.9	10.3	3.5	体部内弯気味・口縁部内弯	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	黒褐色	
9	〃			19.9	体部直線的に外開	刷毛整形	〃	〃	淡茶褐色	赤褐色	
10	〃	10.5	10.5	5.4	体部内弯気味・口縁部更に内弯	ヘラミガキ・外面赤色塗彩	〃	〃	赤 色	黄褐色	
11	〃	9.0	15.5	5.2	体部直線的に外開	〃 ・内外面赤色塗彩	〃	〃	〃	赤 色	
12	〃			10.6	体部内弯気味・口縁部更に内弯	〃 ・外面赤色塗彩	〃	〃	〃	橙褐色	
13	〃	4.9	10.2	3.6	体部直線的に外開・口縁部内弯	〃 ・内外面赤色塗彩	〃	〃	〃	赤 色	
14	鉢			10.5	体部直線的に立ち上がる・片口付	ヘラミガキ・内外面赤色塗彩	〃	〃	〃	〃	
15	罎		4.9		ミニチュア・口縁部外開	ナデ・外面及び内面頸部上赤色塗彩	〃	〃	〃	〃	
16	手捏	5.0	4.6	3.1	〃	輪積成形痕・指頭圧痕	〃	不良	黄褐色	暗褐色	
17	〃			4.3	〃	〃 ・ 〃	〃	〃	茶灰色	黒褐色	

第14号住居址 (第29図)

1	甕	22.4	12.3	7.2	長胴形・体部やや丸味・口縁部短く内弯	ロクロ目・糸切り痕	小 砂	良好	暗青灰色	灰白色	覆
---	---	------	------	-----	--------------------	-----------	-----	----	------	-----	---

第15号住居址 (第30図)

1	坏	3.1	12.3	5.6	体部内弯気味・口縁部わずかに外反	ヘラミガキ・内面黒色処理・十字の暗文 ロクロ成形・糸切り痕	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	覆
2	〃	4.7	13.4	6.7	〃	〃 ・ 〃	〃	〃	灰褐色	〃	

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 材
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
3	坏	3.8	12.4	4.9	体部内弯気味・口縁部わずかに外反	ヘラミガキ・内面黒色処理・放射状暗文 ロクロ整形・糸切り痕	小 砂	良好	黄褐色	黒 色	覆
4	〃	5.5	15.2	7.5	〃	〃	〃	〃	暗褐色	〃	
5	〃		12.6		〃	〃	〃	〃	黄褐色	〃	
6	〃	3.3	13.2	7.4	体部直線的・口縁部外反	〃	良 選	〃	青灰色	青灰色	
7	〃	4.0	12.7	7.5	体部口縁部直線的付高台直立	〃	小 砂	〃	暗灰色	〃	
8	蓋				つまみ扁平・天井部に丸味	〃 ・ヘラキリ	〃	〃	暗青色	灰白色	
9	〃			13.3	口縁部屈曲先端嘴状・天井部に丸味	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	
10	〃			14.6	〃	〃	〃	〃	暗灰色	〃	
11	甕			18.6	頸部「く」の字状に外開・口縁部更に外反 端部面取り	〃	〃	〃	青黒色	暗青灰色	
小竪穴址 (第32図)											
12	埴埴				小碗形・鉄分付着・ごつごつしている	手捏様	小砂石	不良	黄褐色	黄褐色	覆
土塚4 (第34図)											
1	埴		13.7		口縁部直線的に外開	ヘラミガキ・内外面赤色塗彩	小 砂	良好	赤 色	赤 色	覆
2	〃		13.7		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
土塚11 (第34図)											
3	甕		15.8		頸部立ち上がり・口縁部ゆるく外開	ヘラミガキ・内外面赤色塗彩	小 砂	良好	赤 色	赤 色	覆
土塚14 (第34図)											
4	甕		22.6		体部砲弾形・口縁部立ち上がる	刷毛整形・ロクロ整形・ヘラケズリ	小 砂	良好	赤褐色	黄褐色	覆
溝址4 (第38図)											
5	甕	16.9	10.2		甗壺形・体部下半ふくれる・口縁部短く外反	ヘラケズリ・ヘラナデ・指頭圧残る	小砂石	不良	明赤褐色	黄褐色	底

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	

溝址13 (第37図)

1	埴			5.2	体部下膨れの球形胴	ヘラミガキ・外面赤色塗彩	小 砂	良好	赤 色	黄褐色	覆
2	甕			6.9	小形・口縁部「く」の字に屈開・体部球形	刷毛ナデ	◇	◇	茶褐色	◇	◇
3	◇			23.9	口縁部大きく外反最大径・肩部わずかに張る	ヨコナデ・櫛描波状文・簾状文	◇	◇	◇	赤褐色	◇
4	◇			17.5	頸部「く」の字に屈開・口縁内弯気味に立ち上がり球形胴・体部上半最大径・上半から外反	刷毛整形・ヘラナデ・櫛描波状文	◇	◇	黒褐色	褐 色	◇
5	◇			19.5	口縁部直線的	◇ ・ ◇ ・ ◇ ・ 簾状文	◇	◇	赤褐色	黒褐色	◇
6	◇				台付甕・肩部張る・頸部「く」の字に屈開	◇ ・ ◇ ・ ◇	小砂石	◇	黄褐色	明赤褐色	◇
7	◇			8.3	台部のみ・直線的・裾部わずかに外反	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	黒褐色	灰褐色	◇
8	◇			7.8	◇ ・ ◇ ・ ◇ ・ ◇	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	茶褐色	黄褐色	◇
9	◇			17.0	口縁部直線的・端部内弯気味・体部筒形・肩部底部がこける	◇ ・ ヨコナデ	◇	◇	黒褐色	茶褐色	◇
10	鉢	9.6	7.5	5.1	体部口縁部にかげ内弯・平底	ヘラミガキ	小 砂	◇	◇	◇	◇
11	高坏			17.3	坏部のみ・浅鉢形・口縁端部肥厚内弯	◇ ・ 内外面赤色塗彩	◇	◇	赤 色	赤 色	◇
12	◇			14.1	脚部のみ・ラッパ状に外開	◇ ・ 外面赤色塗彩	◇	◇	◇	灰褐色	◇
13	◇			17.7	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	◇	◇	◇
14	器台	8.2	8.8	12.3	坏部直線的・底部1円孔・脚部直線的3円孔	ヘラミガキ・内外面赤色塗彩	◇	◇	赤 色	赤 色	◇
15	◇	8.2	8.7	11.4	◇ ・ ◇ ・ ◇ ・ ◇	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	◇	◇	◇
16	◇				脚部のみ・上方に3本の沈線	◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	◇	暗褐色	◇

包含層出土の遺物 (第39~41図)

1	壺				体部内弯気味に外開・下半に最大径	刷毛整形・ヘラミガキ・簾状文風	小砂石	良好	明茶黄色	暗黄色	包含
2	◇			9.6	体部下半に最大径	◇ ・ ◇ ・ ◇ ・ ◇	◇	◇	明赤褐色	黄褐色	◇

遺物 番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
3	甕		17.0		頸部立ち上がり口縁大きく外反	刷毛整形・ヨコナデ・楡描波状文・簾状文	小砂石	良好	黒褐色	暗茶褐色	包含
4	〃		14.2		体部に丸味・口縁外開	〃・〃・〃・〃・〃・〃	小砂	〃	暗褐色	明黄褐色	〃
5	〃		15.7		〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	小砂石	〃	〃	黒褐色	〃
6	〃		17.2		頸部体部上半立ち上がり・口縁やや内弯 外開	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃		6.9		底部と付近のみ	〃・〃・〃・ヘラナデ	〃	〃	茶褐色	〃	〃
8	〃		8.8		台部のみ・ラッパ状に外開・裾部更に外反	タテヘラナデ	〃	〃	黒褐色	暗褐色	〃
9	〃		9.9		〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	赤褐色	黄褐色	〃
10	〃		7.6		〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	暗褐色	灰褐色	〃
11	〃		11.8		〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃
12	高坏		22.9		体部内弯しながら外開・口縁部外反	ヘラミガキ・内外面赤色塗彩	小砂	〃	赤色	赤色	〃
13	〃		13.4		体部上端立ち上がる・口縁部大きく外開	〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
14	皿	2.3	5.9	3.9	小形・体部外開	〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
1	甕		20.8		有段口縁	ヘラミガキ・ヨコナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
2	坏	4.4	12.2	5.9	碗形・口縁部わずかに外反	ロクロ成形・ヘラミガキ・内面黒色処理・糸切り痕	〃	〃	〃	黒色	〃
3	〃	3.8	12.3	5.3	〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃
4	〃	4.2	12.8	6.5	〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃
5	〃	4.3	12.8	6.4	〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	黄褐色	〃	〃
6	〃	4.8	16.0	6.2	〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃		13.7		〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	4.2	11.8	5.5	〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
9	坏		12.3		碗形	ロクロ成形・ヘラミガキ・内面黒色処理	小 砂	良好	灰褐色	黒 色	包含
10	◇	4.1	13.0	7.4	◇	◇	◇	◇	黄褐色	◇	◇
11	◇	4.1	13.1	6.1	◇	◇	◇	◇	赤褐色	◇	◇
12	◇	4.1	12.5	5.1	◇ ・口縁部わずかに外反	◇	◇	◇	灰褐色	◇	◇
13	◇		13.1		◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
14	◇	4.3	13.0	5.3	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
15	◇	4.5	14.2	6.6	◇	十字の暗文 ◇	◇	◇	黄褐色	◇	◇
16	◇	4.9	13.8	6.2	◇	◇ ・糸切り痕	◇	◇	褐色	褐色	◇
17	皿	2.6	14.3	12.3	高台外開	◇ ・内面黒色処理・ヘラミガキ	◇	◇	黄褐色	黒 色	◇
18	◇			6.8	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
19	蓋	3.3		14.8	体部に丸味・つまみ上端窪む	◇	◇	◇	赤褐色	◇	◇
20	◇			12.5	口縁部折れる・天井部平坦	◇	◇	◇	黄褐色	◇	◇
21	甕		19.9		中形・最大径体部上半・頸部ゆるく折れる	◇	◇	◇	赤褐色	黄褐色	◇
22	坏		13.2		坏形・底部に丸味	◇ ・ヘラケズリ・ヘラ切り	◇	◇	青灰色	灰白色	◇
23	◇	4.4	13.6	6.1	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
24	◇	3.0	13.2	8.7	皿形	ナデによりロクロ目を残さない	良 選	◇	暗青灰色	青灰色	◇
25	◇	3.1	11.9	6.3	◇	◇	◇	◇	青黒色	◇	◇
26	◇	3.5	14.1	6.6	碗形・口縁わずかに外反	ロクロ成形・糸切り痕	小 砂	◇	青灰色	灰白色	◇
27	◇	3.9	12.7	6.9	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
28	◇	4.0	14.1	6.0	◇	◇	◇	◇	暗青灰色	青灰色	◇

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
29	坏	3.2	12.1	5.2	碗形・口縁わずかに外反	ロクロ成形・糸切り痕・窯印	小 砂	良好	青灰色	青灰色	包含
30	〃		13.1		〃	〃	〃	〃	暗灰色	灰白色	〃
31	〃	3.1	13.7	7.8	〃・底部広い	〃	〃	〃	青灰色	〃	〃
1	〃	6.4	14.6	9.3	坏形・付高台外開	〃・ヘラ切り	良 選	〃	青黒色	黒灰色	〃
2	〃	4.0	12.6	9.0	〃・〃	〃・〃	小 砂	〃	暗青灰色	青灰色	〃
3	〃	3.6	12.5	8.4	〃・〃	〃・〃	良 選	〃	茶灰色	茶灰色	〃
4	〃	3.5	12.2	9.9	〃・〃	〃・〃	〃	〃	灰 色	灰 色	〃
5	〃	5.6	17.6	11.8	碗形・付高台直	〃・糸切り痕	小 砂	〃	黒灰色	黒灰色	〃
6	〃	6.2	16.7	11.4	坏形・付高台外開	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	3.9	12.1	8.7	〃・口縁部外開	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	4.2	11.5	7.9	碗形	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃			7.5	〃	〃・〃	〃	〃	灰 色	灰 色	〃
10	〃	4.2	10.8	7.0	〃	〃・〃	〃	〃	茶灰色	茶灰色	〃
11	蓋	3.8		11.4	天井部平坦・口縁部直角に長く折れる	〃	良 選	〃	灰 色	灰 色	〃
12	〃			11.2	〃・〃	〃	小 砂	〃	〃	〃	〃
13	〃	2.1		14.0	天井部内弯しながら外開・口縁部短く折れる	〃・ヘラ切り	〃	〃	青灰色	灰白色	〃
14	〃	3.3		14.7	〃	〃・〃	〃	〃	灰 色	灰 色	〃
15	〃	3.1		13.4	つまみ扁平擬宝珠形	〃	〃	〃	〃	〃	〃
16	〃	3.1		13.7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
17	〃	2.8		14.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
18	蓋	2.8		14.4	つまみ扁平擬宝珠形 天井部内弯しながら外開・口縁部短折 長頸壺頸部	ロクロ成形・ヘラキリ 〃	小 砂 〃	良好 〃	黒灰色	黒灰色	包含
19	壺								〃	青灰色	
20	甕	18.8		18.3	頸部外反・口縁部に段 長頸壺底部付近	ヨコナデ・ロクロ整形・内面青海波文 〃 ・タタキ目	〃 〃	〃 〃	暗青色	〃	〃
21	壺								〃	黒灰色	暗灰色
22	甕	27.7		13.4	頸部外反・口縁部立ち上がる 体部内弯気味・口縁部外反	〃 ロクロ成形・全面に釉	〃 良 選	〃 〃	茶灰色	〃	〃
23	皿								〃	灰白色	灰白色
24	〃	14.9		15.0	〃 ・ 〃 〃 ・ 〃	〃 ・ 〃 〃 ・ 〃	〃 〃	〃 〃	〃	〃	〃
25	〃								〃	〃	〃

第3章 清野小学校プール地点の調査

第1節 発掘調査の経過

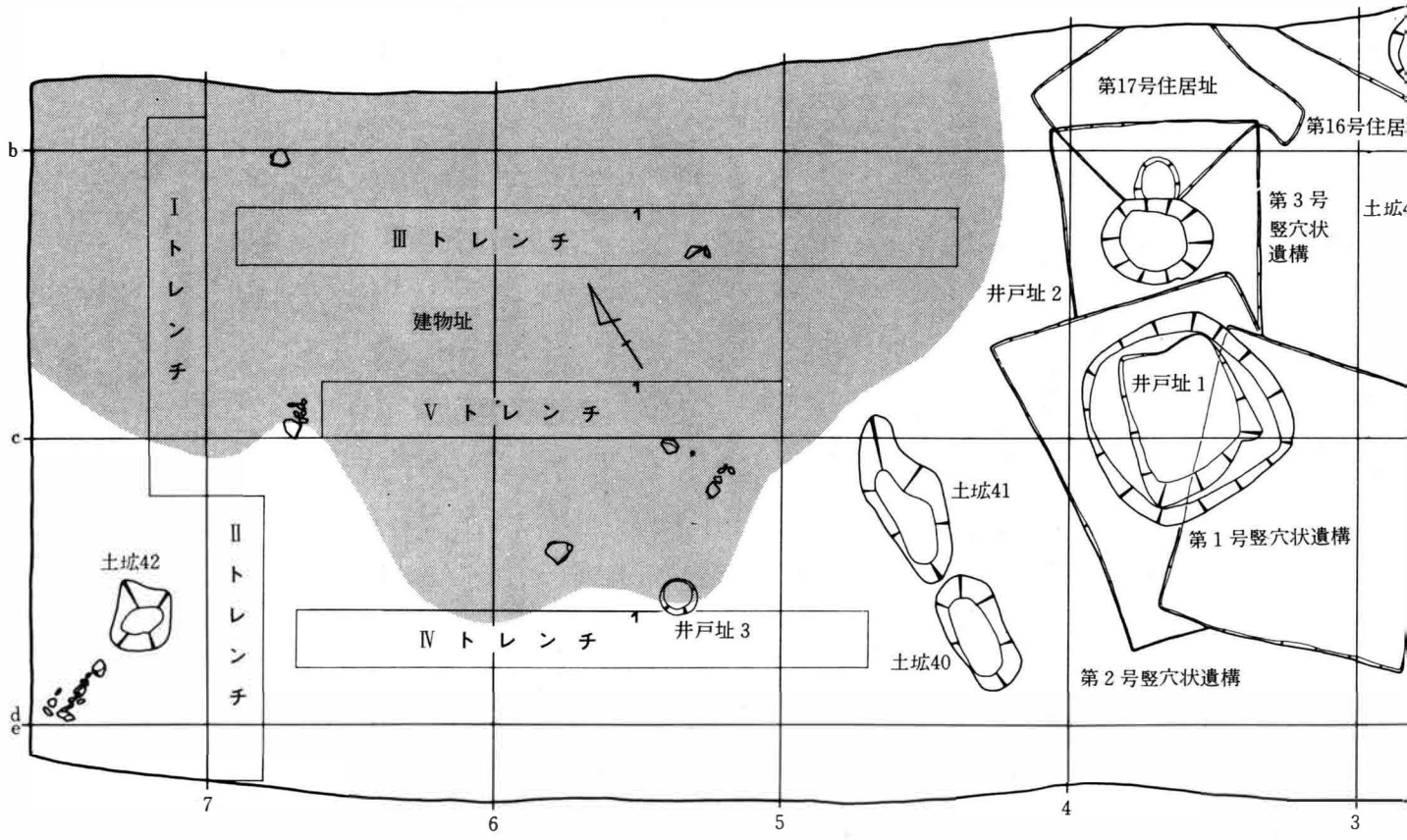
1 経 過

昭和54年度において、清野小学校プール建設を進めていたが、正直いって、教育委員会内の横の連絡が悪く、社会教育課で知り得た時には、すでに土砂すき取り及びパイル打ちが終わり、捨てコンクリート打ちの作業にかかっていた。この地は校舎改築時の調査でも確認されているように重要な遺構があることが知られており、周辺にはまだまだ多くの遺構があることが推察できる所であった。この工事が進行中との情報が入るとすぐ現地に赴いて調査をしたところ、平安時代を中心とする土器・焼土等が確認でき、明らかに集落址の一部が存在することが判明したので、その足で工事担当教委学校施設課に連絡し、埋蔵文化財保護のため一時工事を中断するよう要請し、そのための措置をとってもらうことにした。幸い関係者の皆さんの御理解をいただき工事を発掘調査終了後再開することになったのであるが、学校・地区の関係者から今夏中には児童に使用させたいという強い要望があった。その気持は強く理解できる場所であったのであるが、他方塩崎小学校改築に伴う第3次発掘調査の開始時が迫っており、すでにPTA作業員の手配が終了し、あとは校舎解体後の本調査を待つのみであった。このためこの調査期日を変更することは無理で、又調査団を2つにきいてこれにあたることは更に困難を生じ、蛇はち取らずの状態になることは明白に推察できた。このプール地の調査は早期着手・短期終了の課題がはたされておられ、更に塩崎小学校の調査を実施しなければならない中で、他の調査主任・調査員を確保しなければならない状況に追い込まれ、八方手をつくしたが、時期が時期だけに仲々この話が進展しなかった。ところが明大OBである山口純一職員課長補佐の仲介により、明治大学関係者を紹介され、その人達と連絡をとりながら調査団を編成し、誠に急であるが、5月30日から10日間の日程で調査を実施することになった。この間、作業員の手配を学校施設課をとおし清野小学校・同校PTAをお願いした。調査にあたり、焼土確認面まで約400㎡の表土を除去するため、調査に先き立ち重機を入れることにした。

2 調査日誌

5月28～30日 バックホーによる表土を除去する。

5月30日 相沢社会教育課長補佐の調査にたいする挨拶あり、残土処理から調査を開始する。住居址が2軒以上ある見込み、星調査主任着任する。表土をバックホーにより約1.5mほど廃土作業を行なう。その後ジョレンを用い、発掘面を精査する。その結果堅穴状遺構、土堀などが発見された。遺物は非常に多く認められた。



第43図 遺構分布図

■ 焼土・灰散布範囲

5月31日 発掘区を南北 b・c・d、東西 2・3・4・5・6・7 とする 5m×5m のグリッドに分割する。精査の末、b-3区、c-2・3・4区、d-2・3区にまたがる堅穴状遺構が見つかる。これらはおそらく3基が複合しているとみられる。出土遺物は須恵器が多数あり、おそらく平安期のものと考えられる。複合を確かめるため、全体を七区画に分け発掘を開始する。また d-4区より土壇が2基みつかるとともに、覆土中には、灰や焼土が多量に含まれている。さらに b、c-2区より土壇がみつかる。

6月1日 b・c・d・e-5・6・7区について精査を行なう。礎石らしきものが一定の間隔をもって現われる。清掃の後写真撮影。区域内には焼土粒・灰などが一面に認められる。その性格をとらえるために、b・c・d-7、d・c-7にわたりⅠ・Ⅱトレンチ、c-4・5・6にⅢトレンチを巾1mに掘る作業を行なう。一方では、堅穴状遺構の発掘調査を開始する。

6月2日 堅穴状遺構の清掃を行なう。Ⅰ～Ⅲトレンチ完掘。Ⅳトレンチを d-4・5・6 に設定し発掘を開始する。清野小学校の6年生が午前中発掘に参加する。

6月3日 堅穴状遺構の精査後、図面をとる。セクション壁の図面をとり、3基の複合関係を調べる。堅穴状遺構床面下部にまだ遺構があることが判明した。Ⅳトレンチ完掘。

6月4日 前日の雨で汚れた現場の清掃及び堅穴状遺構セクション壁撤去作業を行なう。その後全体写真撮影、礎石は6ヶ所にわたり認められた。瓦等は認められない。灰・焼土粒・木炭粒が多量に認められる。午後より3基の堅穴状遺構のある b・c・d・e-2・3・4地区の深掘りを開始する。堅穴状遺構下面の遺構をみつける作業にはいる。黄褐色土層より弥生式土器が多数出土してくる。この層が弥生期の層と考えられる。

6月5日 b-2・3、c-2・3区にて弥生期の住居址が検出された。また d-5区に同時期の井戸址がみつかる。Ⅴトレンチを c-5・6 に設定、掘り始める。

6月6日 Ⅴトレンチを完掘。層が入り乱れているのがわかる。弥生期の住居址を掘り始める。各トレンチの清掃を行なう。ⅢトレンチでもⅤトレンチ同様層の乱れが認められる。トレンチの写真撮影。平安期の堅穴状遺構下面より井戸址が2基発見される。

6月7日 2基の井戸址のセクション図をとり終え、セクション壁をとり除く作業を行なう。弥生の堅穴式住居址床面より、多量の土器が出土。清掃の後全面写真をとり終える。さらにⅠ～Ⅴトレンチのセクション図をとり始める。

6月8日 全体図作成に入る一方、出土遺物の梱包作業をする。

6月9日 図面の不備な点を補い、その後器材の撤収を行ない発掘作業終了する。(星)

3 調査会・調査団・参加者一覧

調査会は昭和53年から長野市内埋蔵文化財の保護と活用をはかるため、設立されたもので、下記のとおりである。尚これは清野保育園地点の調査でも同様である。

(1) 調査会

会 長 中村 博二 (長野市教育委員会教育長)
委 員 米山 一政 (長野市文化財保護審議会会長)
 〃 桐原 健 (〃 委員)
 〃 森嶋 稔 (調査団長)
 〃 千野 和徳 (長野市教育委員会教育管理部長)
 〃 関川千代丸 (〃 社会教育課嘱託)
 〃 矢口 忠良 (〃 〃 主事)
監 事 青沼欣一郎 (〃 庶務課長)

(2) 調査団

調査団長 森嶋 稔 (日本考古学協会員・上山田小教諭)

 〃 主任 星 龍象 (明治大大学院修士課程卒)

調 査 員 藤田 典夫 (明治大学生)

 〃 中島 広顕 (〃)

 〃 青木 和明 (〃)

 〃 望月 映 (〃)

 〃 高原 英男 (長野県考古学会員・長野市消防局)

遺物整理 星龍象・杉山富雄・藤田典夫・原田大介・青木和明・藤曲秀樹・中島広顕・
 神林そのえ・栗山敦子・斉藤弘・嘉手川樹理・川田清二・高橋映子・奈須野
 由美・大野さやか・茂木吉美 (以上明大生)

(3) 参加者一覧

酒井信子・池田信子・宮澤美智子・山口英子・渡辺英雄・池田啓一・上原礼智・安藤大子・上
原敏男・青木大元・青木貞元・上原利夫・市川美恵・安藤八千子・市川裕子・大沢輝子・大沢
莉・大沢巖・大沢優・大沢進・大沢栄一・上原信貞・池田正信・上野洋子・青木良寛・荒川則
子・内山富雄・伊熊安生・市川成敏・上原政子・上原由美子・上原みよ子・上原幸子・浅井哲
子・奥村栄成・岩佐香代子・青木和明・小林一郎・倉石和子・駒村いわの・郷原健蔵・倉田と
も子・近藤なつ子・倉島勝夫・駒村陽一郎・小出武義・久保涉・久保善久・近藤洸光・久保喜
男・倉田績・小林一夫・小林尚一・小林貞夫・小林要・久保喜美・窪田利子・窪田幸紀・窪田
益美・北沢園子・北村和江・久保恩・倉石忠男・海沼袈裟治・後藤勲・久保田アキ江・北田和
子・北島幸子・小出政男・唐木弘躬・佐藤光子・酒井敏夫・佐藤義昭・酒井輝雄・佐藤久・桜
井修自・島田武・清水秀次・桜井定雄・曾我部忠雄・玉井たか子・滝沢佳忠・高橋禎子・高橋
泰房・鳥海弘男・高橋武彦・高野広・塚田幸子・直江袈裟夫・西山敏井・西村澄子・中沢圭之
介・中沢義輝・中沢尚志・中村喜郎・野口幸一・中沢照人・中澤重昌・中島広顕・橋本祥代・
保林信彦・原田邦男・林盛人・堀田安喜・林英子・星龍象・藤田典夫・宮本民子・宮沢徳太郎
・松沢磐太郎・両角邦夫・室賀健三・宮川昭夫・松本宏一・真島重雄・真島芳定・真島朝子・

元田佳次・緑川美子・百瀬宗・宮本久子・真島袈裟重・室賀忠成・望月映・柳沢義則・柳沢け
さ江・吉岡万夫・山崎隆夫・吉岡勲・山崎忠良・山崎孝子・山越幸夫・山口みつ江

(4) 事務局

局長 関口 仁 (社会教育課長)
局員 相沢 金次 (〃 補佐)
〃 吉池 弘忠 (〃 文化財係長)
〃 矢口 忠良 (〃 〃 主事)

(事務局)

第2節 住居址

本調査により確認された遺構は、弥生時代の住居址2軒、同期井戸址1基、平安時代に属する
竪穴状遺構3基、井戸址2基、建物址1軒、土塚4基である。

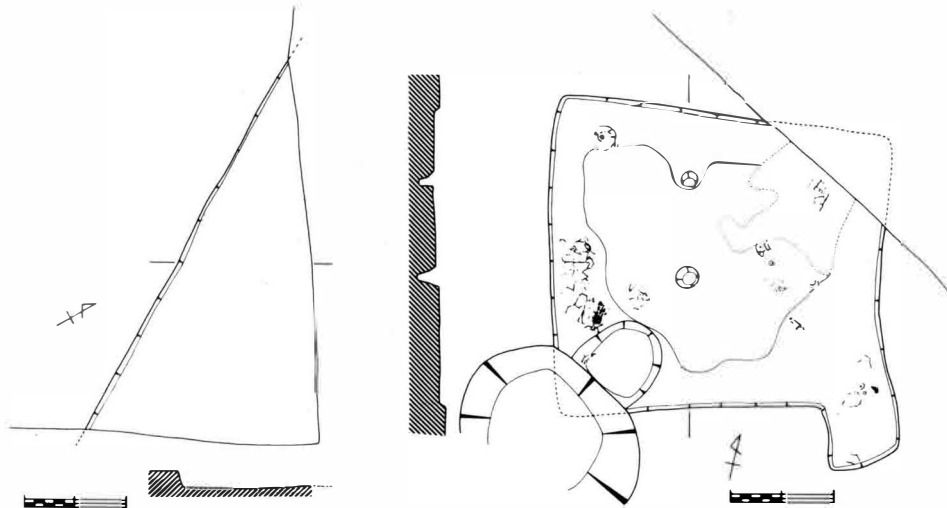
1 第16号住居址 (第44・45・47図、第18・24図版)

遺構 調査地の北東端に位置し、ほとんどが調査区域外のため未掘であり、住居址プランは
不明である。第17号住居址と同様暗黄色砂質土層中に掘り込まれており、床面は平坦で軟弱で
ある。柱穴等は検出されなかった。

遺物 出土量は覆土・床面とも少なく完形となるものはない。

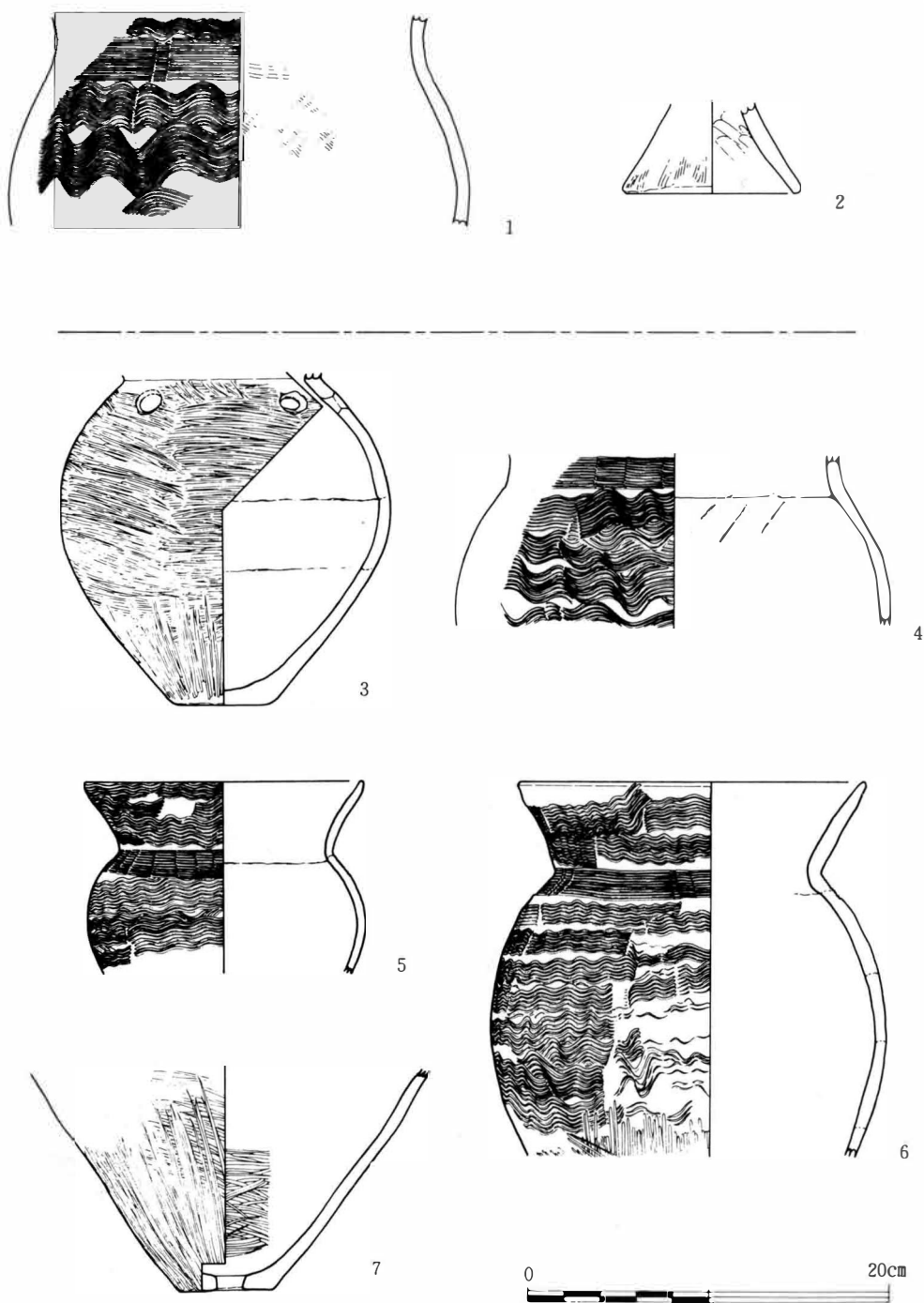
2 第17号住居址 (第44～47図、第18～20・24～26・33図版)

遺構 調査地の北東部に位置し、南隅は井戸址2によって切られている。住居址プランは東

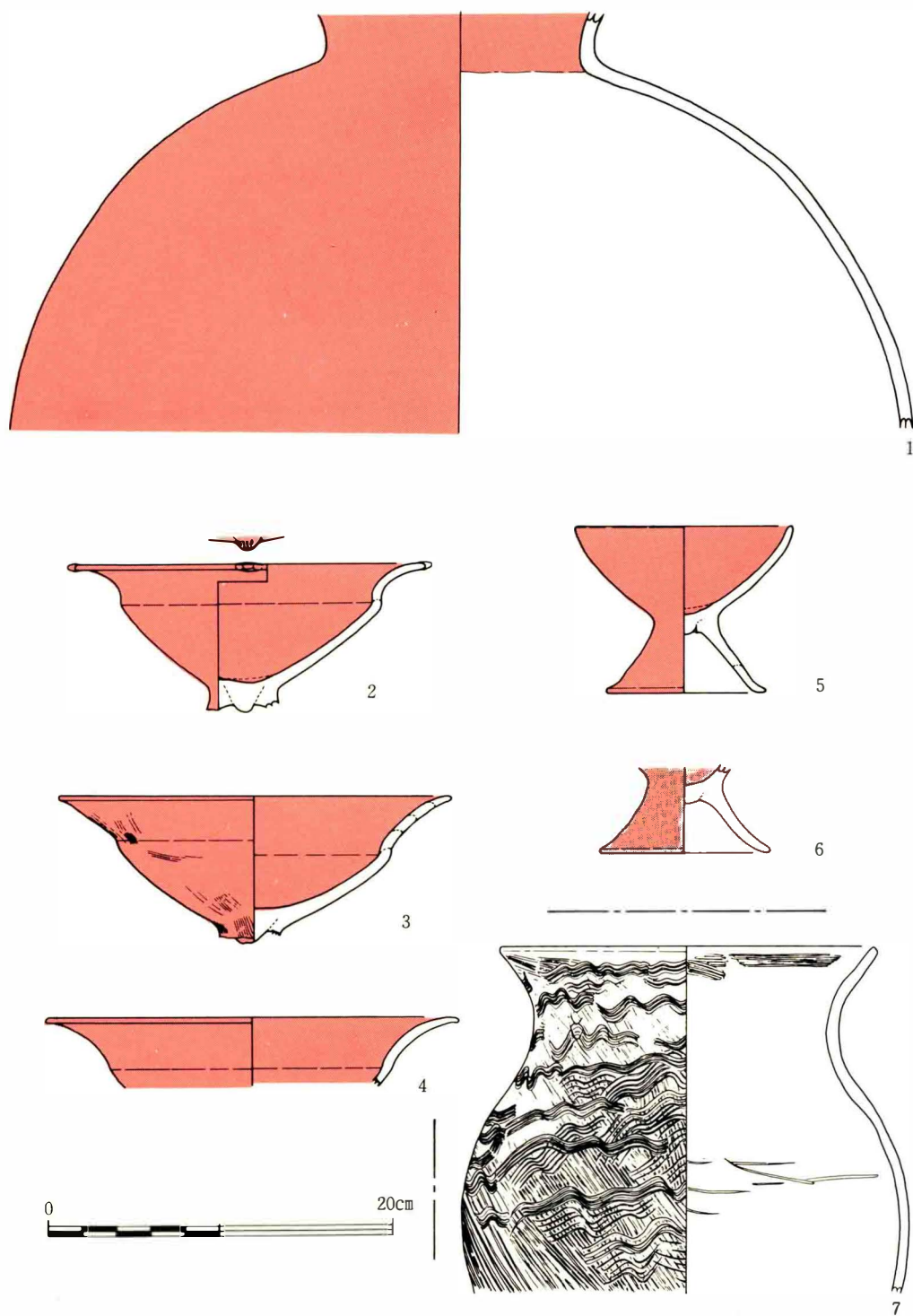


第44図 第16・17号住居址実測図

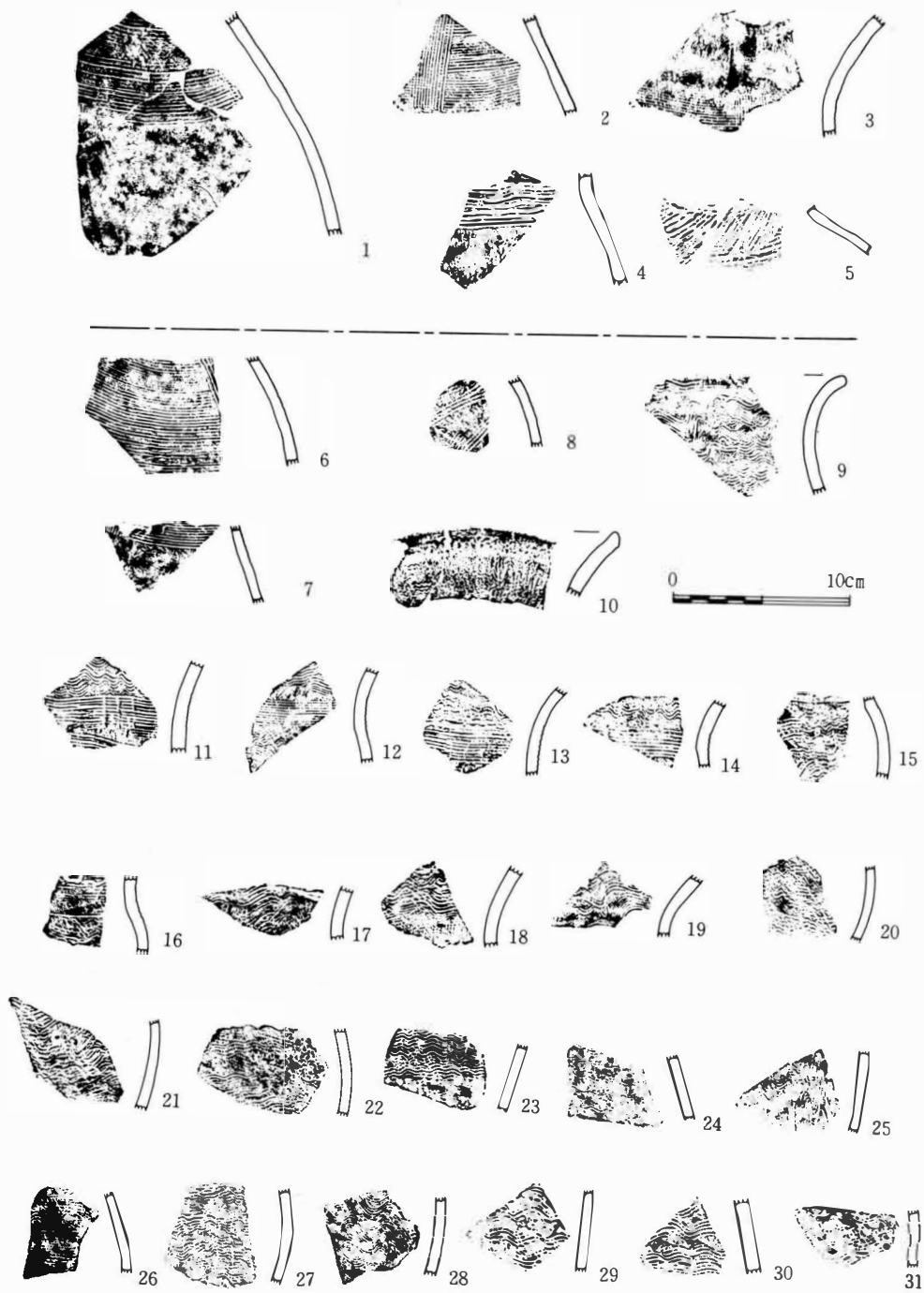
隅に造り出しを有する一辺3m内外の方形を呈している。遺構確認面が深かったためか壁高はわずかであるが、床面は暗黄褐色砂質土層中にあり、ほぼ平坦である。中央部においては堅く



第45図 第16号(1・2)・第17号(3～7)住居址出土土器



第46图 第17号住居址(1~6)、井戸址3(7)出土土器



第47图 第16号(1~5)·第17号(6~31)住居址出土土器拓影

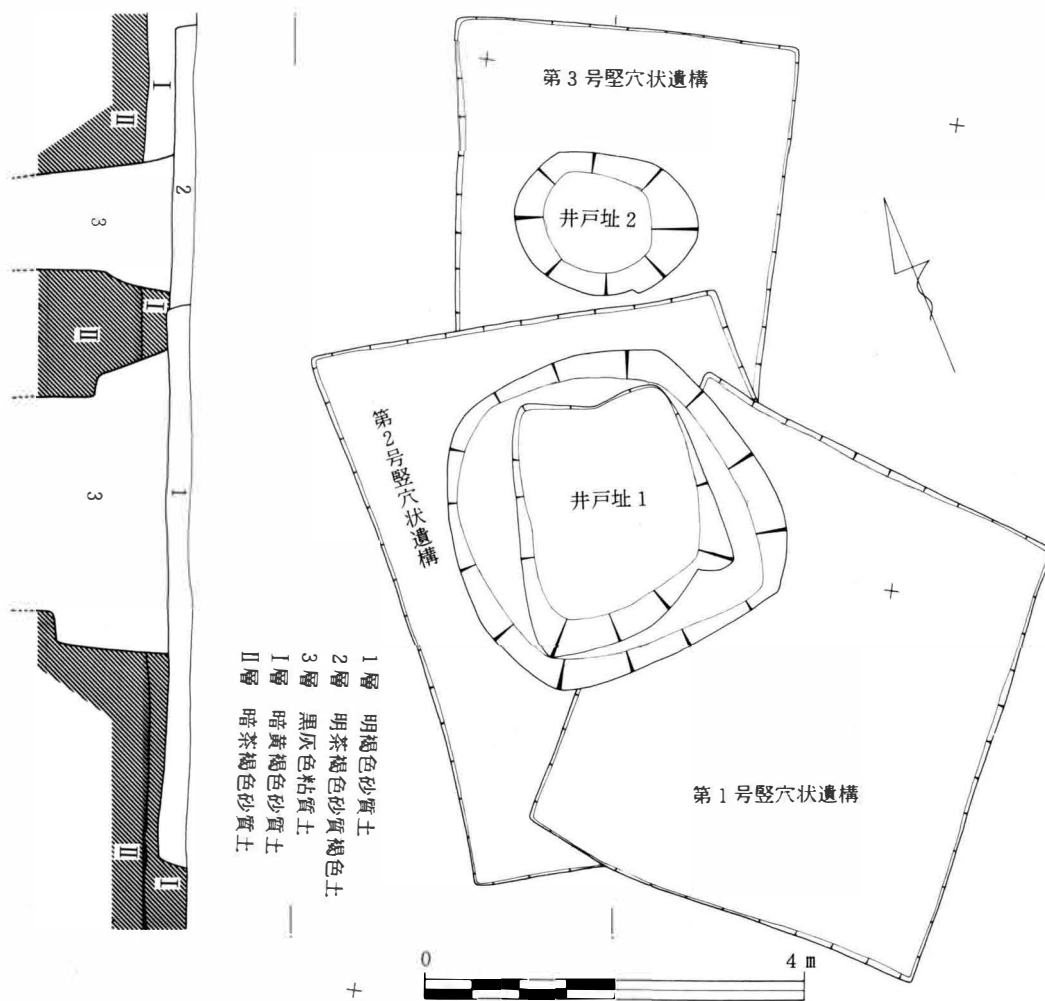
たたきしめられていて良好であるが、壁際ほど軟弱になっている。柱穴は中央部南北方向に並列して2個確認され、深さは共に20cm内外である。南隅には75×85cm・深さ45cmの楕円形ピットがある。なお北隅床面上には炭化物が0.5cmの厚さをもって一面に堆積していた。

遺物 出土量は多く、そのほとんどが床面直上と柱穴内へ流れ込みの状態で見出された。

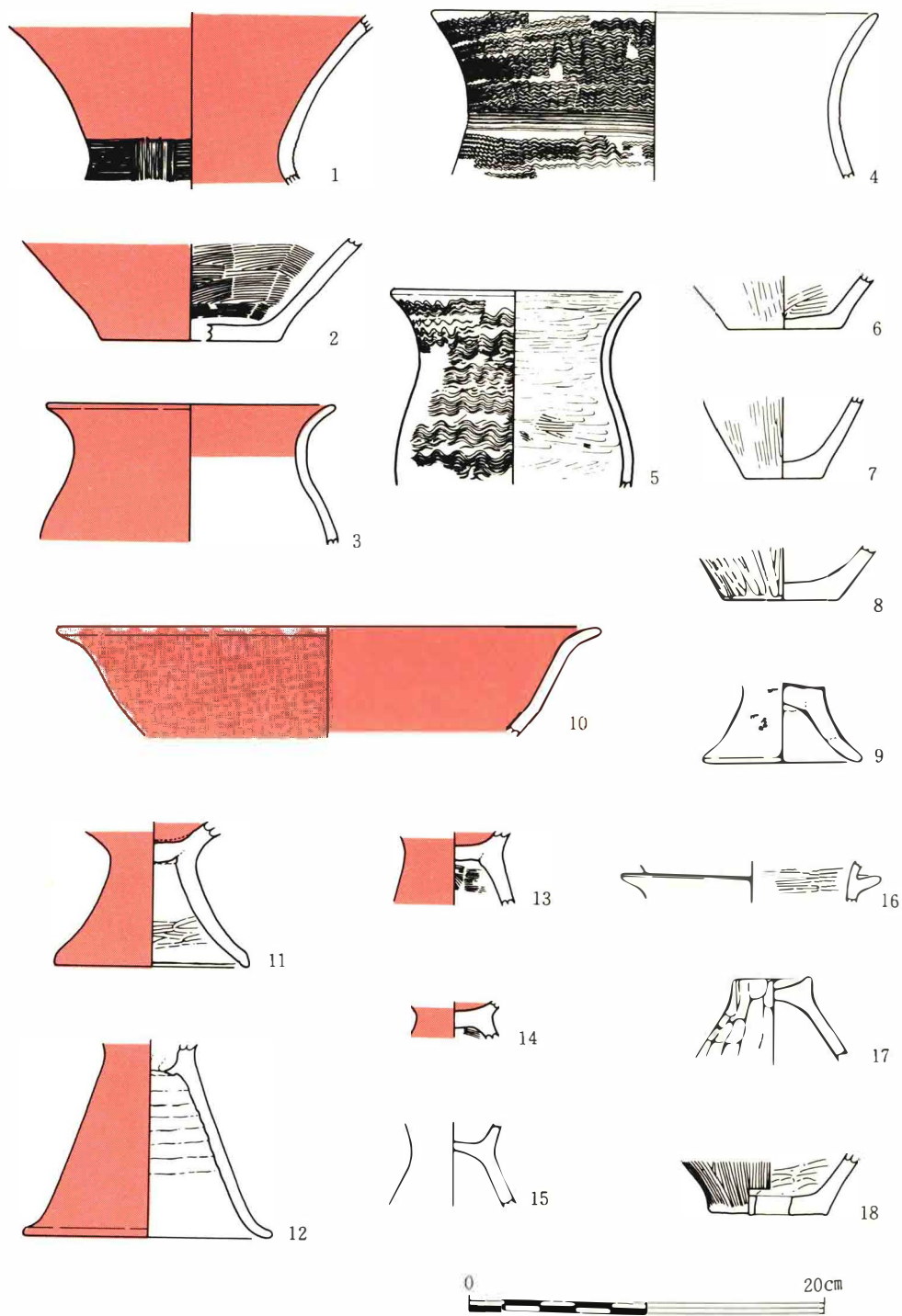
第3節 竪穴状遺構

1 第1号竪穴状遺構（第48～52図、第21・27・32図版）

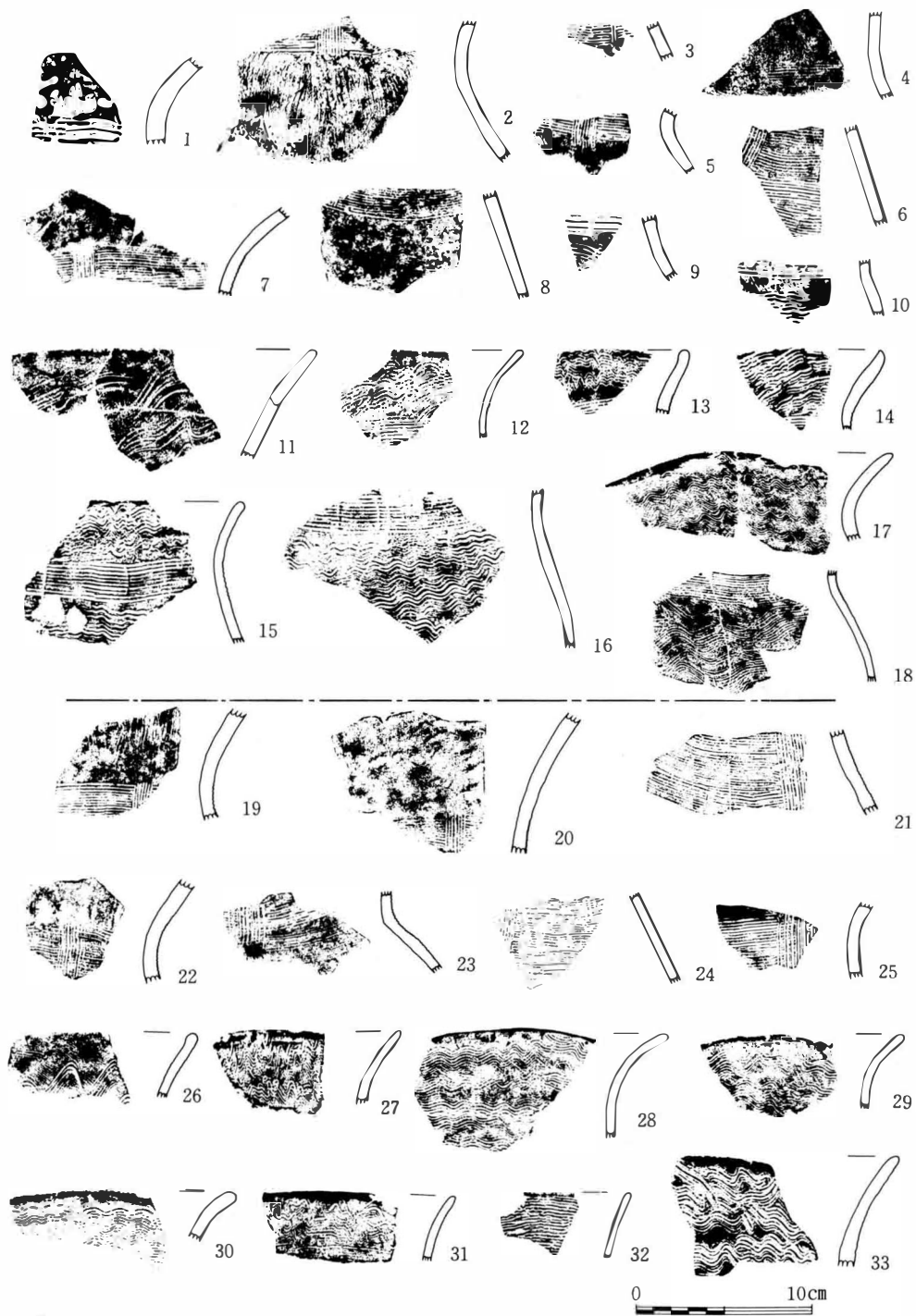
遺構 発掘区東南部に位置し、遺構確認面は地表下約1.5mの所にあり、掘り込み土層は住居址と同様である。規模が長辺約5m・短辺約4.5mのやや歪んだ長方形プランで、掘り込みの深さは各壁とも20cm内外を測る。ちなみに長軸方向はN-42°-Eである。床面は軟弱で貼り



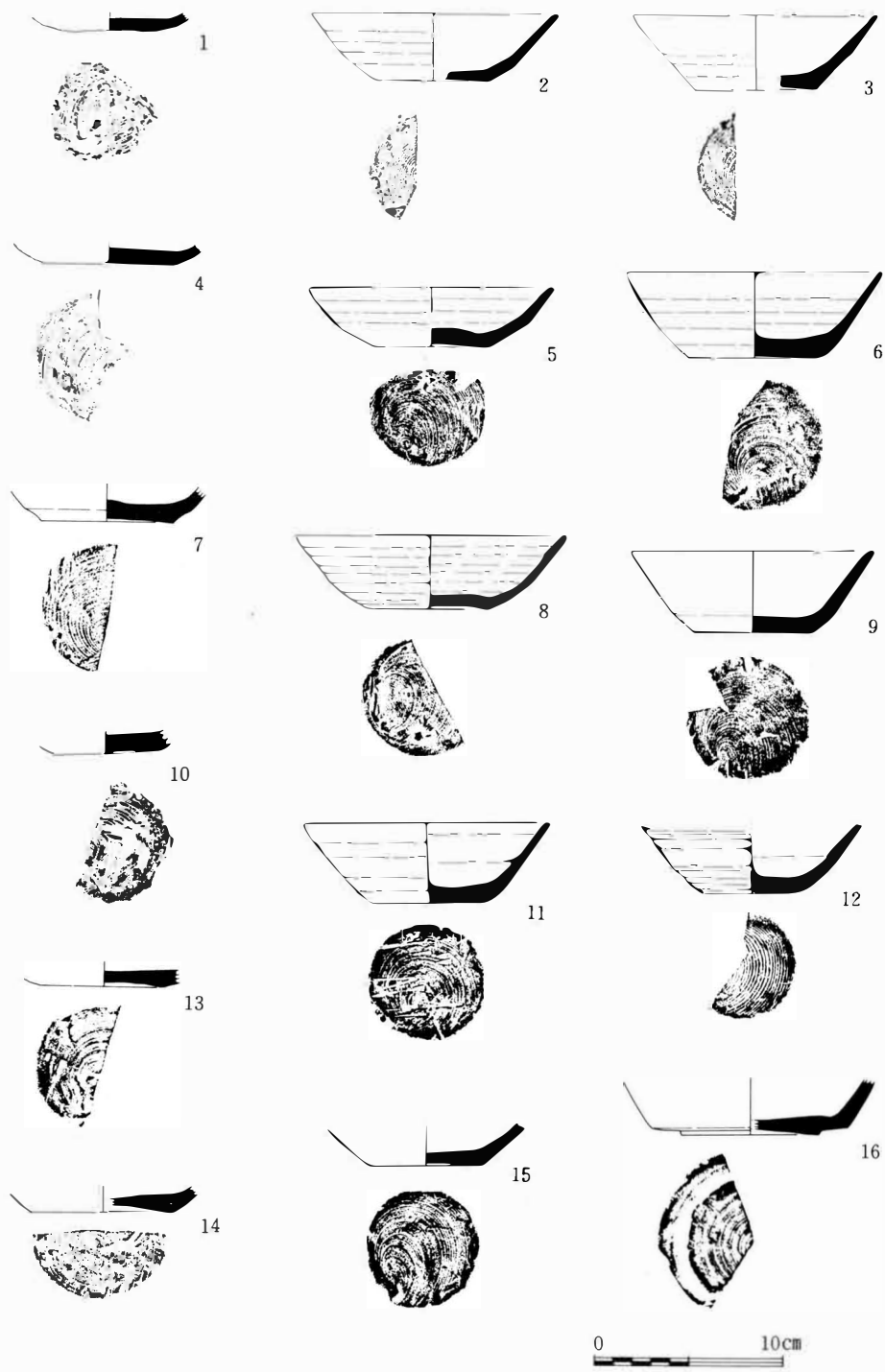
第48図 第1～3号竪穴状遺構及び井戸址1・2実測図



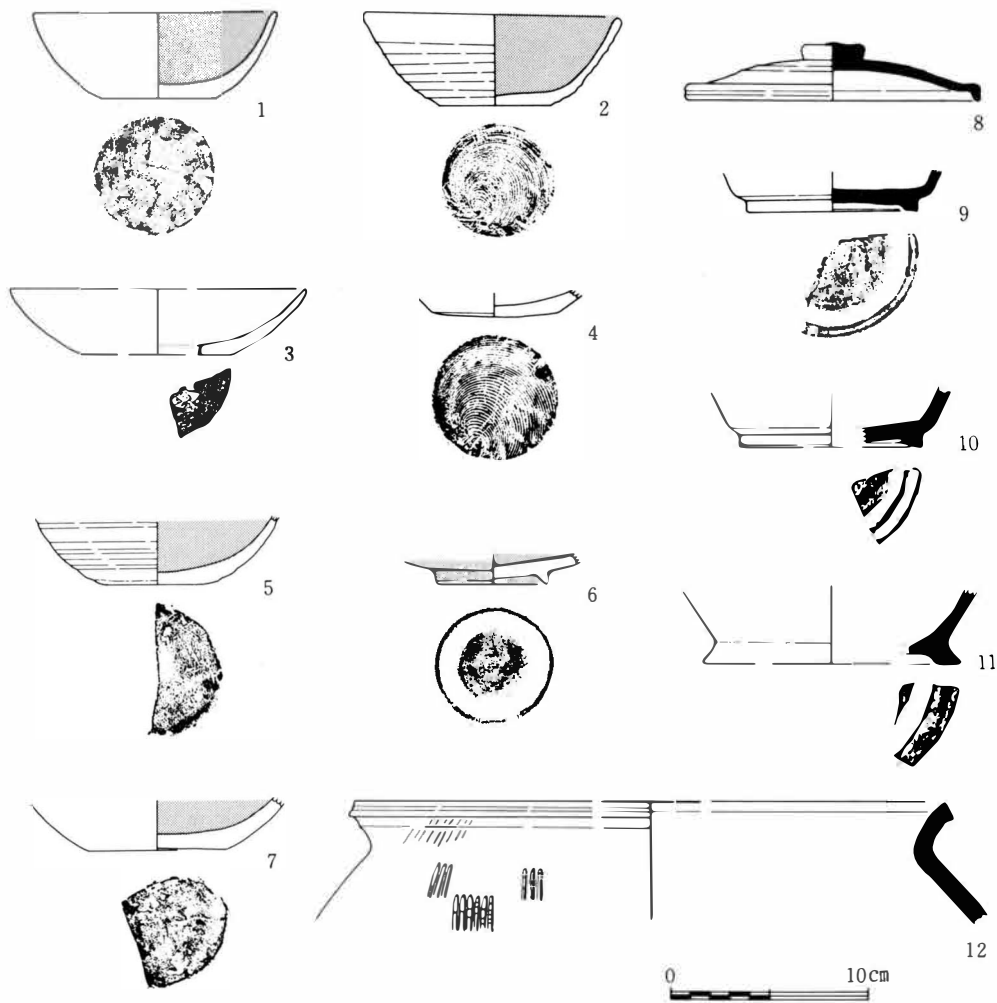
第49图 第1号竖穴状遗构出土土器



第50図 第1号(1~18)・第2号(19~33)竪穴状遺構出土土器拓影



第51图 第1号竖穴状遺構出土土器



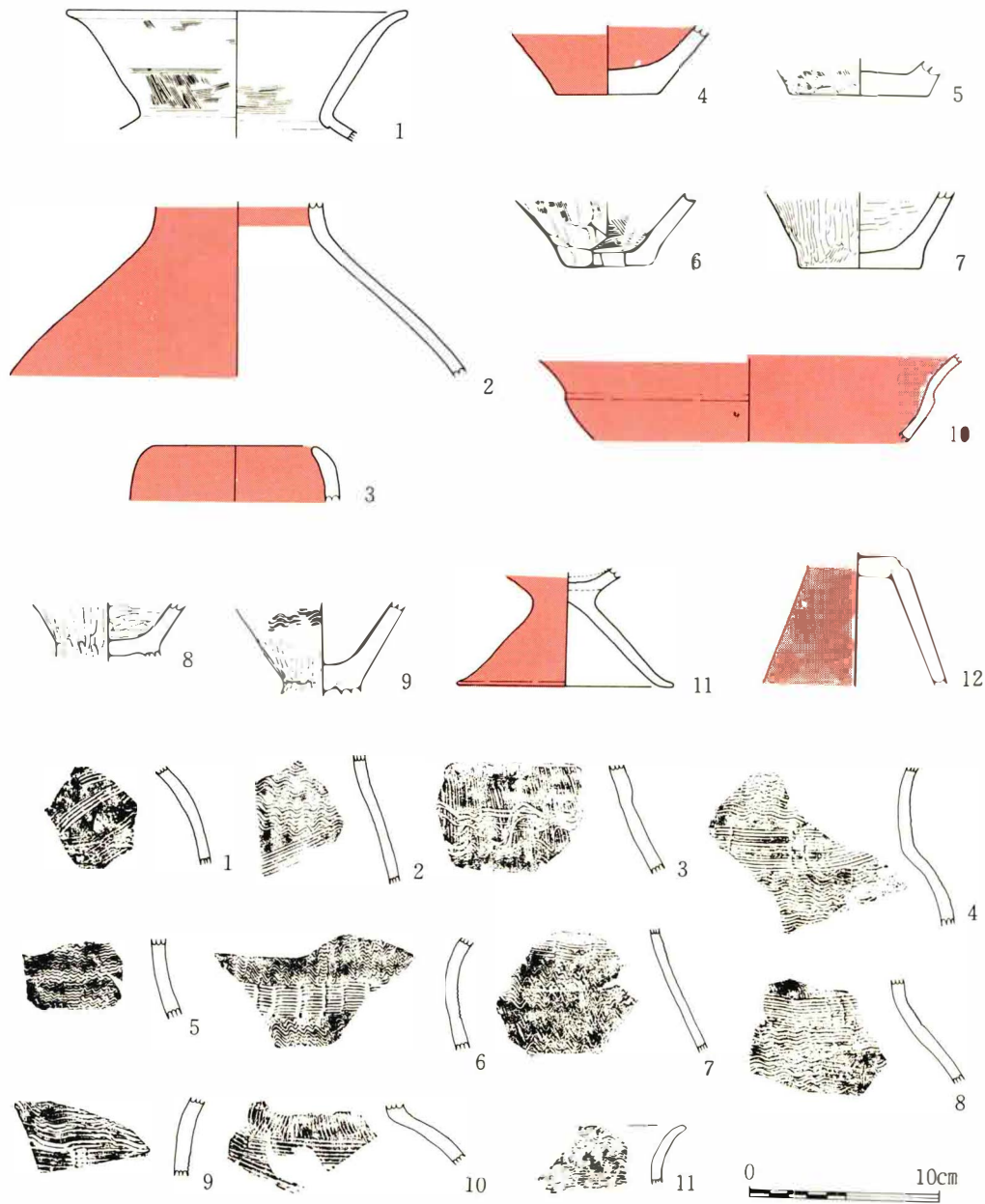
第52図 第1号竪穴状遺構出土土器

床状の遺構は認められず、また柱穴及びカマドにあたる施設が検出しえなく、本址を通常みられる「住居址」と断定する要素はなかった。

遺物 本址より平安時代に比定される須恵器坏・甕形土器の他に、やはり同時期に比定される土師器坏形土器が出土している。この他覆土中に弥生時代土器片が認められた。

2 第2号竪穴状遺構（第48・50・53～55・75図、第21・27・28・32・33図版）

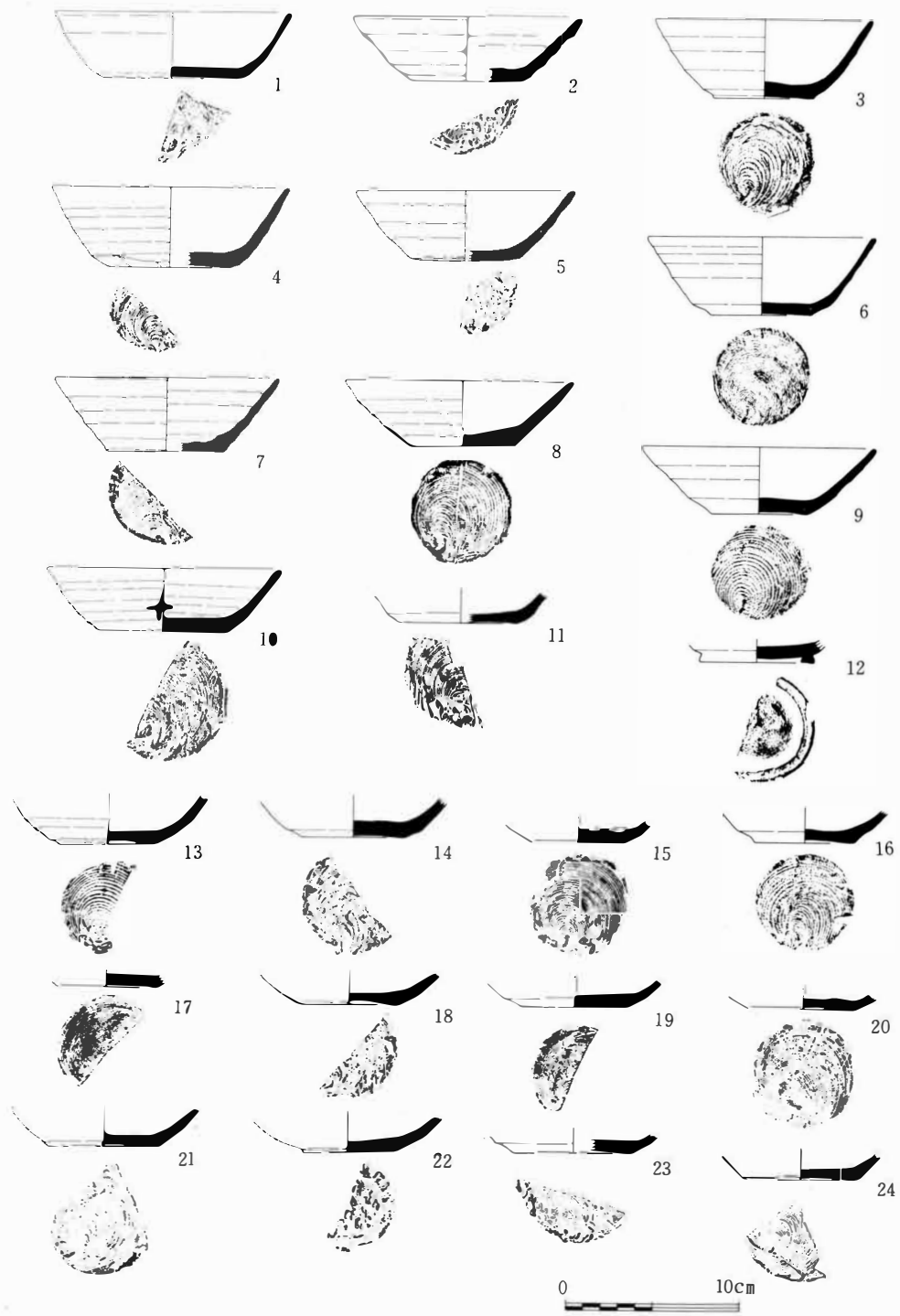
遺構 第1号竪穴状遺構（以下第1号、他と同様）の北東に位置し第3号の南側を切り込み、第1号には東南側を切られている。確認面での所見は覆土が第1号のそれと較べるとやや明度のあるものであった。プランは長辺約 5.8m・短辺 4.2mの不整形を呈するものであって、



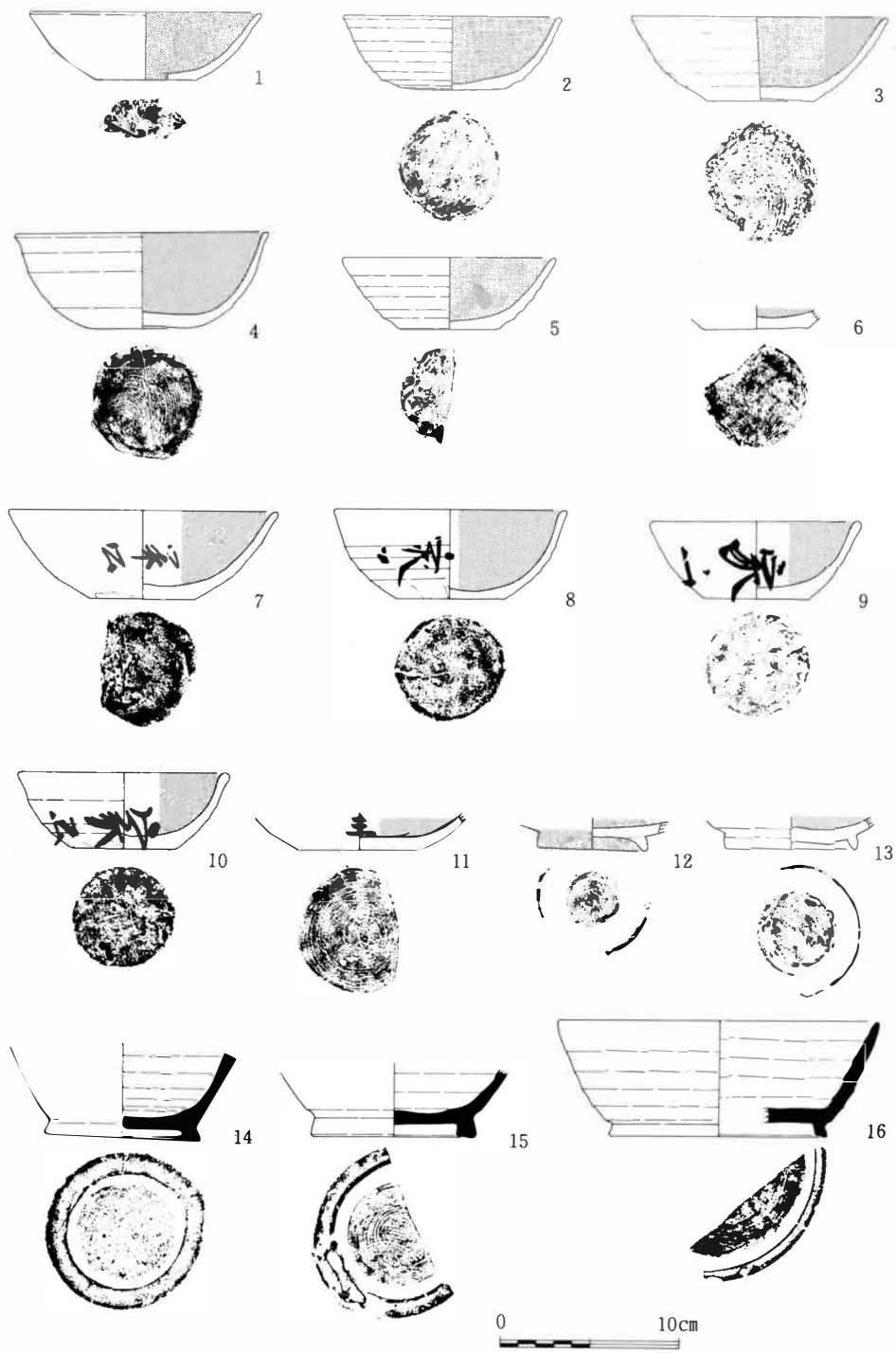
第53図 第2号竪穴状遺構出土土器及び拓影

壁は傾斜を有し、その高さ各壁を約20cmを測る。第1号同様柱穴・明確な床面・カマド等の施設は確認できず、後述する井戸址1をその遺構内に収めることや、床面を切って井戸址が掘り込まれていることを考慮すると、本址は井戸址に伴う遺構と考えたほうがいいかもしれない。

遺物 平安時代に比定される須恵器・土師器の坏形土器が出土している。その中でも墨書土



第54图 第2号竖穴状遺構出土土器



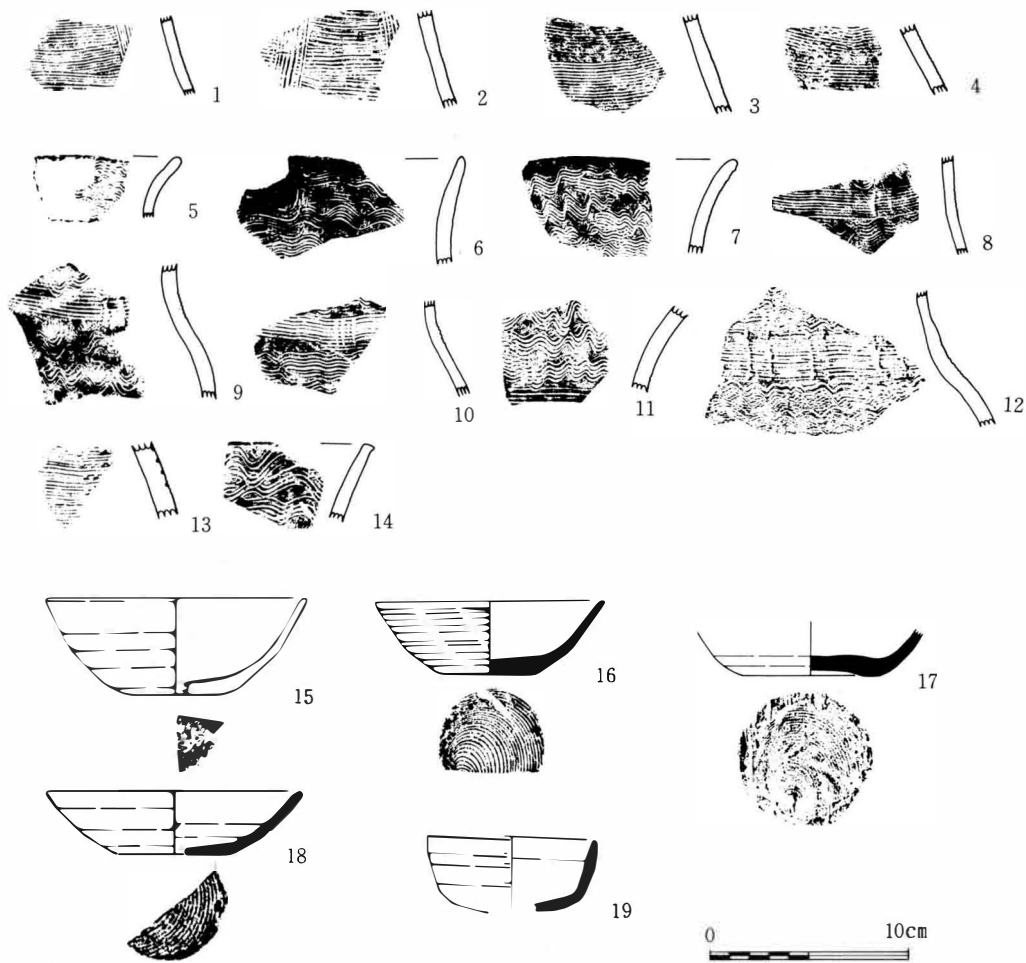
第55図 第2号竖穴状遺構出土土器

器が少なからず認められる。

3 第3号竪穴状遺構（第48・56図、第21・28・33図版）

遺構 第2号の北側にあり、これにより南壁を切られる。遺構検出面は前者と同様であるが、覆土は第2号のものより若干暗い色調を呈する。プランは長辺が第2号に切られ本来の規模は未確定であるが、現存で長軸が約3.6m・短辺約3.4cmを測る不整長方形を呈する。壁の状態は他と同様やや傾斜を有し、その高さは各壁とも15cmを測る。不明確な床面、柱穴・カマド等がなかった点、及びほぼ中央に井戸址2がある点も第2号と類似が求められ、本址も前者と同様に考えている。

遺物 本址より検出された遺物は少なく、須恵器环形土器と若干の弥生時代土器のみである。



第56図 第3号竪穴状遺構出土土器及び拓影

第4節 井戸址

1 井戸址1 (第48・58・59図、第22・32図版)

遺構 第2号竖穴状遺構の精査の際認められたもので、床面に径3.4mの不整円形プランを呈する遺構である。掘り込み面より40~50cmで段をもってそれ以降そのまま底部に至る。壁の状態は極めてよく、埋土との離別は容易であった。尚調査途中で現地表下3m(確認面下1.3m)で湧水を見た。それ故に調査を断念した。水位面でのプランは長辺2m・短辺1.8mの不整形を呈する。

遺物 若干の須恵器・土師器坏・甕形土器片が得られたにすぎない。



2 井戸址2 (第48・58・59図、第22・32図版)

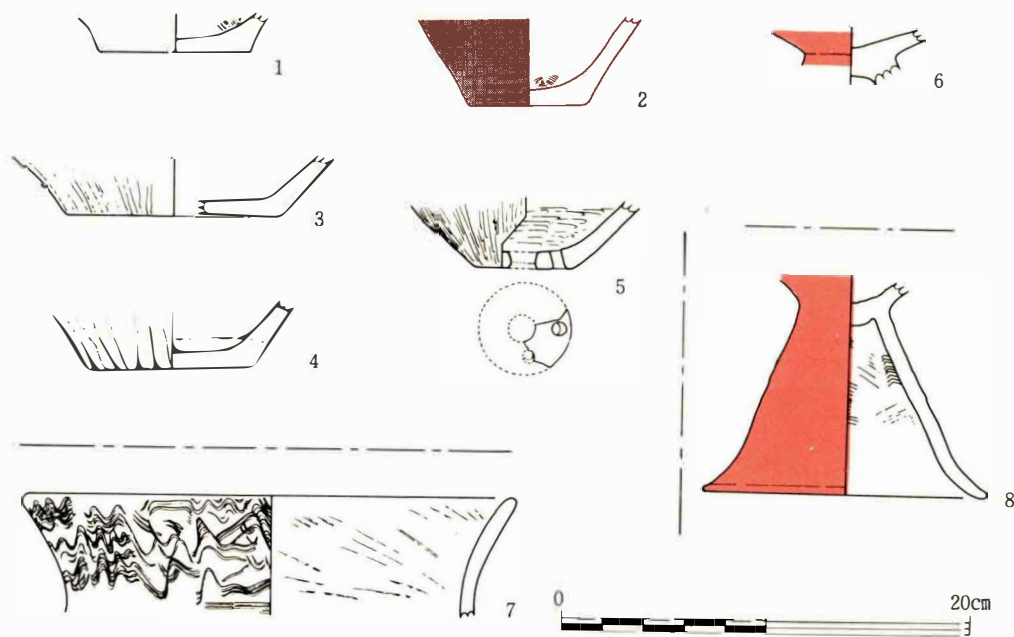
遺構 本址は第3号竖穴状遺構の精査中に検出したもので、長径2m・短径1.6mの楕円形プランを呈し、円錐形に底部に至るものと思われる。地山と覆土は第1号と同様のあり方を示す。

遺物 少量の土師器・須恵器片が出土しているにすぎない。

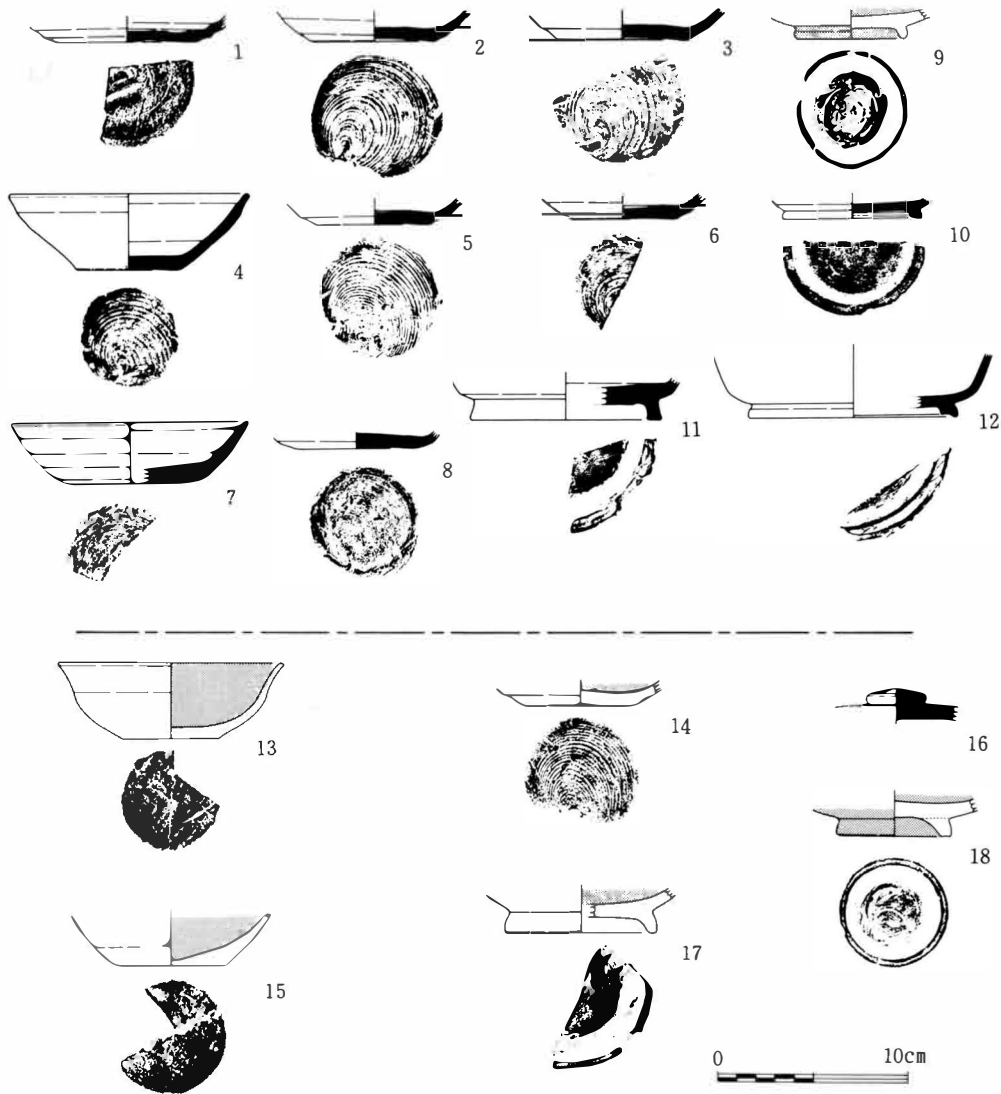


第57図

井戸址3実測図



第58図 井戸址1(1~6)・2(7)・土坑43(8)出土土器

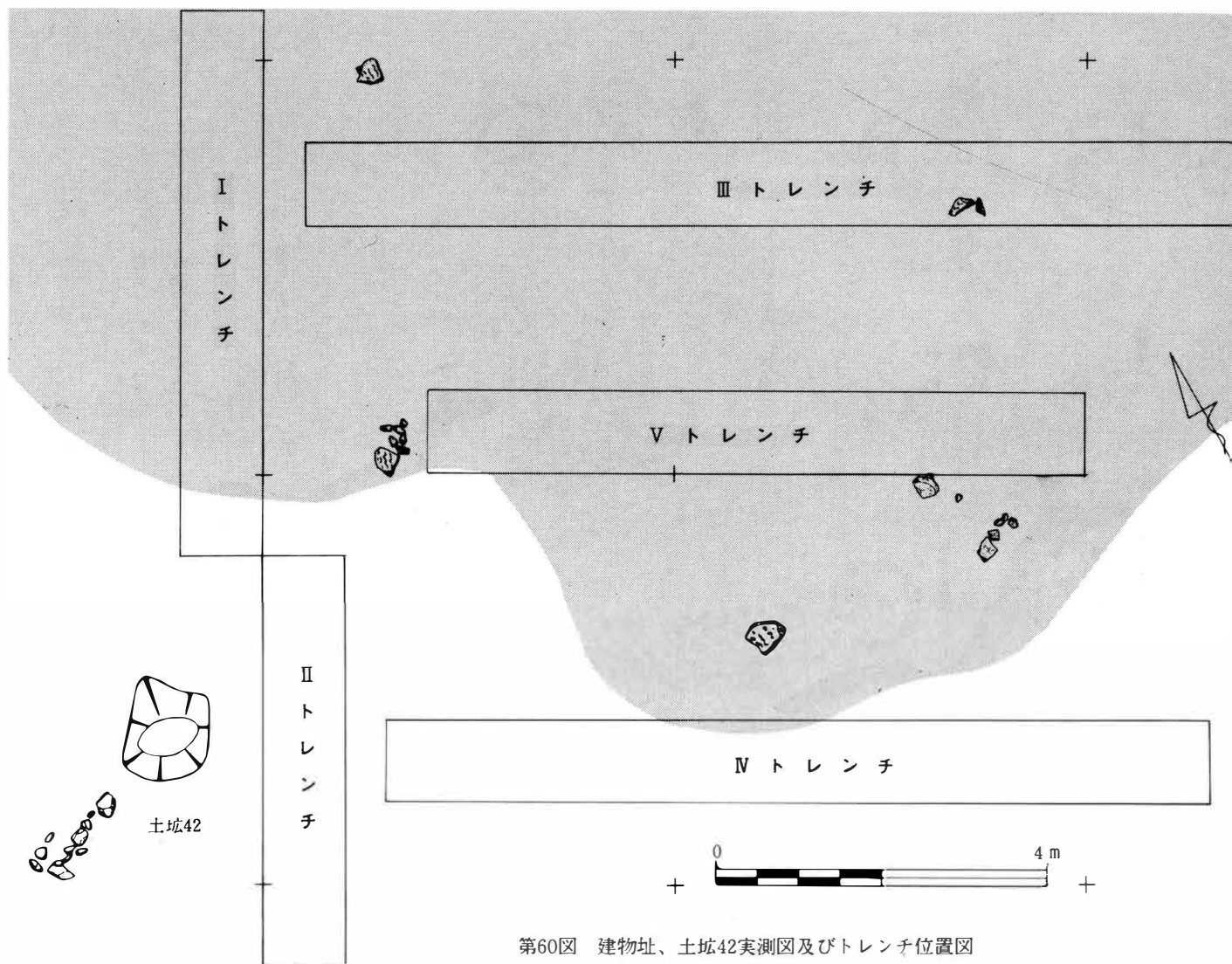


第59図 井戸址1 (1~12)・2 (13~18) 出土土器

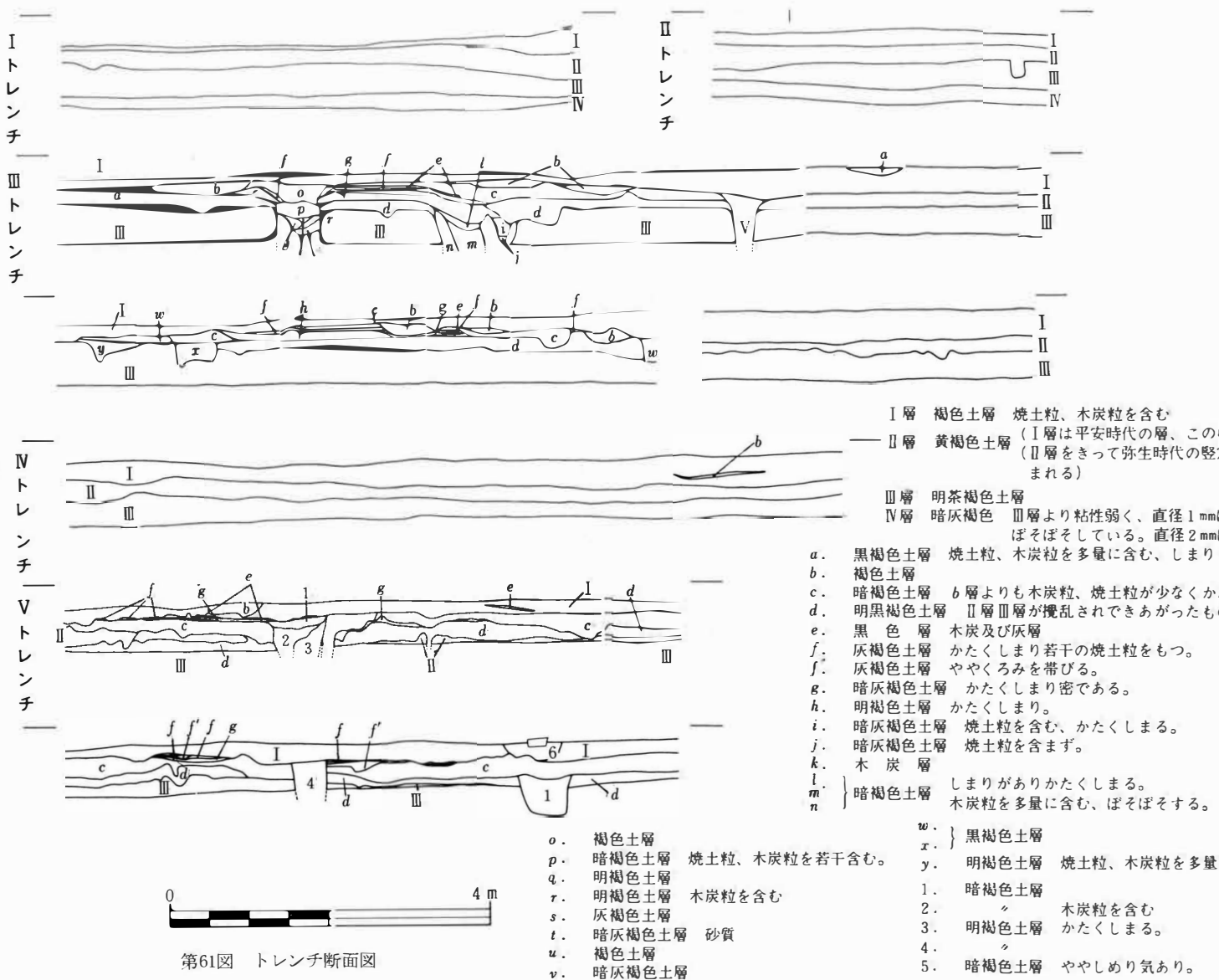
3 井戸址3 (第46・57図、第22・25図版)

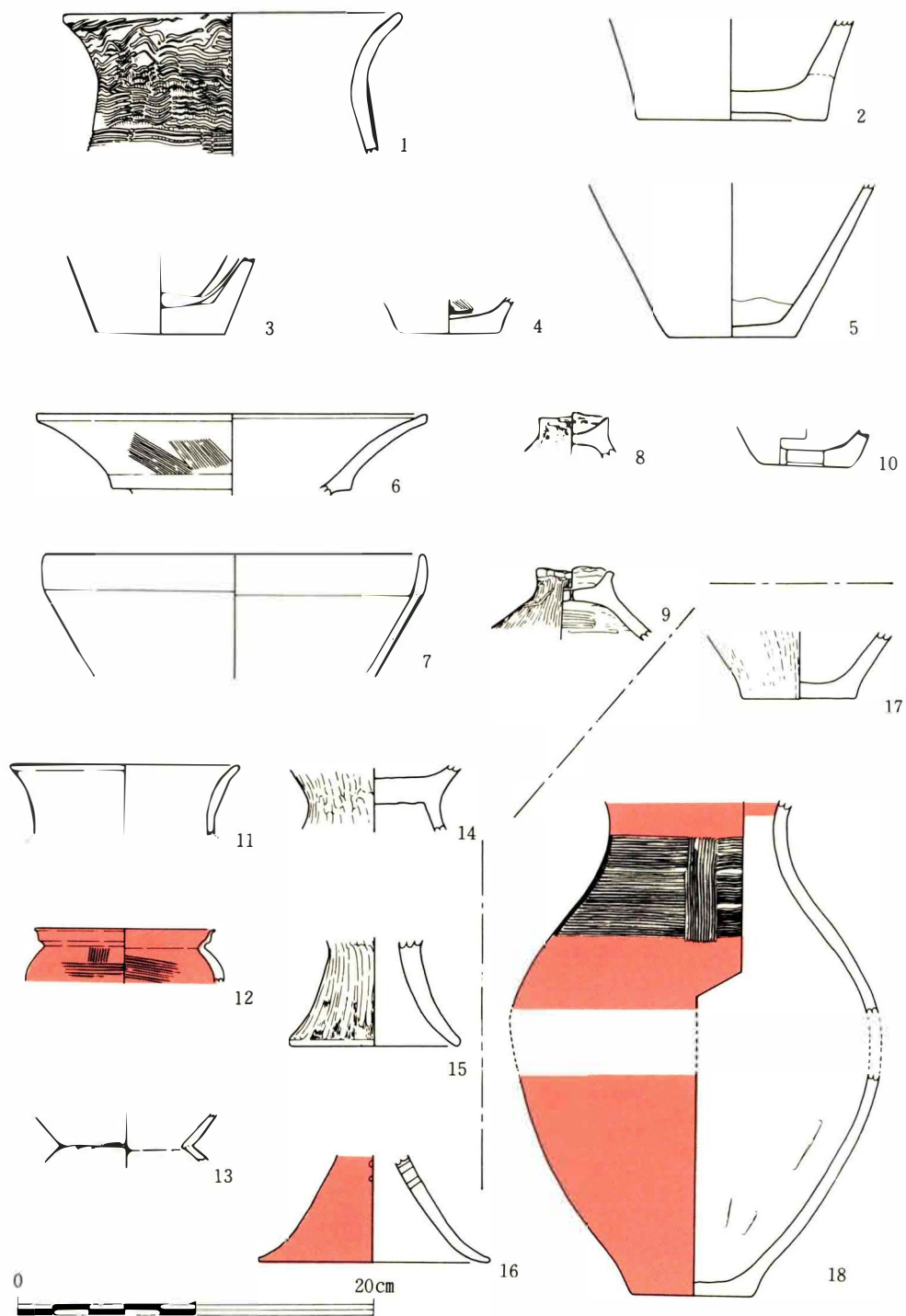
遺構 調査区中央より南側にあり、IVトレンチの北壁に接する位置から検出された。径約70cmの円形プランを呈し、確認面より1.2m程で底面に至る。底径は50cmの円形である。壁の状態は良く、覆土が容易にはがれた。

遺物 底面付近から網代状の炭化物が認められた他覆土中位より弥生期の甕形土器(体部中位以下欠損)が出土した。

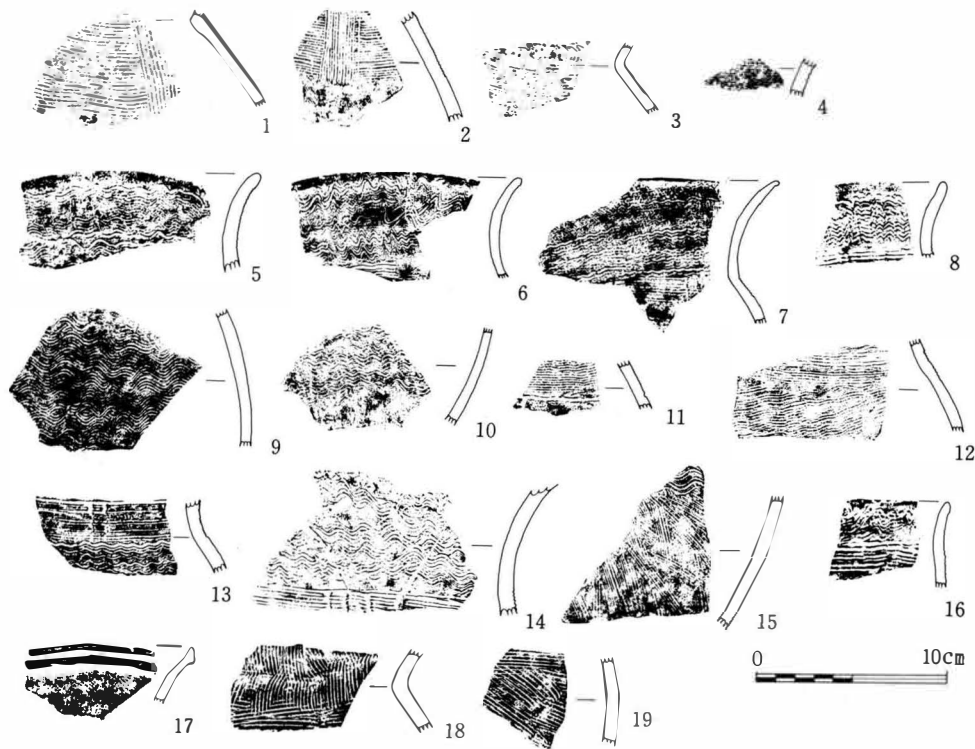


第60図 建物址、土坑42実測図及びトレンチ位置図





第62図 建物址(1~16)・包含層(17・18)出土土器



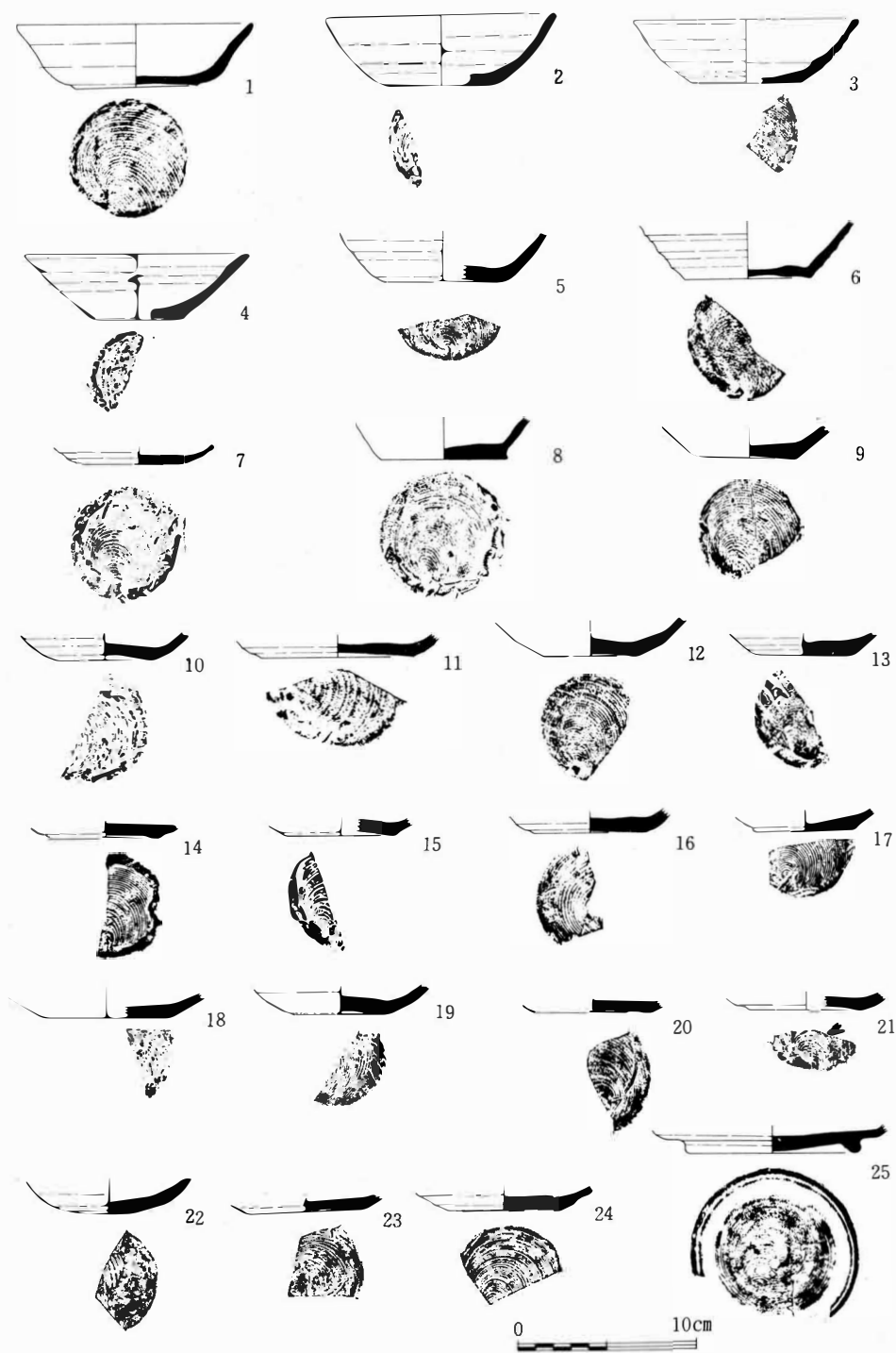
第63図 建物址出土土器拓影

第5節 建物址 (第60・61・62～65図、第30・31図版)

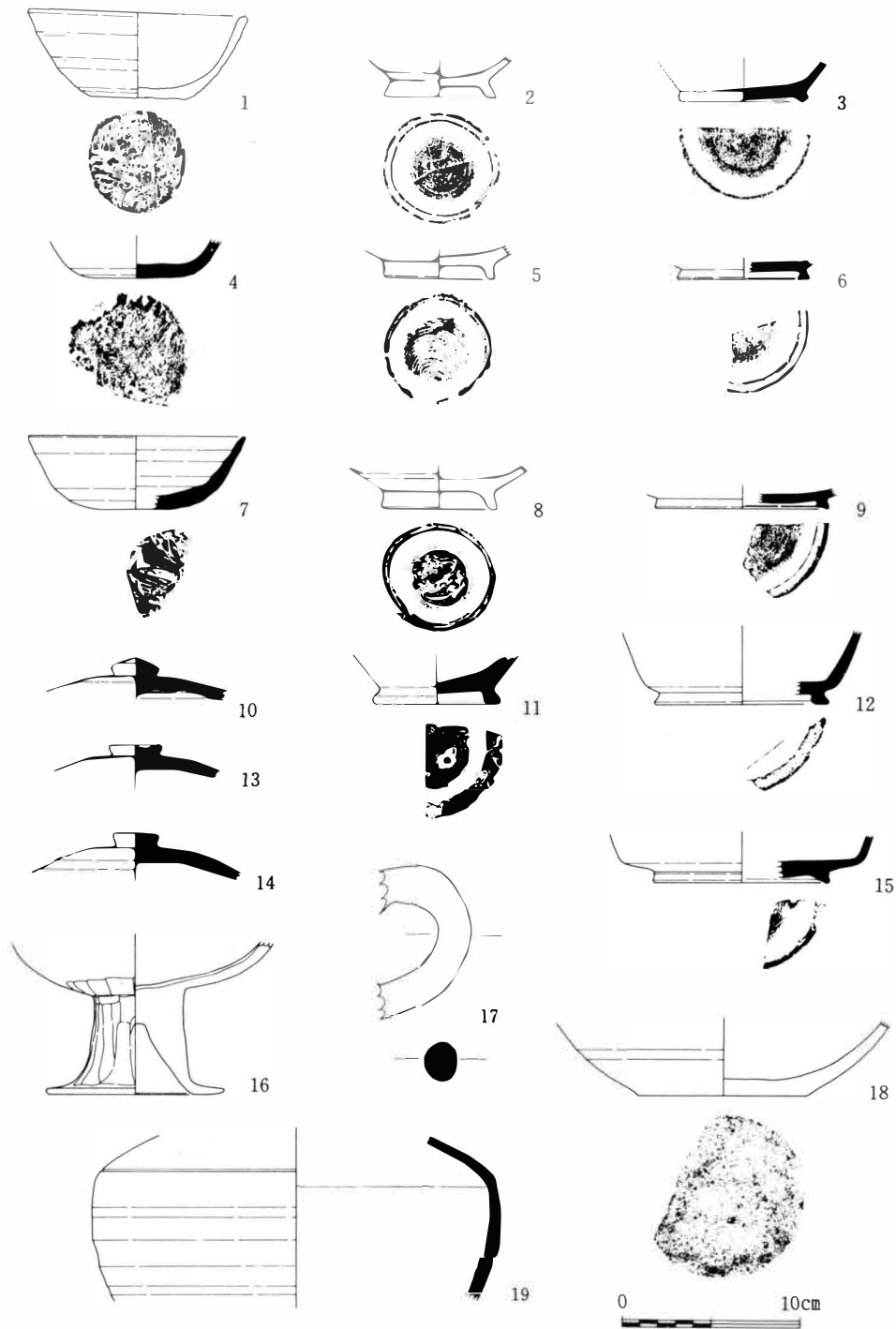
遺構 この遺構はb～e-5～7グリットを精査中に発見されたもので、調査面には第43図に示したとおり焼土粒・木炭粒・灰等が混入した土によりおおわれていた。それらの上面を更にはぎとったところ、一定の規格(間隔)をもつ礎石群を検出した。これらは調査地内に6ヶ所検出したが、区域外に延びる可能性がある。礎石は一辺30cm・厚さ10cm程の方形を呈する平石で、その配置間隔は4.5m内外である。入口部とみられる南側礎石間は2.8m程あり、他に比べ狭くなっている。主軸方向は真北を指している。

この建物址の性格をとらえるために、東西方向に5本のトレンチを設定した結果、建物址の西・南側のⅠトレンチからは、層位の乱れがなかったのに対し、建物址の中央部に設けたⅢ・Ⅴトレンチのそれは非常に多数の層に分割されていることがわかった。人為的整地が加えられたためであろうと推定される。また前記した焼土等を含む上層は火災結果の所産と考えている。

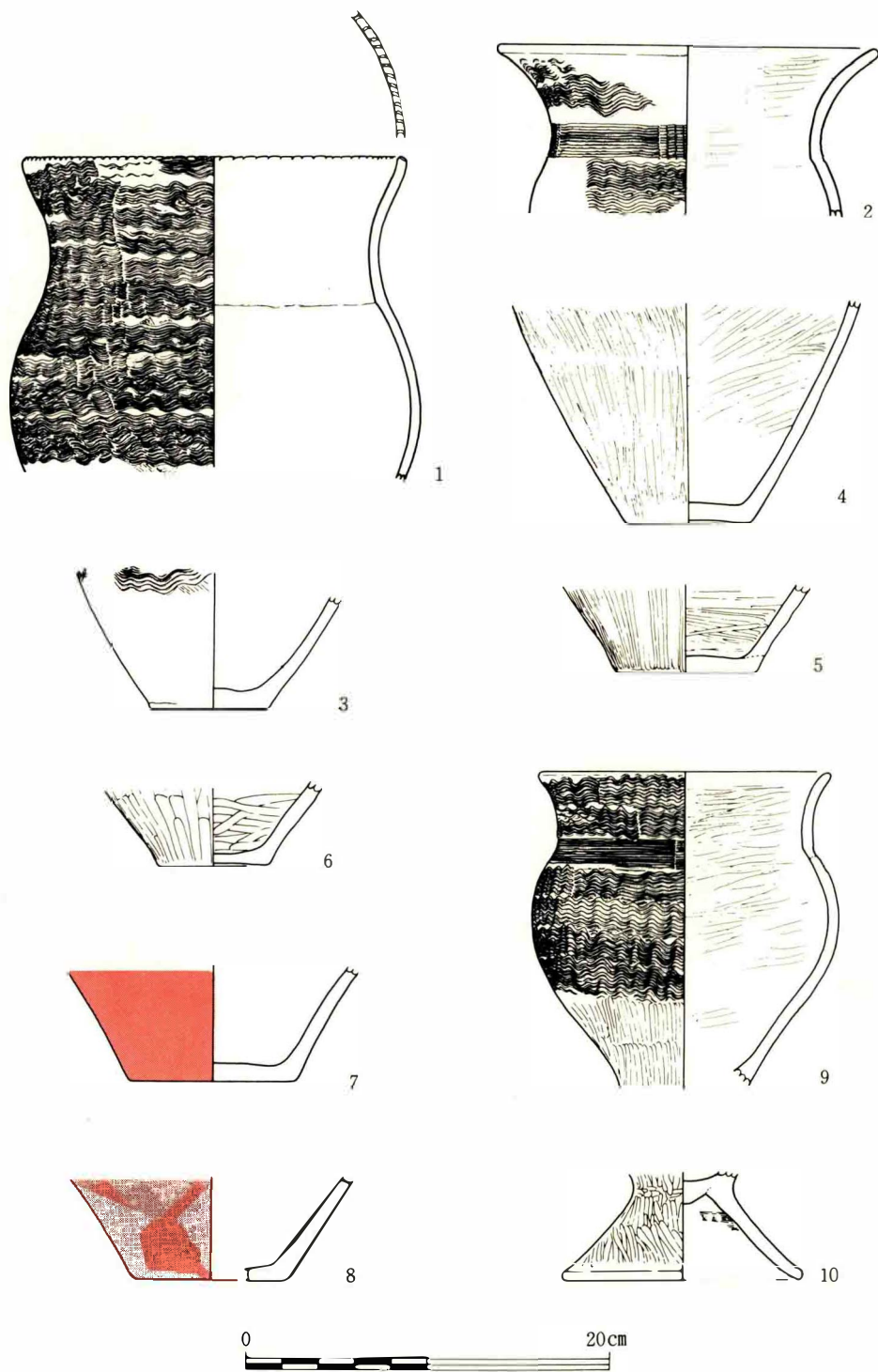
なおこの調査地より西の妻女山山麓付近からは古瓦が出土しており、道島廃寺址の存在が想定されている。この建物址はそれと積極的に関与したものと推定している。



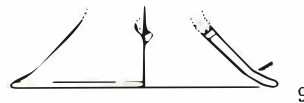
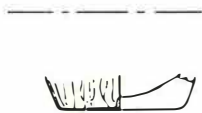
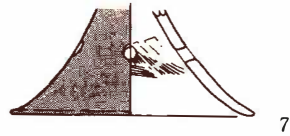
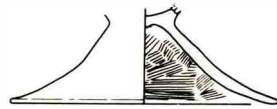
第64图 建物址出土土器



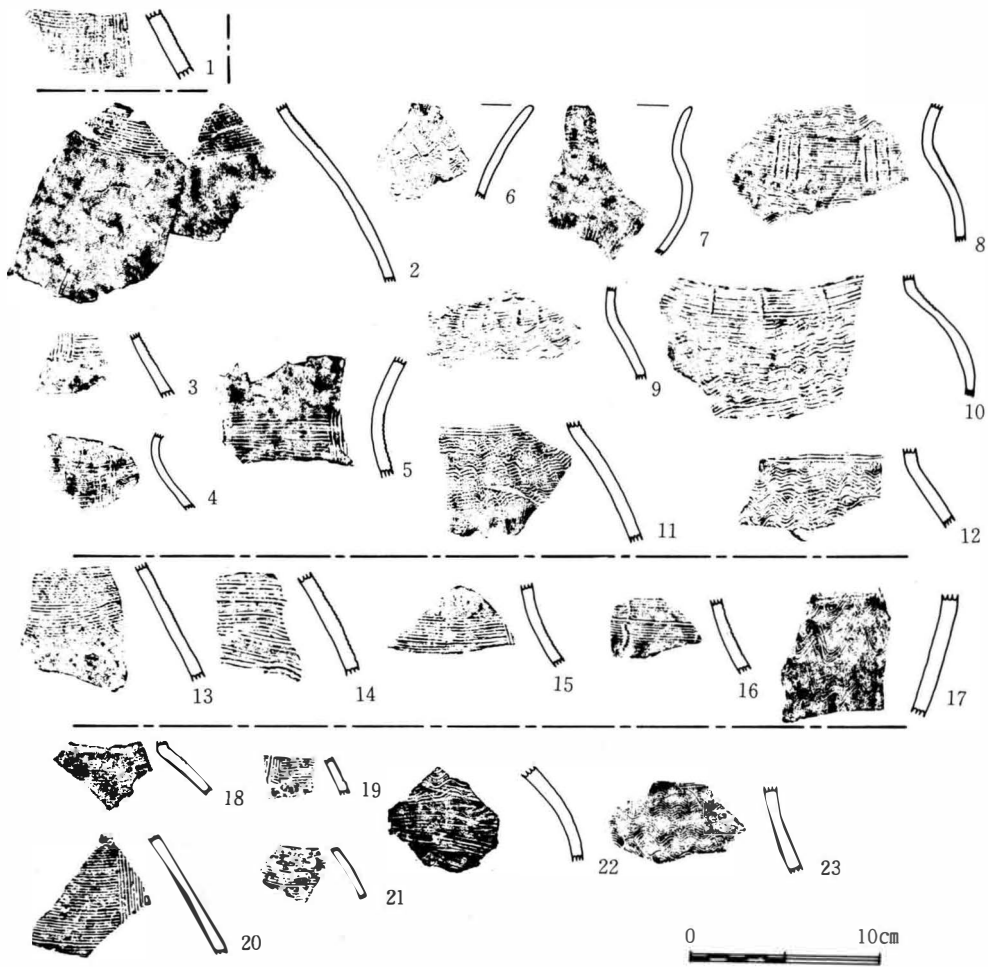
第65図 建物址出土土器



第66図 I トレンチ出土土器



第67図 III(1~4)・IV(5~9)・V(10) トレンチ出土土器



第68図 I(1)・III(2~12)・IV(13~17)・V(18~23)トレンチ出土土器拓影

遺物 建物址を中心とする地域からの出土で、攪乱層として把握したものである。多くの弥生式土器・土師器・須恵器片及び図示できなかったが古瓦が1片出土した。

第6節 土 塚 (第60・69~71図、第22・29・32図版)

遺構 4基確認されている。

土塚40は長軸 2.1 m・短軸 1.0 m・深さ70cmの規模で、平面プランは不整楕円形を呈する。主軸方向はN-5°-Eを指す。

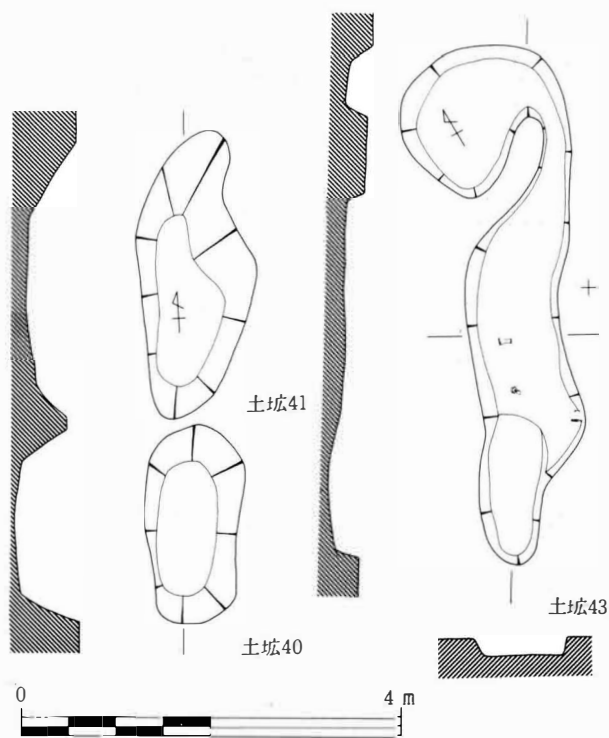
土塚41は長軸 3.1 m・短軸 1.2 m・深さ70cmを測る大形のもので、土塚1同様不整楕円形の平面プランになる。主軸方向はN-10°-Eを指す。

土坑42(第60図)は長軸 1.1 m・短軸 1.0 m・深さ30cmの規模で、逆方錘形態の土坑である。

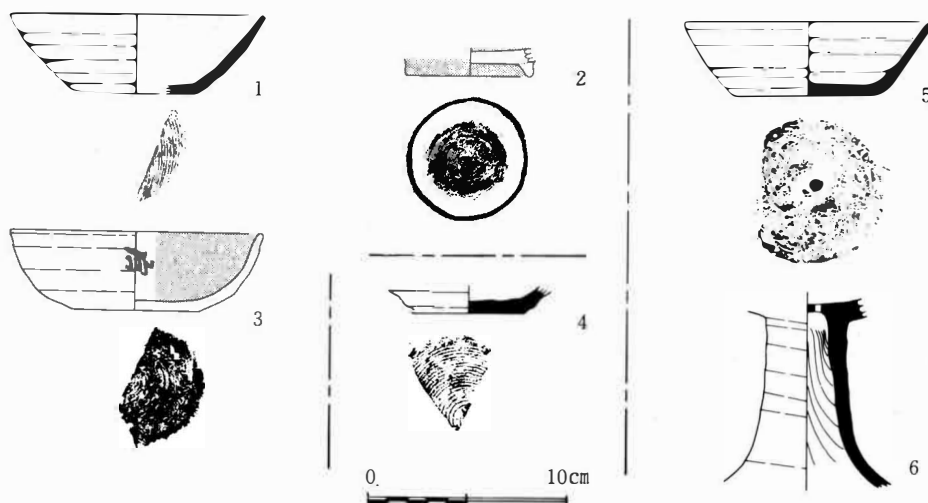
これらは前述した建物址に伴う遺構と考えられ、墓址というよりも配水施設の用を供したものと推定される。

土坑43は b・c - 2 グリットから検出されたもので、長軸 4.5 m・短軸 1.0 m・深さ20~25cmの北端が円形ピット状をなす溝址の土坑である。用途は不明である。

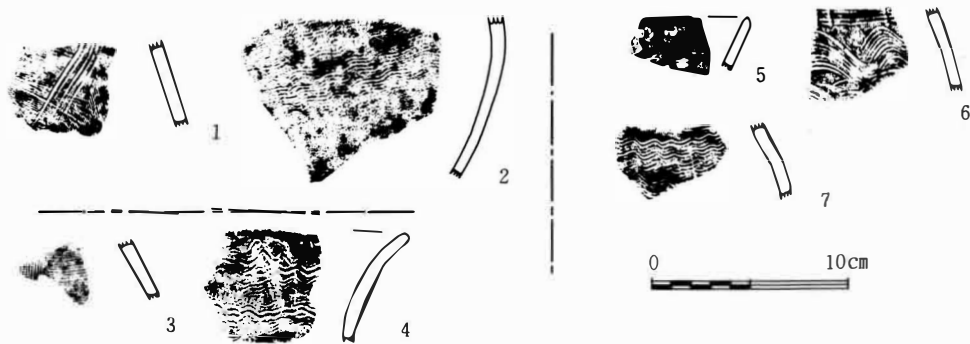
遺物 各土坑とも出土量は少なく、その多くは平安時代に比定される須恵器片である。



第69図 土坑40・41・43実測図



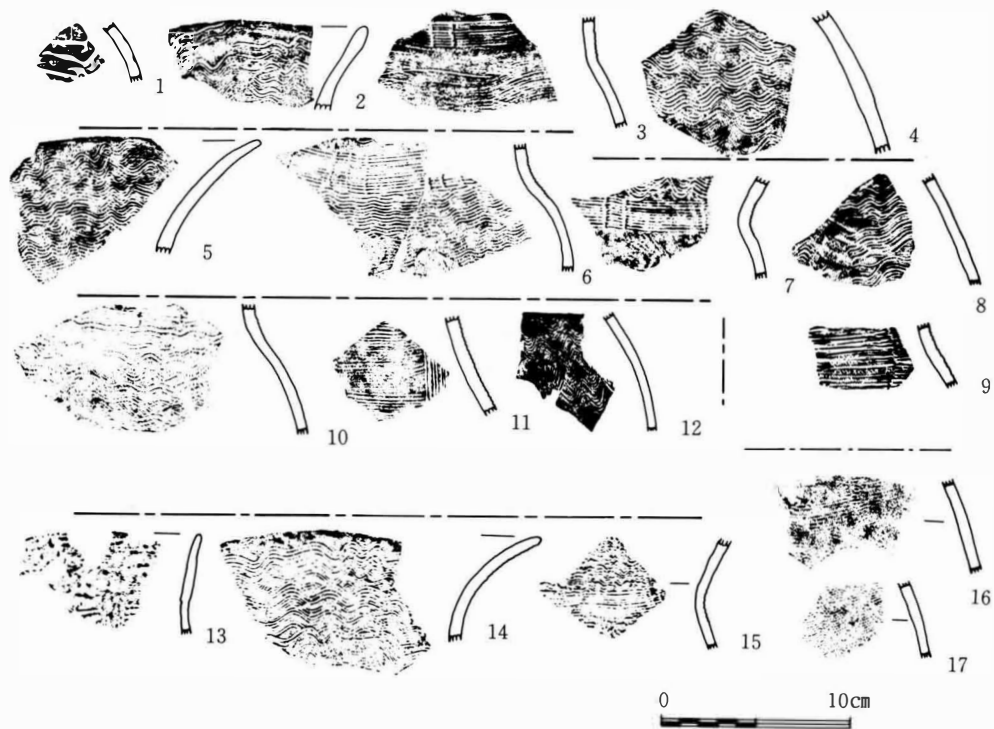
第70図 土坑41(1~3)・42(4)・43(5・6) 出土土器



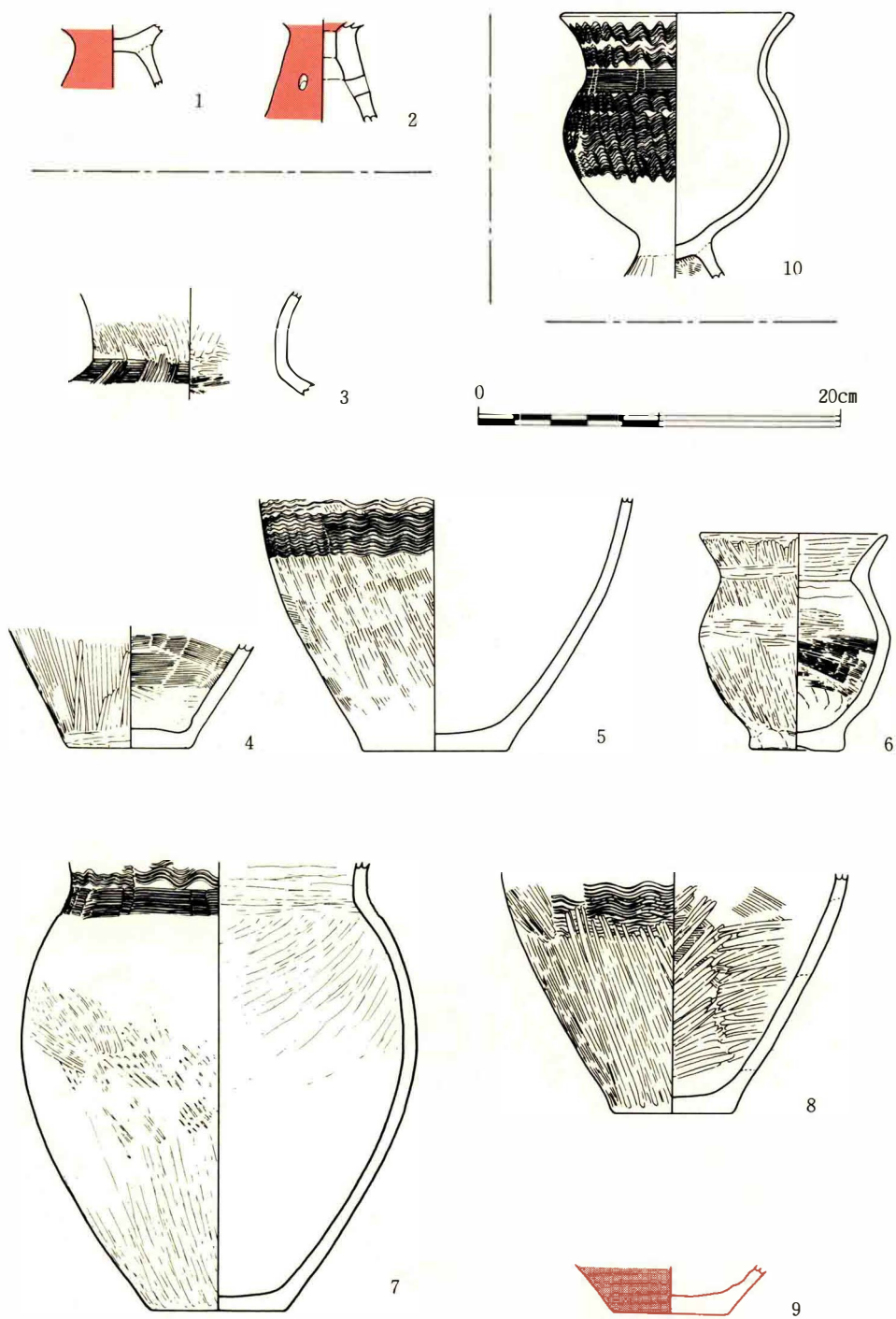
第71図 土坑40(1・2)・41(3・4)・42(5～7) 出土土器拓影

第7節 包含層出土の遺物 (第62・72～75図、第31・32図版)

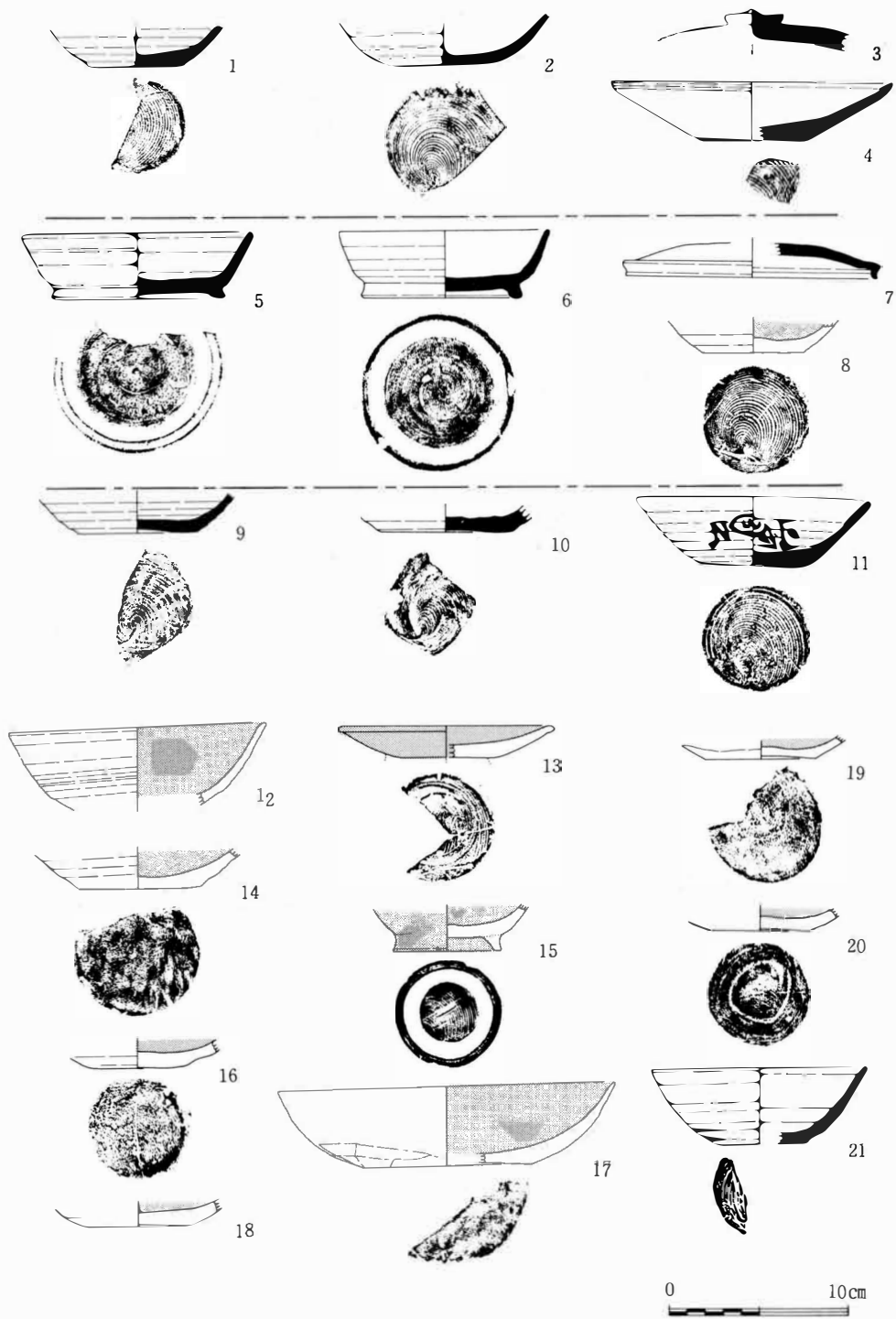
主として調査地北側 b-7 グリット内の配水管工事に伴ない地表下 1.5m 付近及びその廃土中よりみつかったものを区域外と表し、他は調査進行中各グリットから出土したものである。



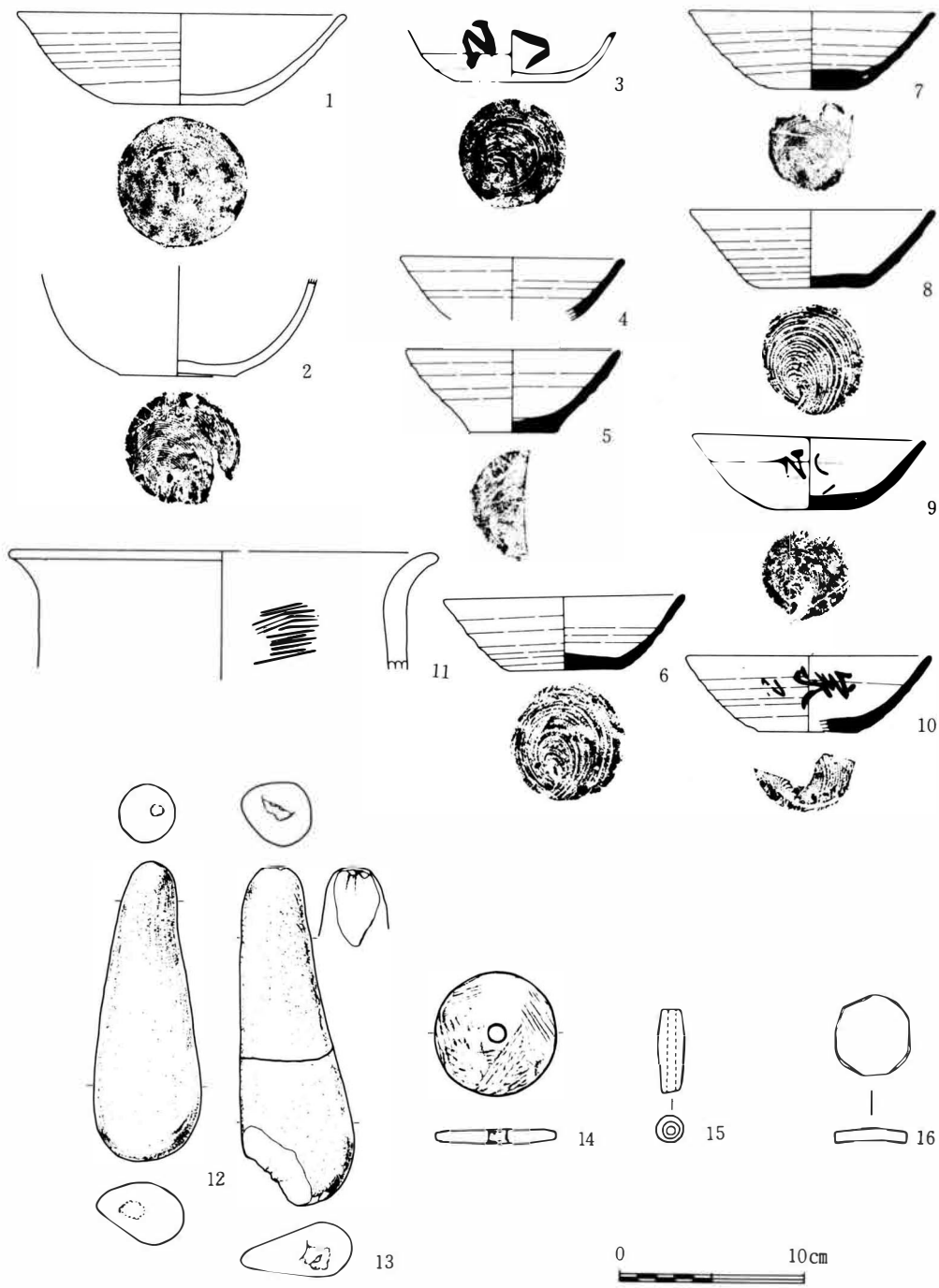
第72図 b-2・3(1～4)・C-2(5～9)・B 3・4(10～12)グリット及び区域外出土土器拓影



第73図 B-2(1・2)・C-3(3~9)・D-3・4・10グリッド出土土器



第74図 B-7(1~4)・C-4(5~8)・D-3・4(9~11)グリット及び区域外出土土器



第75図 区域外出土土器及び第17号住居址(12・13・14)・第2号(5)・第3号(16)
 竪穴状遺構出土遺物

家	家	家	家	家
家	家	家	家	家
家	家	家	家	家
家	家	家	家	家



十 十 主 上 亦 居

第76图 出土墨书集成

第4表 出土図示遺物一覧表

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 土 状 況
		器高	口径	底径					外面	内面	
第16号住居址 (第45図)											
1	甕				体部ゆるく張る	(内)刷毛ナデ・ナデ (外) 〃 ・ 櫛歯16本 2 回止 簾状文・波状文	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	床
2	台付甕			9.8	台部外反・端部面取り	(内)ヘラミガキ・ヨコナデ (外)刷毛ナデ・ナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
第17号住居址 (第45・46図)											
3	壺				卵形・体部上半に最大径・焼成後2穿孔	(内)ナデ (外)ヘラミガキ	小砂	良好	暗褐色	黄褐色	床
4	甕				体部ゆるく張る	(内)ヘラナデ (外)櫛歯12本 簾状文・波状文	〃(多)	〃	赤褐色	〃	
5	台付甕?		15.4		口縁部くの字に外開・端部で内弯・体部張る	(内)ヘラナデ (外)ナデ・櫛歯11本 簾状文7~8止・波状文	〃	〃	黒褐色	〃	
6	甕		19.4		〃 ・ 体部丸味	(内)ヘラナデ・櫛歯11本 3, 6~7止 回止 簾状文・波状文	〃	〃	〃	赤褐色	
7	甗		5.2		体部直に外開・底部1穿孔	(内)ヘラナデ (外)刷毛ナデ・ヘラナデ	〃	〃	黄褐色	灰褐色	
1	壺				体部大きく張る	(内・外)赤色塗彩・ヘラミガキ・ナデ	〃・石	〃	赤 色	赤 色	床
2	高坏		20.2		口縁部外反・口唇に山形突起4個	(〃) 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
3	〃		22.8		〃 ゆるく外反	(〃) 〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
4	〃		24.0		〃 大きく 〃	(〃) 〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	覆
5	〃	9.6	12.5	9.2	口縁部ゆるく内弯・脚部ゆるげ外反	(〃) 〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	床
6	〃			9.8	脚部ゆるく外反 〃	(〃) 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
第1号竪穴状遺構 (第49・51・52図)											
1	壺				口縁部外反	(内)ヘラナデ・赤色塗彩 (外)刷毛ナデ・ヘラナデ・櫛歯13本 T字状文	小砂	良好	赤 色	赤 色	覆
2	〃			10.0	底部やや張り出す	(内)刷毛ナデ (外)ヘラナデ・赤色塗彩	〃・雲母	〃	〃	黄褐色	
3	〃		16.2		口縁部短く外反・甕形	(内)ヘラナデ・赤色塗彩 (外) 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
4	甕		25.3		〃 ゆるく外反	(内)ヘラナデ・ヨコナデ (外)櫛歯8本 直線文・波状文	〃(多)	〃	赤褐色	灰褐色	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
5	台付 甕?		14.0		口縁部ゆるく外反・端部肥厚	(内) 刷毛ナデ・ヘラナデ (外) ヨコナデ・楕歯6本波状文 (内・外) ヘラナデ	小砂	良好	灰褐色	灰褐色	覆
6	〃			6.4			〃	〃	赤褐色	赤褐色	
7	〃			4.4		(〃) 〃	〃・雲母	〃	〃	〃	
8	〃			6.6		(〃) 〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
9	台付 甕?			9.6	脚部ゆるく外反	(内) ナデ (外) 刷毛ナデ・ヨコナデ	〃・〃	〃	〃	〃	
10	高坏		30.8		口唇部外反	(内・外)ヘラナデ・ヘラミガキ・赤色塗彩	〃	〃	赤 色	赤 色	
11	〃			10.9	脚部ゆるく外反・端部屈曲	(〃) 〃	〃	〃	〃	〃・茶褐色	
12	〃			14.0	〃 つよく外反	(内) ヘラミガキ・輪積成形痕 (外) 〃 ・赤色塗彩	〃	〃	〃	黄褐色	
13	〃					(内外) ヘラミガキ・赤色塗彩・刷毛ナデ	〃	〃	〃	赤色・黄褐色	
14	〃					(〃) 〃	〃・〃	〃	〃	〃・灰褐色	
15	〃					(〃) 〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
16	器台?				二重口縁	(〃) 〃	〃・〃	〃	〃	〃	
17	蓋				つまみ部凹む	(内) ヘラナデ (外) 指おさえ	〃・〃	〃	〃	〃	
18	甕			6.7	底部1穿孔	(内) ヘラナデ (外) 刷毛ナデ	〃	〃	灰褐色	〃	
1	坏			4.5	体部と底部の境は不明瞭	ロクロ成形・(回)糸切り	〃・〃	〃	青灰色	青灰色	
2	〃	3.5	13.0	6.5	口縁部直線的に開く	〃	〃	〃	白灰色	白灰色	
3	〃	4.0	13.0	6.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
4	〃			6.7	体部と底部との境は不明瞭	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	
5	〃	4.7	13.7	6.0	体部中央で屈曲	〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃	4.7	13.7	7.0	口縁部やや内弯	ロクロ成形・(回)糸切り	〃・〃	〃	白灰色	白灰色	

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 況
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
7	坏			7.0		ロクロ成形・(回)糸切り	小石・石	良好	青灰色	青灰色	覆
8	〃	4.0	14.3	6.5	体部内弯気味	〃 〃 〃 ・底部周縁ヘラケズリ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	4.3	13.0	6.8	〃	〃 〃 〃 〃 〃 ・ヘラナデ	〃 〃 〃	〃	暗褐色	暗褐色	〃
10	〃			5.0	体部と底部の境不明瞭	〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃	不良	黒灰色	黒灰色	〃
11	〃	4.5	13.0	6.1	体部直線的	〃 〃 〃 ・ヘラ状工具圧痕	〃 〃 〃	良好	青灰色	青灰色	〃
12	〃			5.0	〃 内弯気味	〃 〃 〃	〃 〃 〃	不良	白褐色	〃	〃
13	〃			6.8	底部片	〃 〃 〃 ・底部周縁ヘラナデ	〃 〃 〃	良好	白灰色	白灰色	〃
14	〃			7.5	〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
15	〃			6.0	〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
16	〃			7.3	〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	青灰色	青灰色	〃
1	〃	12.6	4.3	5.8	体部内弯気味	〃 ・底部ヘラ整形・内面黒色処理	〃 雲母	〃	赤褐色	黒 色	〃
2	〃	4.5	13.1	6.1	〃 直線的	〃 ・(回)糸切り・	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
3	〃	3.5	15.0	7.5	〃 内弯気味	〃 ・底部ヘラ整形・	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
4	〃			6.3	底部片・やや突出	〃 ・(回)糸切り・	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
5	〃			6.1	体部内弯気味	〃 ・底部ヘラ整形・	〃 〃 〃	不良	〃	〃	〃
6	高台付皿			5.7	付高台	底部糸切り・内外面黒色処理	〃 〃 〃	良好	黒 色	〃	〃
7	坏			7.0	体部内弯気味	ロクロ成形・底部ヘラ整形・内面黒色処理	〃 〃 〃	〃	黄褐色	〃	〃
8	蓋		15.0		口縁部嘴状・扁平疑宝珠つまみ	ロクロナデ・外面天井部ヘラケズリ	〃 〃 〃	〃	青灰色	青灰色	〃
9	高台付坏			8.6	付高台	ロクロ成形・糸切り・ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃
10	〃			9.3	〃	〃 ・ナデ	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状況
		器高	口径	底径					外面	内面	
11	壺			13.2	付高台	ロクロナデ・釉附着	小砂	良好	白灰色	白灰色	覆
12	甕			30.0	口縁部外反・肩部張る	〃 ・多面タタキ目	〃	〃	青灰色	青灰色	〃

第2号竪穴状遺構 (第53~55図)

1	壺				口縁部くの字状に外開・端部外反・体部張る	(内) 刷毛ナデ・ナデ (外) 〃 ・ 〃 ・ヨコナデ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆
2	〃				体部ゆるく張る	(内外)ヘラミガキ・赤色塗彩	〃(多)	不良	赤 色	赤 色	〃
3	〃?	8.6			口縁部直立し端部内弯	(〃) 〃 ・ 〃	〃	良好	〃	〃	〃
4	〃		5.4			(〃) 〃 ・ 〃	〃(〃)	〃	〃	〃	〃
5	鉢		5.3			(〃) 〃 ・ 〃	〃(〃)	不良	〃	〃	〃
6	甕		6.4		底部やや張り出す	(内) ヘラナデ (外) 刷毛ナデ・ヘラナデ	〃	良好	暗褐色	黄褐色	〃
7	甕		4.8		底部1穿孔	(内) 刷毛ナデ・ナデ (外) 〃 ・ヘラケズリ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
8	台付甕					(内) ヘラナデ (外) 〃 ・ナデ	〃(少)	〃	茶褐色	茶褐色	〃
9	〃					(内) ナデ (外) 櫛描波状文・ヘラナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
10	高坏				口縁部大きく外反・有段	(内外)ヘラミガキ・赤色塗彩	〃	〃	赤 色	赤 色	〃
11	〃		11.5		脚部外反	(内) ナデ (外) 刷毛ナデ・ヘラナデ・赤色塗彩	〃	〃	〃	赤褐色	〃
12	〃				〃 外開	(内外)ヘラミガキ・ヨコナデ・赤色塗彩	〃(〃)	〃	〃	赤 色	〃
1	坏	3.8	13.7	7.8	口縁端部外反	ロクロ成形・(回)糸切り	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
2	〃	3.6	13.2	6.3	体部直線的	〃 ・ 〃	〃	〃	白灰色	白灰色	〃
3	〃	4.5	12.5	5.8	体部下方丸味・口縁部直線的	〃 ・ 〃	〃・石	〃	〃	〃	〃
4	〃	4.5	13.8	7.0	〃 内弯気味	〃 ・ 〃 ・底部周縁ヘラナデ	〃	〃	暗褐色	暗褐色	〃
5	〃	4.0	12.5	6.2	〃 直線的	〃 ・ 〃	〃	〃	白灰色	白灰色	〃

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
6	坏	4.5	13.0	5.8	体部直線的	ロクロ成形・(回)糸切り	小砂・石	良好	緑灰色	緑灰色	覆
7	〃	4.3	13.0	6.8	〃 〃	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	〃	白灰色	白灰色	
8	〃	3.8	13.1	6.0	〃 〃	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
9	〃	4.5	13.5	5.7	〃 〃	〃 ・ 〃	〃	不良	〃	〃	
10	〃	3.7	13.6	7.4	〃 〃	〃 ・ 〃	〃	良好	〃	〃	
11	〃			6.3		〃 ・ 底部ヘラナデ	〃	〃	〃	〃	
12	高台付坏			6.6	付高台	〃 ・ (回)糸切り	〃 ・ 〃	不良	〃	〃	
13	坏			5.8	体部内弯気味	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	〃	暗灰色	暗灰色	
14	〃			5.8	〃	〃 ・ 〃	〃	良好	白灰色	白灰色	
15	〃			5.4	〃 直線的・平底	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
16	〃			5.8	〃 〃	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
17	〃			5.8		〃 ・ 〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	
18	〃			5.8		〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	〃	青灰色	青灰色	
19	〃			6.1	体部内弯気味	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	
20	〃			6.0		〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	
21	〃			6.5	〃	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	〃	白灰色	白灰色	
22	〃			5.4	〃	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	不良	黒灰色	暗灰色	
23	〃			6.7	〃	〃 ・ 〃	〃	良好	青灰色	青灰色	
24	〃			6.3	〃 ・ 直線的	〃 ・ 〃	〃	〃	白灰色	白灰色	
1	〃	3.8	12.9	5.6	〃 ・ 内弯気味	〃 ・ 〃 ・ 内面黒色処理	〃 ・ 雲母	〃	赤褐色	黒 色	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
2	坏	4.0	12.2	6.0	体部内弯気味	ロクロ成形・(回)糸切り・ヘラ整形・内面黒色処理	小砂・雲母	良好	赤褐色	黒 色	覆
3	〃	4.7	14.4	6.0	〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃	不良	〃	〃	〃
4	〃	5.3	14.1	5.8	〃 〃 ・端部外反	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	良好	〃	〃	〃
5	〃	4.0	11.9	5.4	〃直線的	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
6	〃			5.8	底部片	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	4.9	15.0	5.8	体部内弯気味	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	5.0	12.8	6.0	〃	〃 ・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	4.3	11.8	5.8	〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	4.3	11.8	5.7	〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
11	〃			6.8	〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃〃〃	〃	黄褐色	〃	〃
12	高台付盤			6.1	付高台	〃 〃 糸切り・ 〃	〃〃〃	〃	黒 色	〃	〃
13	〃坏?			7.5	〃	〃 ・ヘラケズリ・ 〃	〃〃〃	〃	赤褐色	〃	〃
14	〃壺			9.0	〃 ・体部へ丸味	ロクロナデ・ 〃	〃・石	〃	暗褐色	暗灰色	〃
15	〃〃			9.0	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃〃〃	〃	〃	〃	〃
16	〃坏	6.5	12.0	18.9	〃 ・体部直線的	ロクロ成形・ 〃	〃〃〃	〃	白灰色	白灰色	〃

第3号竪穴状遺構 (第56図)

15	坏	4.9	13.3	5.0	体部内弯気味・端部外反	ロクロ成形・(回)糸切り・内面黒色処理	小砂・雲母	〃	赤褐色	黒 色	〃
16	〃	3.7	11.6	5.0	〃	〃 〃 〃	〃	〃	白灰色	白灰色	〃
17	〃			6.8	底部上げ底	〃 〃 〃	〃・石	〃	暗灰色	暗灰色	〃
18	〃	3.2	13.0	5.3	体部内弯気味	〃 〃 〃	〃〃〃	不良	緑灰色	緑灰色	〃

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
19	坏			8.5	丸底	ロクロ成形?・手持ヘラ整形	小砂・石	良好	青灰色	青灰色	覆

井戸址1 (第58・59)

1	壺			7.5	底部やや張り出す	(内) 刷毛ナデ・ナデ (外) ヘラナデ	小砂(多)	良好	赤褐色	暗褐色	覆
2	◇			5.9		(内) 刷毛ナデ・ヘラナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	◇	◇	赤 色	黄褐色	◇
3	◇			10.6		(内) ナデ (外) ヘラナデ	◇・(◇)	◇	赤褐色	赤褐色	◇
4	甕			8.0		(内) ナデ (外) ヘラナデ	◇・雲母	◇	黄褐色	黄褐色	◇
5	甕			4.7	底部穿孔大1・小4?	(内・外) ヘラナデ	◇	◇	灰褐色	黒褐色	◇
6	高坏					(内) ヘラミガキ (外) ◇・赤色塗彩	◇・(多)	◇	赤 色	赤色・ 黒褐色	◇
1	坏			7.3		ロクロ成形・(回)ヘラ切り?	◇・石	◇	青灰色	青灰色	◇
2	◇			6.5	体部内弯気味	◇・(回)糸切り	◇	◇	白灰色	白灰色	◇
3	◇			6.8	◇	◇	◇・◇	◇	暗灰色	暗灰色	◇
4	◇	4.0	12.7	5.3	◇・端部外反	◇	◇	◇	白灰色	白灰色	◇
5	◇			6.0		◇	◇	◇	灰 色	灰 色	◇
6	◇			5.5	体部直線的	◇	◇	◇	◇	◇	◇
7	◇	3.3	12.6	6.7	◇内弯気味	◇	◇	◇	青灰色	青灰色	◇
8	◇			6.2		◇	◇	◇	白灰色	白灰色	◇
9	高台付坏			5.7	付高台	◇・ヘラケズリ・内外面黒色処理	◇	◇	黒 色	黒 色	◇
10	◇			7.3	◇	◇	◇	◇	暗灰色	暗灰色	◇
11	◇			10.0	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇
12	◇			11.0	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	

井戸址 2 (第58・59図)

7	甕		24.2		口縁部ゆるく外反	(内) 刷毛ナデ・ヘラナデ (外) 櫛描波状文・縹状文	小砂・雲母	不良	暗褐色	暗褐色	覆
13	坏	4.0	12.0	5.1	体部内弯気味・端部外反	ロクロ成形・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃・〃	〃	赤褐色	黒色	〃
14	〃			5.8		〃 ・ (回) 糸切り・ 〃	〃・〃	〃	黄褐色	〃	〃
15	〃			5.8	〃	〃 ・ ヘラケズリ・ 〃	〃・〃	良好	赤褐色	〃	〃
16	蓋				扁平擬宝珠つまみ	ロクロ整形	〃・〃	〃	白灰色	白灰色	〃
17	高台付坏			8.0	付高台	ロクロ成形・ヘラケズリ・ 〃	〃・〃	〃	黄褐色	黒色	〃
18	〃			6.0	〃	〃 ・ (回) 糸切り・ 〃 ヘラナデ・内外面黒色処理	〃・〃	〃	黒色	〃	〃

井戸址 3 (第46図)

7	甕		21.8		口縁部ゆるく外反・端部内弯・体部丸味	(内) 刷毛ナデ・ヘラナデ (外) 〃 ・ 櫛歯 9本7~8止波状文	小砂(多)	良好	茶褐色	赤褐色	覆
---	---	--	------	--	--------------------	---------------------------------------	-------	----	-----	-----	---

建物址 (第62・64・65図)

1	甕		19.2		口縁部ゆるく外反・端部内弯	(内) ヘラナデ (外) 刷毛ナデ・櫛歯6本2回止縹状文・波状文	小砂(多)	不良	赤褐色	黒褐色	攪乱
2	〃			10.6		(内) ナデ (外) 〃 ・ 指おさえ	〃・石(多)	〃	黒褐色	赤褐色	〃
3	〃			7.2		(内) ヘラナデ (外) ナデ	〃(多)	良好	〃	〃	〃
4	〃			5.8		(内) 刷毛ナデ (外) ナデ	〃(〃)	不良	茶褐色	茶褐色	〃
5	〃			7.0		(内) ヘラナデ (外) 〃	〃	良好	赤褐色	赤褐色	〃
6	壺		21.8			(内) ヘラナデ (外) 〃 ・ 刷毛ナデ	〃(〃)	〃	黄褐色	黄褐色	〃
7	〃?					(内) ヘラナデ (外) 〃 ・ 刷毛ナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
8	蓋					(外) ヨコナデ・ナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
9	〃				つまみ部1穿孔	(外) ヘラナデ	小砂(少)	良好	赤褐色	赤褐色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
10	甌			5.4	底部1穿孔	(内) ヘラナデ (外) ♪	小砂・石	良好	黒褐色	茶褐色	攪乱
11	壺		12.8		口縁部ゆるく外反	(内) ナデ (外) ヘラナデ	♪	♪	赤褐色	赤褐色	♪
12	S字甕		10.2		♪ S字状	(内) 刷毛ナデ (外) ♪・ヘラナデ・赤色塗彩	♪	♪	赤 色	♪	♪
13	罎				♪ 内弯	(内) ナデ (外) ♪・刷毛ナデ	♪ (少)	♪	♪	黒 色	♪
14	台付甕					(内外) ヘラナデ	♪	♪	赤褐色	赤褐色	♪
15	♪			9.6	端部ゆるく外反	(内) 刷毛ナデ・ナデ (外) ♪・ヘラナデ	♪	♪	黄褐色	黄褐色	♪
16	高坏				脚部大きく外反・2孔一対穿孔	(内) ヨコナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	♪ (少)	♪	赤 色	赤褐色	♪
1	坏	3.5	13.2	6.7	口縁部やや外反	ロクロ成形・(回)糸切り	♪ (多)	良好	青灰色	青灰色	♪
2	♪	3.9	12.9	6.0	体部内弯気味	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪	♪	♪
3	♪	3.5	12.6	6.2	♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	白灰色	白灰色	♪
4	♪	3.8	12.5	5.0	♪ 直線的	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪	♪	♪
5	♪			6.5	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	暗灰色	暗灰色	♪
6	♪			7.0	♪ ♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	♪	♪	♪
7	♪			6.0	底部と体部の境は不明瞭	♪ ♪ ♪ 底部周縁 ヘラナデ	♪	♪	白灰色	白灰色	♪
8	♪			7.0	体部直線的	♪ ♪ ♪	♪	♪	緑灰色	緑灰色	♪
9	♪			5.8	♪	♪ ♪ ♪	♪	♪	青灰色	青灰色	♪
10	♪			5.2	体部内弯気味・体部と底部の境不明瞭	♪ ♪ ♪ ♪ ♪	♪	♪	茶褐色	茶褐色	♪
11	♪			8.5	♪	♪ ♪ ♪ ♪ ♪	♪	♪	青灰色	青灰色	♪
12	♪			5.0	♪	♪ ♪ ♪	♪	不良	白灰色	白灰色	♪
13	♪			5.5	♪	♪ ♪ ♪	♪	良好	暗灰色	青灰色	♪

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態				
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面					
14	坏	4.8	12.5	6.0	体部内弯気味・体部と底部の境不明瞭	ロクロ成形・(回)糸切り	小砂	良好	緑灰色	緑灰色	攪乱層				
15	〃			6.2		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			
16	〃			6.4		〃	〃	〃	〃	〃	白灰色	白灰色	〃		
17	〃			5.8		〃	〃	〃	〃	〃	緑灰色	緑灰色	〃		
18	〃			7.0		〃	体部直線的	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃		
19	〃			5.8		〃	〃内弯気味	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
20	〃			6.5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
21	〃			6.4		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
22	〃			5.0		〃	丸底気味	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
23	〃			6.6		〃	〃	〃	〃	〃	〃	白灰色	白灰色	〃	
24	〃			6.2		〃	体部直線的	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
25	高台付盤			4.8		12.5	9.5	付高台	〃	〃	〃	緑灰色	緑灰色	〃	
1	坏						5.5	体部内弯気味	〃	・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃・石	〃	黒褐色	黒 色	〃
2	高台付坏						6.3	付高台	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃
3	〃						6.8	体部内弯気味	〃	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
4	坏						5.0	丸底気味	ロクロ成形・ヘラケズリ	小砂	〃	〃	赤灰色	白灰色	覆 土
5	高台付坏						6.0	付高台	〃	・(回)糸切り外縁ナデ・内面黒色処理	〃・雲母	不良	黒褐色	黒 色	〃
6	〃						7.3	〃	〃	・ヘラケズリ	〃	良好	緑灰色	緑灰色	〃
7	坏						5.0	丸底気味	〃	〃	〃	〃	暗灰色	赤褐色	〃
8	高台付坏			6.2		付高台	〃	〃	〃	〃	赤褐色	黒 色	〃		

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状		
		器高	口径	底径					外面	内面			
9	高台付坏	8.5		9.5	付高台	ロクロ成形・ヘラケズリ	小砂	良好	青灰色	青灰色	覆		
10	蓋						扁平擬宝珠形つまみ	〃	〃	〃	〃	〃	
11	高台付坏					7.0	付高台	〃	〃	暗黒色	暗褐色	〃	
12	〃					9.5	〃	〃	〃	暗褐色	〃	〃	
13	蓋						扁平擬宝珠形つまみ	〃	〃	緑灰色	青灰色	〃	
14	〃						〃	〃	〃	青灰色	〃	〃	
15	高台付坏					9.5	付高台	〃	〃	〃	〃	〃	
16	高坏					10.0	体部内弯気味・裾部外開	〃	〃	黄褐色	黒色	〃	
17	把手						半環形	手こね・自然釉	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
18	壺					23.0	肩部最大径	ロクロナデ	〃	〃	白灰色	白灰色	〃
19	坏					9.5	体部内弯気味	〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃

土坑41 (第70図)

1	坏	4.0	13.0	6.0	体部内弯気味	ロクロ成形・(回)糸切り	小砂	良好	白灰色	白灰色	覆
2	高台付坏			6.5	付高台	〃	〃	〃	黒色	黒色	〃
3	坏	4.0	13.0	6.5	体部内弯気味	〃	小砂・雲母	〃	赤褐色	〃	〃

土坑42 (第70図)

4	坏			5.6		ロクロ成形・(回)糸切り	小砂	良好	白灰色	白灰色	覆
---	---	--	--	-----	--	--------------	----	----	-----	-----	---

土坑43 (第58・70図)

8	高坏			14.0	脚部外反	(内) 刷毛ナデ・ヨコナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	小砂・雲母	良好	赤色	赤褐色	覆
5	坏	3.5	12.5	7.3	体部直線的	ロクロ成形・(回)糸切り	小砂	〃	青灰色	青灰色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
6	高坏				坏部接合部5mm1孔	ロクロナデ・脚部内部しぼり目	小砂	良好	白灰色	暗灰色	覆土

I トレンチ (第66図)

1	甕		21.2		口縁部ゆるく外反・端部外反・卵形	(内) ヘラナデ (外) 刷毛ナデ・楕歯8本5~6止波状文	小砂	良好	暗褐色	黄褐色	覆土
2	〃		21.0		〃 外反・最大径	(内) ヘラナデ (外) 楕歯12本2止簾状文・波状文	〃・石	〃	茶褐色	茶褐色	〃
3	〃			6.4	平底	(内) ヘラナデ (外) 楕歯8本波状文・体部下半ヘラナデ	〃(多)	〃	〃	〃	〃
4	〃			6.8	〃 上底气味	(内・外) ヘラナデ	〃(〃)	〃	〃	〃	〃
5	〃			7.7	〃	(〃) 〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃			6.0	〃	(〃) 〃	〃・雲母	〃	〃	〃	〃
7	壺			9.0	〃	(内) ナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	〃・〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
8	〃			8.2	〃	(内) ナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	〃	〃	〃	〃	〃
9	台付甕		16.1		口縁部直立気味・端部外反	(内) ヘラナデ・ヨコナデ (外) 楕歯12本1回止簾状文・波状文	〃・〃	〃	暗褐色	暗褐色	〃
10	〃			13.0	台部外反	(内) 刷毛ナデ・ヨコナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃

III トレンチ (第67図)

1	壺				球形?	(内) ヘラナデ (外) 刷毛ナデ・ヘラナデ	小砂	良好	灰褐色	黄褐色	覆土
2	〃			5.5	平底	(内) ナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
3	台付甕			8.0	台部ゆるく外開	(内) 刷毛ナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	茶褐色	茶褐色	〃
4	高坏			14.0	脚部外反	(内) ナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃

IV トレンチ (第67図)

5	甕			10.4	平底	(内・外) ナデ	小砂	良好	暗褐色	赤褐色	覆土
6	壺			9.3	〃	(内) ヘラナデ (外) 〃	小砂(少)	〃	黄褐色	黄褐色	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
7	高杯?			12.8	脚部ゆるく外反・4穿孔	(内) 刷毛ナデ・ヨコナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	〃石莖	良好	赤 色	赤褐色	覆
8	〃				〃 直立気味外反	(内) ヘラナデ (外) 〃・ナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
9	〃?			13.8	〃 外反・穿孔	(内) ヨコナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	〃	〃	

Vトレンチ (第67図)

10	器台			6.7	平底	(内) ヘラナデ (外) 〃	小砂 ・雲母	良好	黄褐色	黄褐色	覆
----	----	--	--	-----	----	-------------------	-----------	----	-----	-----	---

包含層 (グリット・その他) (第73・62・74・75図)

1	高杯				脚部外反	(内) ナデ (外) ヘラナデ・赤色塗彩	小砂 ・雲母	良好	黄褐色	赤 色	包
2	器台				〃 直立気味外反・穿孔3	(内) ヘラナデ (外) 〃・赤色塗彩	〃(少)	〃	赤褐色	〃	
3	壺				口縁部直立気味	(内) ヘラナデ (外) 櫛歯7本歯簾状文・10本歯T字状文	〃	〃	暗褐色	暗褐色	
4	甕			8.2	体部内弯	(内) 刷毛ナデ (外) ヘラナデ	〃	〃	〃	〃	
5	〃			6.9	底部片	(内) ナデ (外) 櫛歯12本波状文	〃	〃	〃	〃	
6	小形壺	12.0	10.4	5.0	口縁部外反・最大径体部中央	(内) 刷毛ナデ (外) ヘラナデ・ナデ	〃	〃	黒褐色	褐色	
7	甕			7.5	肩部最大径	(内) 刷毛ナデ (外) 櫛歯10本2回止簾状文・波状文	〃	〃	茶褐色	黄褐色	
8	〃			6.6		(内) ヘラナデ・刷毛ナデ (外) 10本波状文	〃雲母	〃	〃	茶褐色	
9	壺			6.2		(外) ヘラナデ・赤色塗彩	〃	〃	赤 色	〃	
10	台付甕			12.8	口縁部ゆるく外反・端面取り	(内) ヘラナデ・刷毛ナデ (外) 9本2回止簾状文・波状文・ナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	
17	甕			6.4	底部ややはり出す	(内) ナデ (外) ヘラナデ	〃(多)	〃	〃	〃	
18	壺			6.8	体部上半最大径・卵形	(内) 口縁部赤色塗彩・刷毛ナデ (外) 13本T字状文・赤色塗彩	〃	不良	赤 色	赤色・ 黄褐色	
1	坏			5.2	坏部内弯気味	ロクロ成形	〃	良好	白灰色	白灰色	
2	〃			6.0	〃	〃 (回)糸切り	〃	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
3	蓋				扁平擬宝珠形つまみ	ロクロナデ	小砂	良好	暗灰色	暗灰色	包含
4	環	3.3	15.7	6.0	体部直線的	ロクロ成形・(回)糸切り	〃	〃	白灰色	白灰色	〃
5	高台付環	3.7	12.8	9.3	付高台・体部直線的	〃 ・ヘラケズリ	〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
6	〃	3.7	11.7	8.8	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃 ?	〃・石	〃	〃	〃	〃
7	蓋			14.0	口縁部嚙状	〃 ・ 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
8	環			5.7		〃 ・ 〃 ・ 内面黒色処理	〃	〃	赤褐色	黒 色	〃
9	〃			6.5	体部内弯気味	〃 ・ 〃	〃	〃	白灰色	灰 色	〃
10	〃			7.3		〃 ・ 〃	〃・〃	不良	灰 色	〃	〃
11	〃			5.7	体部直線的	〃 ・ 〃	〃・〃	良好	緑灰色	緑灰色	〃
12	〃		14.3		〃 内弯気味	〃 ・ 〃	〃	〃	赤褐色	黒 色	〃
13	高台付皿		12.0	5.0	〃 直線的・端部肥厚・台部欠損	〃 ・ 〃 ・ 内外面黒色処理	〃	〃	黒	〃	〃
14	環			6.8	〃 〃	〃 ・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃	〃	赤褐色	〃	〃
15	高台付環			6.0	付高台	〃 ・(回)糸切り・周縁ナデ・内面黒色処理	小砂・雲母	〃	黒 色	〃	〃
16	環			6.0	底部突出	〃 ・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃・〃	〃	赤褐色	〃	〃
17	〃	4.4	18.7	9.2	体部内弯気味	〃 ・ 〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃
18	〃			5.8		〃 ・(回)糸切り・ヘラケズリ・黒色処理	〃・〃	〃	〃	〃	〃
19	〃	4.8	18.0	7.0	〃	〃 ・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃・〃	〃	〃	〃	〃
20	〃			6.0		〃 ・ 〃	〃・〃	〃	黄褐色	〃	〃
21	〃			5.5		〃 ・ 〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃
1	〃			6.4	〃	〃 ・(回)糸切り・ 〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
2	坏	4.3	12.0	5.3	体部直線的	ロクロ成形・(回)糸切り・内外面黒色処理	小砂・雲母	不良	黒 色	黒 色	包
3	〃			6.0	体部内弯気味	ロクロ成形・ヘラケズリ・内面黒色処理	〃・〃	良好	黄褐色	黒 色	
4	〃		12.2		〃 直線的	〃	〃	〃	白灰色	白灰色	
5	〃	4.5	11.5	4.8	〃 〃	〃 ・(回)糸切り	〃	〃	〃	〃	
6	〃	4.0	13.1	6.0	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	
7	〃	4.2	13.3	5.0	〃 内弯気味	〃	〃	〃	〃	〃	
8	〃	4.2	13.2	5.3	〃 直線的	〃	〃	〃	〃	〃	
9	〃	4.0	12.6	4.9	〃 内弯気味	〃	〃	〃	黒灰色	黒灰色	
10	〃	4.2	13.2	5.5	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	
11	甕		23.7		口縁部外反	(内) ナデ (外) タタキ目	〃	〃	赤褐色	赤褐色	

石器・土製品 (第75図)

12	敲打器	16.2	5.9	3.5	西洋梨形	両端に微漬状	硬砂岩		青暗色		覆
13	〃	18.4	6.0	3.5	〃	〃	〃	〃			
14	紡錘車	6.6		0.7	円形・1孔径 0.9cm	磨製	頁岩		明褐色		床
15	土錘	4.5	1.0		紡錘形・1孔径 0.5cm	両端面取り	土製	良好	黒褐色		覆
16	円板	4.3	4.0	0.6	周縁打ちかいたまま	土器片利用	〃	〃	赤 色	赤 色	

第5表 出土土器拓影一覧表

遺物番号	器種	部位	手法上の特徴	遺物番号	器種	部位	手法上の特徴	遺物番号	器種	部位	手法上の特徴
第16号住居址 (第47図)				20	甕	体部	波状交 (楕歯4本)	9	甕	頸部	横線文 (太)・波状
1	壺	頸・体部	8本横線文上→下現存2本縦線文	21	〃	〃	〃 (〃 4~5本上→下)	10	〃	〃	簾状文 〃 〃
2	〃	頸部	12本2条 〃 〃 1条	22	〃	〃	〃 (〃 7~8本 〃)	11	〃	口縁部	波状文
3	〃	〃	〃 〃 文様外内面赤色塗彩	23	〃	〃	〃 (〃 8本 〃)	12	〃	口・頸部	〃 (2回止)
4	〃	頸・体部	太めの楕 (?) 4本歯	24	〃	〃	〃 (〃 6本以上 〃)	13	〃	〃	〃・簾状文
5	S字状甕	肩部	刷毛整形	25	〃	〃	〃 (〃 7本 〃)	14	〃	〃	〃
第17号住居址 (第47図)				26	〃	〃	〃 (〃 6本 〃)	15	〃	〃	刷毛ナデ→10本簾状
6	壺	体部上半	T字状文・単位不明	27	〃	〃	〃 (〃 3本 〃)	16	〃	頸・体部	波状文・簾状文
7	〃	〃	〃 文様下赤色塗彩	28	〃	〃	〃	17	〃	口縁部	〃 8~9本歯
8	甕	体部	3本斜行条痕	29	〃	〃	〃 (〃 3本 〃)	18	〃	頸・体部	〃 10本
9	〃	口縁部	3~4本波状文	30	〃	〃	〃 (〃 5本 〃)	第2号竪穴状遺構 (第50図)			
10	〃	〃	振巾の小さい波状文・単位不明	31	〃	〃	〃 (〃 4~5本)	19	壺	頸部	T字状文・赤色塗彩
11	〃	頸部	8本3回止波状文・簾状文	第1号竪穴状遺構 (第50図)				20	〃	〃	〃 〃
12	〃	〃	9本波状文	1	壺	頸部	4本の太めの直線文	21	〃	〃	〃 (3条上→下)
13	〃	〃	波状文	2	〃	〃	10本T字状文	22	〃	〃	〃 〃
14	〃	〃	8本 (?) 2回止簾状文	3	〃	〃	T字状文	23	〃	〃	〃
15	〃	体部上半	6本簾状文・波状文	4	〃	〃	横線文・刺突文	24	〃	〃	〃 (12本上→下)
16	〃	〃	波状文	5	〃	〃	9本T字状文	25	〃	〃	〃 〃
17	〃	頸部	〃	6	〃	〃	7~8本T字状文上→下	26	甕	口縁部	7本波状文・刷毛ナ
18	〃	〃	〃 (楕歯9本以上)	7	〃	〃	9本T字状文	27	〃	〃	波状文2条
19	〃	〃	〃	8	〃	〃	T字状文・区画文・赤色塗彩	28	〃	〃	〃 5条上→下

遺物番号	器種	部位	手法上の特徴	遺物番号	器種	部位	手法上の特徴	遺物番号	器種	部位	手法上の特徴
29	甕	口縁部	波状文2条	4	壺	頸部	横線文→刺突文	10	甕	体部	波状文
30	〃	〃	〃	5	甕	口縁部	波状文	11	壺	頸部	横線文・区画文・赤
31	〃	〃	〃 (乱雑)	6	〃	〃	6本? 波状文上→下	12	甕	〃	簾状文・波状文上→
32	〃	〃	波状文	7	〃	〃	6~7本? 波状文	13	〃	〃	2回止簾状文・波状
33	〃	〃	8本波状文	8	甕	頸部	10本2回止簾状文→波状文	14	甕	頸部	3回止簾状文・9本
第2号竪穴状遺構 (第53図)				9	〃	〃	8本 〃 → 〃	15	〃	体部	刷毛ナデ・波状文
1	甕	体部	4本斜行文	10	〃	〃	7本簾状文・波状文	16	〃	口縁部	6本簾状文・波状文
2	〃	〃	斜行条線文→8本波状文	11	〃	〃	簾状文→5本波状文上→下	17	〃	〃	刷毛ナデ・口唇部突
3	〃	〃	2~3本波状文	12	〃	〃	10本2回止簾状文→波状文	18	〃	頸部	〃
4	〃	頸・体部	12本波状文→2回止簾状文	13	壺	〃	横線文→刺突文	19	〃	体部	〃
5	〃	〃	4本? 波状文	14	甕	口縁部	波状文	土壇40 (第71図)			
6	〃	頸部	10本1回止波状文	建物址 (第63図)				1	甕	体部	5本斜格子文
7	〃	〃	簾状文・波状文	1	壺	頸部	T字状文	2	〃	〃	波状文
8	〃	頸・体部	8本? 簾状文→波状文	2	〃	〃	10本T字状文・赤色塗彩	土壇41 (第71図)			
9	〃	頸部	簾状文・波状文	3	〃	〃	T字状文?	3	壺	頸部	T字状文
10	〃	〃	横・縦刷毛ナデ	4	〃	〃	横線文→刺突文	4	甕	口縁部	6~7本波状文
11	〃	口・頸部	波状文→簾状文	5	甕	口縁部	14本横線文→刺突文	土壇42 (第71図)			
第3号竪穴状遺構 (第56図)				6	〃	〃	5〃波状文・簾状文	5	甕	口縁部	波状文
1	壺	頸部	3条T字状文・横線文上→下	7	〃	〃	8〃簾状文上→下	6	〃	頸・体部	簾状文・9本? 波状
2	〃	〃	8本T字文・3条横線文	8	〃	〃	波状文	7	〃	〃	9本? 波状文
3	〃	〃	〃	9	〃	体部	9本波状文上→下				

遺物 番号	器種	部 位	手 法 上 の 特 徴	遺物 番号	器種	部 位	手 法 上 の 特 徴	遺物 番号	器種	部 位	手 法 上
I トレンチ (第68図)				V トレンチ (第68図)				14	壺	口縁部	14本波状文上→下
1	壺	頸 部	T字状文?	18	壺	頸 部	横線文・内面赤色塗彩	15	〃	頸 部	簾状文・波状文
III トレンチ (第68図)				19	〃	〃	T字状文	16	〃	体 部	波状文
2	壺	頸・体部	横線文・赤色塗彩	20	〃	〃	〃	17	〃	〃	10本波状文上→下
3	〃	頸 部	T字状文・ 〃	21	〃	〃	横線文				
4	〃	〃	横線文→ヘラで縦線	22	壺	体 部	刷毛ナデ?・波状文				
5	〃	〃	T字状文・内外面赤色塗彩	23	〃	〃	簾状文・14本波状文上→下				
6	壺	口縁部	刷毛ナデ→波状文	包含層 (グリット・その他) (第72図)							
7	〃	口体部	簾状文?・波状文	1	壺	胴 部	窠描山形文? b-23				
8	〃	頸 部	3回止簾状文→波状文	2	壺	口縁部	波状文 〃				
9	〃	〃	9~10本3回止簾状文→波状文	3	〃	頸・体部	9本2回止簾状文・波状文・ 〃				
10	〃	〃	8本?1回止簾状文→ 〃	4	〃	体 部	6本波状文上→下 〃				
11	〃	〃	7本?簾状文・波状文	5	〃	口縁部	波状文 c-2				
12	〃	〃	簾状文・9本?波状上→下	6	〃	頸・体部	12本3回止簾状文 〃				
IV トレンチ (第68図)				7	〃	〃	刷毛ナデ→10本簾状文・波状文・ 〃				
13	壺	頸 部	刷毛ナデ→横線文・赤色塗彩	8	〃	体 部	10本波状文上→下 〃				
14	〃	〃	横線文	9	〃	頸 部	簾状文 〃				
15	〃	〃	T字状文・内外面赤色塗彩	10	〃	体 部	〃・5本波状文 d-3・4				
16	壺	〃	簾状文	11	壺	頸 部	T字状文 〃				
17	〃	体部下半	波状文現存3条上→下	12	壺	体 部	波状文上→下 〃				
				13	壺	口縁部	T字状文				

第4章 清野保育園地点の調査

第1節 発掘調査の経過

1 経過

清野小学校プール地点が事前に発掘調査を必要とするとの問題が起き上がってきたころ、すぐ隣に保育園をつくるという計画が当市家庭児童課よりもたらされ、調査を必要とするか否かとの照会があった。ここも前述のとおり四ツ屋遺跡の範囲内であり、西側遺構群に含まれる地域と想定されるので、工事着工前に埋蔵文化財保護のため発掘調査をする必要があり、その準備をお願いしたい旨回答した。この地は小学校の旧プール敷地も保育園建設予定地に入っていたため、新プールの使用開始まで、整地することがなかったので、調査開始まで若干の余裕があったし、塩崎小学校第3次調査終了後その残務整理を終えた時点から調査にかかるとにした。しかし塩崎小学校第3次調査員のうち主力となった信大学生が教育実習期間にかかり、調査団の編成もままならなかった。これも今年度中に開園という条件付であったので、編成不備のまま6月25日から7月14日の予定で調査にかかるとにした。調査面積は既に破壊をうけている旧プール跡を除いて約1000㎡を対象にした。作業員については、清野小学校プールの経験があったので、岩野・清野区長及び清野保育園建設期成同盟会の役員の方々をお願いした。調査は調査対象地のほぼ全面の覆土を徹去し、遺構面を露呈することから開始することにした。尚撤去排土は小学校の好意により校庭の隅に盛土にして置かせていただいた。また調査により出る廃土は周辺がプール及び私有地であったので小型ダンプヘベルトコンベヤーによって積載し、それを集積場へ運搬する方法をとった。

2 調査日誌

6月20～24日 清野保育園建設地のうち、既に破壊を受けている清野小学校旧プール敷地を除き、重機とトラックによる遺構上面までの表土等を除去する。

6月25日（曇） 重機等による表土等除去を続ける。本日より人力による調査を開始する。調査地内の中央に使用中の畑灌漑用コンクリート管があり、これにより、北側をA地区、南側をB地区と便宜上分け、A地区より残土処理を行う。東端付近より、3体分の人骨を発見した。他自然堤防を横断する溝状遺構がある模様。平安時代に比定される土器が多く出土した。

6月26日（晴） 昨日発見した溝状遺構のプラン追求と東端にある第18・19号住居址の検出作業を行う。尚遺構番号は前の調査に続き東から発見順に付した。

6月27日（晴） 第18号住居址の精査及び白褐色の砂で埋まった溝址15・17・18・19号溝址の調査にかかる。

6月27日（晴） 昨日に引き続き溝址の調査を行う。第20号住居址のプラン追求後、掘り下げを行う。第1号住居址の実測・写真撮影を完了し、東西・南北軸に基準杭を設置する。基準杭は東端をAとし西へアルファベットを北よりアラビア数字を付して呼称することにした。

6月28日（曇） 第20号住居址・溝址の精査及び第19号住居址の調査にかかる。土塚墓2～4の調査を行う。第2・4号は成人で、第3号は子供であろう。副葬品はない。B地区の残土処理を行う。

6月29日（雨） 降雨にて作業を中止する。

6月30日（曇時々雨） 条件は良くなかったが、調査期間を勘案し、B地区の遺構プランの追求を行う。B地区の東半分は鉄分を多く含んだ溶脱層で、隅丸方形のピットが散在し、西端付近には平安時代と推定される住居址がある模様である。

7月1日（雨） 大雨洪水注意報がだされ、降雨激しく、作業を中止する。

7月2日（曇のち晴） B地区の遺構プラン追求を実施した後、東側より検出する。第23号住居址・溝址の追求と掘り下げを土塚墓の手前まで行う。第19号住居址・溝址15の実測作業をする。溝址全体の清掃と写真撮影を行う。

7月3日（晴） 第20号住居址の精査及び土塚44・45、溝址16の調査にかかる。溝址17～19の実測作業を行い、終了後先に設置した基準杭よりA地区にグリットを配し、弥生時代遺構を求め、約30cm程掘り下げる。

7月4日（晴） 第21・24号住居址のプラン追求後調査にかかる一方、調査地中央の焼土に伴う遺構（第26号住居址）プランを追求したところこの面はすでに床面が露呈しており、新たに第27・31号住居址のプランが確認された。B地区土塚群・溝址のプランを追求する。

7月5日（晴） 新たに第30・31号住居址の調査にかかる。またB地区南から溝址・土塚の掘り下げを開始する。第21号住居址カマド中より形象埴輪と思われる破片が出土して注目された。第21～24号住居址を完掘し、写真撮影後実測作業を行う。本日信大医学部西沢技官が来訪し、土塚墓鑑定後、人骨を持帰る。成人二体は大軀の成人のものであるという。

7月6日（晴） 第30号住居址に土器集中地があるためていねいに調査をすすめる。B区は順次調査を進める。新たに第28号住居址のプラン追求と第25号住居址の調査を開始する。第31号住居址完掘後写真撮影・実測作業を行う。

7月7日（晴） 第25・30号住居址を完掘し、写真撮影・実測を行う。他は昨日と同様調査作業を行う。

7月8日（曇） 昨夜の雨でB区の遺構確認プランの線が消えてしまい再確認を行う。第28・32号住居址の調査を開始する。第27号住居址精査後写真撮影・実測作業を行う。

7月9日（曇・雨） 空模様があやしく、しばらくして案の定雨になる。遺構検出を断念し、土器洗浄作業を行う。

7月10日（曇） 昨日の降雨がひどく遺構検出はすぐにもできそうでなかったため、B区の遺構プランの追求を行う。午後より第28・32号住居址の調査を進行する。第32号住居址完掘し、